

日州新聞にみる大正時代の西都原古墳群とその周辺（一）「資料篇」

— 西都原古墳群大正調査の基礎資料（3）「その1」 —

犬 木 努

【概要】

- ・本稿では、『日州新聞』に掲載された「西都原古墳群大正調査」に関する記事の全容を紹介するとともに、その内容を検討する。
- ・本稿は、紙幅の都合により二回に分けて掲載する。本稿（一）「資料篇」では、当該記事の全容を掲載する。次稿（二）「考察篇」では、各記事の内容を詳細に検討するとともに当時の西都原古墳群の調査をめぐる時代状況等について検討する。
- ・記事閲覧および抽出の対象とした期間は、一九二二（大正元）年一月一日から一九一七（大正六）年三月三十一日である。この期間には、大正時代に西都原古墳群で行われた「第一次調査」（一九二二（大正元）年二月～一九二三（大正二）年一月）から「第六次調査」（一九一七（大正六）年一月）に至る合計六回の調査期間が含まれている。
- ・『日州新聞』の閲覧は、国立国会図書館東京本館および宮崎県立図書館において行った。宮崎日日新聞社より刊行された『宮崎県郷土紙デジタルアーカイブ』と題する電子資料（ブルーレイ・ディスク、二〇一二年刊行）およびマイクロフィルムを用いた。
- ・『日州新聞』の記事は、全文データ検索等が不可能であるため、上記期間に発行された『日州新聞』の全紙面を縦覧した上で、関連記事を抽出し

た。発掘調査自体についての記事のほか、動向、告知記事、彙報、社説、講演要旨、連載記事、旅行記、観光案内なども可能な限り抽出した。また、同期間における宮崎県下の考古学や古代史、史蹟、展覧会等に関する記事も可能な限り収載に努めた。

・『日州新聞』記事の抽出・入力・校閲は全て著者が行った。

・本稿に掲載した『日州新聞』記事は、いずれも現行の著作権法による著作権保護期間（五〇年）を経過しているが、記事の掲載にあたっては著作権継承者である宮崎日日新聞社の許可を得た。

・西都原古墳群大正調査に関する新聞記事については、石川悦雄によって主要記事の概要が提示されており、先駆的な仕事として高く評価されるが、あくまでも一部記事の概要提示にとどまり、記事自体も悉皆的に集成しているわけではない（石川一九八八）。本稿では、西都原古墳群大正調査に関する基礎資料としての重要性に鑑み、当該資料の全容提示を目的とする。新聞記事自体の史料的价值はあくまでも限定的であるが、西都原古墳群大正調査に関する記録は、「調査報告」（宮崎県一九一五、同一九一七、同一九一八、同一九二八）、「調査写真」（宮内庁宮内公文書館所蔵、犬木二〇一四）および「宮崎県公文書」（田中一九九三）以外ほとんど残っておらず、本資料の学史的意義は小さくないものと思われる。詳細は次稿（二）に譲る。

【凡例】

- ・各記事は日付順に掲載した。同じ日の記事を複数抽出した場合は頁順に掲載した。同じ頁から複数の記事を抽出した場合は、原則として「上から下」「右から左」の順に掲載した。
- ・各記事の冒頭には、見出し、年月日、曜日、朝夕刊の別、通算号数、頁数を記載した。
- ・漢字の用字および仮名遣いは、原則として原文に従い、振り仮名は省略した。
- ・誤記・誤植・脱落等はそのまま残し、当該箇所の上に「ママ」と記した。
- ・記事の一部を抄出した場合、省略箇所に「省略」「以下略」「前略」「中略」「後略」と記した。
- ・平仮名の繰り返し記号は「ゝ」「ゞ」、片仮名の繰り返し記号は「ゝ」「ゞ」に統一した。
- ・句読点や括弧など文中の記号は、一部を除き原文のままとした。各種の合字は原則として開いて記載した。
- ・資料の保存状態などに起因する判読不能箇所は□で示した。前後の文脈などから推定できる場合は、□内に当該文字を記した。
- ・公人と見做される場合等をのぞき、地番等、個人情報に関わる記載は原則として記載していない。
- ・記事の一部には、現在では差別表現につながりかねない表記等も見られるが、記事が書かれた時代背景などを考慮し、原則として原文のまま掲載した。不当な差別や偏見を助長することなく、歴史的事実を正しく評価するための一助としたい。

【関連文献】

- 石川悦雄 一九八八『西都原発掘七五周年展』宮崎県総合博物館
- 犬木努 二〇一四『宮内庁書陵部所蔵『西都原古墳発掘実況写真』(一)―西都原古墳群大正調査の基礎資料(2) (その1)―』『大阪大谷大学紀要』第四八号、大阪大谷大学、一五五四頁
- 犬木努・近藤麻美 二〇一三『古墳に埋置された碑石―西都原古墳群大正調査の基礎資料(1)―』『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第九号、宮崎県立西都原考古博物館、三一―五一頁
- 郡司松男 二〇〇〇『県民文化の発展』『宮崎県史 通史編 近・現代一』宮崎県、一一四八―一一六三頁
- 斎藤忠 一九八三『解説』『宮崎県西都原古墳調査報告書』西都市教育委員会・西都原古墳研究所、四―三〇頁
- 田中茂 一九九三『西都原古墳群発掘関係史料』『宮崎県史 資料編 考古2』宮崎県、九一四―九七四頁
- 藤木聡 二〇一三『大正時代の西都原二〇二号墳(姫塚)の発掘調査』『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第九号、宮崎県立西都原考古博物館、五二―六〇頁
- 宮崎県 一九一五『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』
- 宮崎県 一九一七『宮崎県西都原古墳調査報告書』
- 宮崎県 一九一八『宮崎県史蹟調査報告 第三冊』
- 宮崎県教育委員会 一九九一『男狭穂塚・女狭穂塚等資料集』
- 榑木郁朗 二〇〇〇『ジャーナリズムの発達』『宮崎県史 通史編 近・現代一』宮崎県、八八九―八九九頁

付記

校正作業において田中健一氏の御協力を賜った。心より感謝申し上げます。

【資料篇】

一九二二（大正元）年

■日向を顯彰する古代史講演会 一九二二（大正元）年一月一日（土）朝刊「三四六九号」三頁

有吉知事が豫ての希望は本縣下の古墳を始め諸舊跡に就きての信用すべき調査を現時の代表的學者により成就するにありしが種々の交渉を経た結果として今回愈々其の事の進捗を見ることとなり京都大學の濱田耕作氏宮内省の増田于信氏東京大學の黒板博士打ち揃ひて來縣下穂北村西都原の古墳を發掘し其他の踏査をも爲す筈に決し且つ喜田博士も古代史研究の爲め來縣のこととなるべければ日州教育會は秋季の總會を十二月に延期し各諸博士來縣の頃に開くことに定め諸博士に請て三日間日向を顯彰する最も有力に確實に且つ光輝あるべき古代史大講演會を宮崎中學の講堂に開くことに一昨日の常務議員會にて決したるにより知事は更に夫々交渉を爲す筈にて先方の回答着し次第再び常務議員會を開き次第順序及び諸般の準備を議し會期その他の詳細は日州教育會雜誌（十一月號）に掲げ尚ほ新聞紙上にて公表する由なるが右濱田氏は滿洲朝鮮等の古代史に於て特に精核の聞えあり増田氏は古典に於てのオゾリチーと目され御陵墓の事に通じたる人黒板氏は古文書學を得意に考證に於て獨擅の土喜田氏は歴史地理に於て造詣殊に深き人なれば是等の諸學者を同時に聘し皇祖御發祥の地に於て大日本帝國古代史の講演會を催すなどは縣民の熱望する所とは言へ容易に行はるべきものに非ざる可を知事が何事も遠慮と深き考えの上に計畫されたる爲にして日州教育會が此好機を逸せず比較的豊富ならぬ經濟を巧く按排し教育社會及び一般に此の稀有の講演を聞かせるに至りしは本縣の爲に祝すべきことにして大正に入りて精神的文明輸入の第一著といふべきなり因に常務議員の出席は兒玉末久淺井小形川上小藤佐竹山口山川伴野加藤諸氏にて幹部よりは佐竹主事若山萩二氏出で市川副會長出席有吉會長議事を整理したりと

■竹頭木屑 一九二二（大正元）年一月二日（月）朝刊「三四七一号」二頁

年末行はる可き筈の古代史講演會は場所と云ひ講師と云ひ恐くは最も崇高にして且つ有益なる講演會であらうと思ふ▲講師は何れも現代史界に於ける明星であつて各方面から古代史の研究をして居る人々である爾も其人々が日向の遺跡を探究し然る後講演會を開くのであるから以て其内容と實質とを知り可しである▲遺跡の探究は豫て有吉知事の企畫された事であるが愈々決定して居は京都帝大の濱田博士宮内省の増田博士東京帝大の黒板博士に喜田博士の諸氏であつて此博士が三日間講演さるゝのである▲縣下の人々は史學上此重大にして貴重なる機會を逸過してはならぬ▲【以下略】

■古蹟巡り 紫洞生 一九二二（大正元）年一月二六日（土）朝刊「三四七六号」一頁

十九日晴、郡早見君、日高清一君、吉野助役來訪、役場に行て三輪村長に面會いろく用事あり、其外用向き大方濟み、郡、日高、長嶺の三君と用水路を見に行き序手に川面に出る、川越一二氏先づ來てあり舟に乗る例の鮎あり特に岩切雄之助氏寄贈の分太し、稍サギツたれど芳脆口に媚ぶ、清澄玉の如き水上の行舟、冷快言ふ可からず、四時過歸る。

二十日晴、早朝岩切直七君を訪問し用事を済ませ一旦宿に歸る、聽て馬車來る、金丸校長、日高清一君等見送て下さる、長嶺君も同伴すると同車、息子秀君も共にである、馬車は三納に向ふ、先客婦人二名、高岡の伊達氏の細君たちである、都於郡一圓の丘陵を右方に眺めて走る、三財川の橋落ちて渡船の不便あり、三納には十二時過着、直に愛宕山に登る、巫女黒木キマと言ふ人に逢うて話を聞く、賽詣者頗る多し、伊達氏細君達は何か考へて貰はれる、時間少々長くなりて二時半三納を出る、三納の地は奥に木材薪炭椎茸の産額多し、由來佐土原に搬出して福島に届けて居る、汽車開通の曉は快走一呵悉く妻町に落着くのである、四時妻町着直に大阪屋に泊する、本部大次郎井上勇雄、兒玉宗太郎君來訪あり、夜に入りて木下醫學士來る、それから吉永署長も來る、懷舊談に夜をふかす。

二十一日晴、兒玉任藏氏來る、井上勇雄氏亦來る、八時過より井上氏案内にて笠狹を巡る、都萬神社の傍から穂北小學の右手を登て岡に出る、最初に無戸室の跡を觀る、方十間位の平地で奥に雜木が五六本立て居るばかり四面は畑である、所謂木花咲耶媛命が彥火火出見尊たち三神をお産みなさつた産室の趾である、三町許西に子湯の池がある、雜木雜草茫々古池で周圍凡そ二十間、右三神をお洗ひに成た處、難有く拜觀する、合ひそめ川と言ふがある、少許の水が流て居る、皇孫と媛命と始めてお逢ひなさつた故蹟所謂逢ひ初めの場所である、西南に巡ると阪道に成る、登り詰むると最初に右方の陵が大山祇命の陵と稱せられてある前方後圓の制で前方が稍開いてある、一風違つた塚である、道の左方にもある、此邊惜しい事に松の木を伐採して拓いて居る爲め露天の裸陵と成り果てた、西に進むと乃ち 皇孫の御陵と呼ばるゝものがある、去年は前から今日は後から登る、目も覺る許り廣大森嚴な事である、外隄、隄、内隄を経て三段の陵形、一段目は平面二段目は傾斜三段目は頂上で平地に成る、陵根の周圍實に三百二十間、高さ六丈三尺餘直徑百間、素晴らしい廣大な事、陵上亂松點々、惜しい事に木風の爲めに朽ちたのが澤山、下ると所謂鏡形の柄である、嘗て堀廣めて社殿を建てた跡がある、柄を下ると又隄に成る隄の西は直に又御陵、これは稍低くて五丈八尺、内隄集回二百九十間、直徑實に九十間の高大なものである、俯仰多時松籙鳥語森として大初的面影を偲ぶ、靈境遂に長く居る可らず恭しく拜跪して陵の小祠に出る、鬼の窟、姫塚、横穴古墳を見て三宅神社に詣づる、神社の在る處即ち皇居の在りし處と稱せられて居る、年經物舊りて老樟古杉一旦朽滅境内深遠幽玄の趣はないが

何しろ有名な三宅神社森嚴の威靈ひし／＼と肌に通る、辭して井上氏宅に行く、金環曲玉石斧國分寺の瓦ホトギ劔矢の根管玉切り子玉等澤山に拜見した、共に又家を出て國分寺に行く、随分と舊りたる哉、何とかせねば餘りにヒドイ、木佛の背に寛政四年子八月十五日木食とある、木食は上人の名である、宿に歸つたは二時半。

井上氏は三宅神社累代の祠官である、御陵墓の爲め神社の爲め狐憤懣然二十餘年惡戰苦闘して殆ど其私費を零にしたと云ふ『日向御陵墓參考地保存會員名簿』の如き優に氏が辛酸勞苦の面影を髣髴して居る、兎も角も縣營鐵道の事あり、忘れられんとしたる笠狭の遺蹟は爲めに忽然として光明を得た、廣い世界に持來たさるゝに至つた、氏亦以て慰む可きであらう、氏は宮崎に行くとして辭し去つた。

吾輩の居間二階の八疊、其床の軸は例の谷本博士『若香魚や先づ一瀬川を上るべく』とあつて『く』やら『し』やら分からぬ、楣間の額も同筆『古陵有春色』枯木も追々花が咲くと言ひふのかナ。

■古蹟巡り 紫洞生 一九二二(大正)元年二月二七日(日)朝刊『三四七七号』四頁

廿二日例の快晴、本部氏兒玉君の來訪を辱うす、都於郡に行く、過日の風雨で橋が落ちて渡舟の不便言ふばかりなしである、時間の不經濟はまだ此邊では問題に成て居ぬらしい、デラデラと阪を登て都於郡に着く、役場に行て平田村長にお目にかゝる、役場員の案内を受け更に荒木千年君の同伴とで例の高屋に登つた、高屋は彦火火出見命の御陵と呼ばれてある、景行帝がお植ゑに成つた四本杉は明治十四五年の暴風で倒れた、正中元年伊東祐時が茲に築城した時、御陵と聞き神靈を山下に移したと云ふ事、立派な城趾である、西方は荒武村を俯瞰して三財三納の丘岡逶々蜿蜒眺望頗る雄大、東方は藪生ひ繁つて展望の便が無い、新田富田から穗北一圓にかけて手に取る様な廣大な眺めである相な、それを見る事が出来なかつた、巡觀一過轉た高古の咸に襟を正した。

荒木熊太郎君を訪ふ、病氣で寝て居られた、此處は甲斐巨入君の實家である兒玉宗太郎君長嶺和助君の出た家であつて、達者なお母さんも御座る、其人は吾輩の母の從姉である、極めて久しぶりにお目に掛る、尚又極めて久ぶり、然かも二十六年振りにお目に掛つたのは巨入君のお母さんのお安さんである、思ひ出せば夢の様である、祖父の忠太隠居と高岡から本莊を経て此處に來り數日間を御厄介に成た事がある其時お安姉さんは十三で吾輩は二つ下であつた、町内の娘連中の三味ざらへが有つて姉さんも出て何か弾いた、三味線にもたれ懸つた前髪の娘姿が夢とばかり浮んで來る、裏の倉の脇に『ホホッキ』が澤山赤く生つて居たのを土産にと言つて採て呉れられて、妹に持て歸つたのであつた、今其人に逢ふて久し振りの挨拶をする何と無く涙がコボれた、懐しい慕はしい、一通の挨拶が済むと昔の友達の言葉に成るのも矢張淺からぬ縁の親族と言ふは不思議なものであると思ふ、懷舊談や何や意外の厄介に預つて止めら

れるのを強て四時から妻に歸つた、途中頗る難義夜は本部氏、宗太郎君、吉永署長、安井中尉などお出下さる、中村の田中珊水君が來られた由、留守でお目にかゝらぬ、安井中尉は徴兵保險の事で、永井大尉と共に數日前より來妻、隣室である、夜は十一時寝る。

■笠狭御陵調査 一九二二(大正)元年二月三日(火)朝刊『三五二三号』二頁

兒湯郡下穗北村に於ける笠狭御陵調査の爲め宮内省及帝國大學等に對し有吉知事より調査員派遣方申請中の處愈よ派遣に決したる事は曩きに報道する處ありしが右は本月下旬來縣の由にて既に決定し居れる調査員は宮内省より増田于信氏、東京帝國大學より文學博士黑板勝美氏、京都大學より濱田耕作、喜田貞吉の諸氏にして内務省よりも多分派遣の事となるべしと

■古代史講演會 一九二二(大正)元年二月三日(火)朝刊『三五二三号』二頁

日州教育會に於ては來る廿日以後總集會を催し別項所載黑板博士等の來縣を機とし三日間に亘り古代史講演會を開く由にて目下其期日協議中なるが本縣に於て斯く考古學者の多數來縣せらるるは實に稀なる事なれば聽講者定めて多かるべし

■古墳調査 一九二二(大正)元年二月四日(水)朝刊『三五二四号』二頁

兒湯郡穗北地方に古墳古陵の多數存在せる事は既に世人の知悉せる所なるが今回黑板博士一行の全地方實地調査に就ては縣に於て豫め調査を遂げ置くべき必要あるを以て永友縣屬は去月廿二日より全地方に出張し一々踏査を爲し高鍋土木課派出所より隅田原工事、堀、江藤兩技手出張古墳墓所在區域内の實地測量並に製圖に従事し永友屬は一昨日歸廳し其他は猶ほ測量に従事中なるが永友屬今回の番號標柱を建てたる個所のみにて上穗北村童子丸地内二十基下穗北村西都原附近二百二十六基合二百四十六基に達したるが右以外の全村内及三納村新田村迄を計上すれば總數少くとも五百以上に達すべしと云ふ

■黑板博士來縣 一九二二(大正)元年二月三日(金)朝刊『三五二三号』二頁

東京文科大學教授文學博士黑板勝美學術取調の爲本日宮崎縣に出張命ぜらる

■古代史講演會と日州教育會總會 一九二二(大正)元年二月一日(土)朝刊『三五二四号』二頁

東西兩大學及び宮内省諸陵寮との共同調査に係る日向古蹟研究の爲め東京帝國大學より黑板博士今西學士京都大學より喜田濱田兩博士宮内省諸陵寮より増田氏の諸氏來縣の筈なるは屢々記載したる所なるが此機會に右諸氏に古代史の講演を請ふ事となり夫々

準備中なるが諸氏は十九日神戸乗船二十日未明に細島着全日牀當地着の筈にて二十二日より二十四日迄講演會を開く順序となり全時に日州教育會總會を開く事に決定せり下穂北に於ける古蹟の調査は講演會後の豫定にて其期間は今日より明白ならずと云ふ

■竹頭木屑 一九二二(大正)元年二月一日(土)朝刊「三五二四号」二頁

古代史講演會は天下の學者を集めて之れを日向の神蹟地に開くの點に於て實に天下の壯觀であると思ふ▲日向古蹟研究の事は兩大學と宮内省諸陵寮との共同事業で京都大學からは態々東京大學に人を派して大體の打合せをして來るゝ事になつて居るさうである▲東京の新聞には兩大學に日向古蹟研究會が出来た様に記載して居るものもあるた▲黑板博士は古文書等の點から濱田博士は古代史の點から諸陵寮の増田氏は國學の點から今西博士は其專攻の古器物の點から喜田博士は一般史學の上から調査さるゝのであらうが實に當代史學上の智識を集め得たものである▲今西學士は過日來滿洲朝鮮の古器物を研究して發見する所多く今回調査を終へたら來春は此種の研究の爲めに渡歐さるゝそうだ▲日州教育會總會を此時に開く事になつて居るのは機宜を得たものだが神職會でも夫々會員に參會を通知して居る▲再び得可らざる好機だから多數參聽する事にするが好い誰れでも參聽隨意であるから遠慮はいらぬ。

■古墳調査と一行 一九二二(大正)元年二月二日(日)金朝刊「三五三〇号」二頁

兒湯郡下穂北村所在笠狹御陵並に附近の古墳陵調査の爲め黑板博士一行來縣の事は既報するところありしが右一行は昨十九日神戸乗船今夜細島着明二十一日來宮神田橋旅館に入る豫定にて穂北地方への出張は日州教育會の依頼に係る古代史講演會の都合に依り未定なるも講演會が豫期の如く廿二日より廿四日迄續行さるゝとすれば廿五日となるべきも右は一向着宮の上如何に變更さるるやも知れざるも廿二日の講演丈は一行に差支なき由なるが妻に於ける一行の宿舎は大阪屋日向屋の内にて當地其他より全行する向も少からざる模様なれば旅宿は挾隘を告ぐるに至るべし尚ほ一行中喜田博士は都合に依り一兩日後るゝやも知れずとの事なるが一行の出迎としては永友縣屬本日より細島迄出張の由因に一行は人員増加し左記六名となれりと

東京帝國大學文科大學教授文學博士 黑板勝美
京都帝國大學講師文學博士 喜田貞吉
京都帝國大學文科大學講師 濱田耕作
宮内省御用掛 増田于信
東京帝大副手 文學士 今西 龍
東京帝大理科大學助手 柴田常恵

■古代史講演會に就て 一九二二(大正)元年二月二日(日)金朝刊「三五三〇号」二頁

頁

黑板博士一行の來宮を機とし日州教育會主催の下に來る廿二日より宮崎中學校講堂に於て古代史講演會開催の事は既報する所ありしが右は本縣に於て未曾有の事に屬し古帝州在住人士に取りては殊に興味多き講演なれば聽講者も隨て非常の多數に達すべき模様にて限りある講演會場に無限に聽講者を收容し能はざるを以て教育會に於ては豫め入場券を調製し置くの必要を認め本日迄に調製済となる筈なれば聽講者は縣廳内全會事務員に就き入場券(無料)を求め置くべしとの事なり

■三浦敏氏 一九二二(大正)元年二月二日(土)朝刊「三五三二号」二面

延岡の三浦敏氏は知事官房より招致に依り古代史講演會に出席すべく昨日出發細島にて調査員一行を待合はせ共に出宮すべしと

■黑板博士一行 一九二二(大正)元年二月二日(土)朝刊「三五三一号」二面

豫定の如く一行六人一昨十九日七時神戸より厦門丸に乘込みたる旨電報ありたる由なれば着宮は本日午五時頃なるべし因に講演會入場券は申込者非常に多き由なれば希望者は速かに申出でざれば満員の上は入場を拒絶さるゝ事あるべしと

■竹頭木屑 一九二二(大正)元年二月三日(日)朝刊「三五三三号」二面

當代史學の大家□□打ち揃ふて我古帝州を見舞はれて□□の事蹟を調査さるゝと云ふ事は□□花咲く思ひがして縣民の喜びに堪□□い事である▲太古は貌たり今遽か□□を精査する事も出来まいが六百□□散在して居る古墳の事であるから□□の制度を調査するばかりで有要□□業であらう▲縣民は一行の來縣を□□して建國創業の昔を回顧する所が□□のである▲〔後略〕

■黑板勝美一行來宮 一九二二(大正)元年二月二日(日)朝刊「三五三二号」五面

黑板勝美博士の一行は豫定の如く昨晩備零時細島着全七時全所出發午五時着宮一同神田橋旅館に入れり右一行には更に關係之助氏及大阪朝日の記者一名加はり都合八名となれるが右の内宮内省御用掛増田于信氏は一昨夜來宮廣瀨旅館に投宿せり

■博士一行慰勞會 一九二二(大正)元年二月二日(日)朝刊「三五三三号」五面

黑板博士一行長途の勞を慰する爲め日州教育會主催となり本日午五時より一行を紫明館に招待し歡迎慰勞の宴を催す由

■喜田博士を訪ふ 一九二二(大正)元年二月三日(月)朝刊「三五三三号」二頁

昨日早朝神田橋に黑板博士を訪問したるに時刻餘り早かりしにより轉じて喜田博士を

井上旅館に訪問せり今回の來縣を喜び長途の馬車旅行を慰めたるに博士は快潤に語る
 ▲陸行の増田氏は獨旅なりしにより車上如何にも無聊なりしならんが自分等が多人
 数なりしを以て談笑苦痛を知らず來着せり、お蔭にて日向の一面を知を得たり▲途中
 鬼ヶ窪及持田にて古墳を見たり既に破損せるものもありて詳細を知るを得ざりしも別
 に形の變りたる者に非ず、持田の船塚は上方地方にある普通の石棺にて別に特徴を見
 ざりし▲一行は明二十三日迄滞在して一同上穂北に引揚げ全地にて調査の調査の方針
 を決定する事となる可く自分は二十四日迄滞在して一行に加はり發掘迄滞在する能は
 ざる事情となるも知れず▲此今回の調査は意外に大仕掛けとなり初めは京都大學にて
 其話ありしに遂に東京大學、諸陵寮、博物館からも來る事になり京都醫科大學の足立
 博士も或は参加する事となるも知れず▲自分等の學會にては度々發掘をやる事もあり、
 又或向き／＼にて調査發掘等をなしたる事もあれど斯く各方面を集めて一團となし調
 査を爲したる事は余の知れる所にては今回を始めとす可し▲有吉知事は自分及び黒板
 博士等と全時に大學にありて知友なり朝鮮に在りたる前後は健康を害したる様なりし
 が當地は氣候温暖なれば全君の健康上には仕合なり學生時代より敏才ありしが本縣に
 於ては各種の計畫を以て縣の事業を開發しつゝある様なり二三日は特別暖氣なる由な
 るも東京あたりの氣溫に較ぶれば全く春の様なり云々（一記者）

■諸博士一行 一九二二(大正元年)二月三日(月)朝刊「三五三三」二頁

諸陵寮の増田于信氏を除きたる諸氏は一昨夜來着黒板博士一行は神田橋に喜田博士及
 大朝の五十崎氏は井上旅館に夫々投宿せり博士一行は途中川南村鬼ヶ窪及び上江村持
 田にて古墳及び石棺等の視察を爲し石斧及土器破片等を蒐集されたる由にて其爲め來
 着二時間遅れたる由なり

■増田氏の視察 一九二二(大正元年)二月三日(月)朝刊「三五三三」二頁

古蹟調査に來宮せる同氏は陸路來縣一昨日は神武宮に參拝し下北方の皇居の跡及古墳
 を視察し日没後歸館したり

■快談縱橫錄 一九二二(大正元年)二月三日(月)朝刊「三五三三」二頁

◎黒板博士等一行は、一昨夜來着、三浦敏氏隨伴といふ都合で、途次屢々車を停めて
 踏査した爲、豫定の時刻が過ぎ、神武社頭に出迎へた多勢の人も引取り、日州教育會
 の市川、石神、佐竹、若山の外に、兒玉、遠藤、上井、西田、新坂及び本社に加藤等
 は遅く迄待ち受けた。

◎増田于信氏は廣瀬旅館に、其の前夜より居られて、一昨日は宮崎宮及び其附近並に
 徴古館の調べがあつたが、田中宮司を始め、多田信氏の案内説明があつた、さて一行
 の顔が揃つたので、直ちに紫明館の晚餐會に赴き、梅の間でイロ／＼面白い話が出

る。

◎今西龍氏は文科大學副手で、帝國學士院囑託の文學士、柴田常恵氏は東京帝國大學
 人類學教室にある人、濱田耕作氏は京都帝國大學講師、肩書の多いのは關係之助氏だ
 らう、記者の探つた所だけでも東京帝室博物館囑託、東京美術學校囑託、靖國神社附
 属、遊就館整理委員といふ受持だ。

◎五十崎夏次郎氏は、大阪朝日の記者で今回特に同伴し、序に宮崎の縣營鐵道其の他
 の狀況を視察する筈で、増田氏と同宿、喜田博士は井上旅館投宿、一行が斯く別々に
 離れることになつたも旅館の室の都合等で、不便だが餘儀ない始末。

◎有吉知事の主人振に酒が始まる、學者揃ひの男振揃ひ、殊には都人士といふもので、
 お酌連が見惚れること一方ならず、殊に口々に斬新なのがコロ／＼と出るので、酔は
 ない内からモウ大笑ひ『柴田さん貴下はアナ御専門ですッてね』と誰やらが言へば
 『ハイまあ其んなものですね』と笑傾ける、すると喜田博士が『アナならば何でも調
 べる』と意味もなく言へば『アナかしこ／＼』と又誰やらが言ふ。

◎知事は喜田博士と同窓の、殊には趣味の似た、仲好の打解け話は情味が溢れる『喜
 田君と僕は教室で羊羹を出して喰つたことがある、そして眠くなると難問を出して
 先生を困らした』と言へば『御両所は惡少年でしたなあ』で一座がドヨむ。

◎何日まで居られるのか』と知事が問へば喜田博士が『イツ迄といふ豫定もないが、
 用が済めば早く歸りたいね』といふのを、『まあ悠り仕たまへメッタに來られる所ぢや
 ないから』と言へば『折角來た博士だから』と誰かゞ地口る。

◎諸先生の御専門を伺つて置きたうございますと記者が言へば『僕が言はうか』と喜
 田博士がニコ／＼して『今西君は古物屋、骨董商ぢや無いぜ、關君は古實家こじつけ
 に非ずさ、ソレから黒板クンは古證文を引張出して物にしたがる、濱田君も古物の方
 だね、増田君は無論、墓守で、柴田君はアナ堀だが一體この墓とアナとは縁故が深い』
 と言つたので又大笑ひ。

■古代史講演會 一九二二(大正元年)二月四日(火)朝刊「三五三四」二頁

第一日 牴の講演

第一日(二十二日) 牴の講演は増田于信氏及び喜田博士にして昨紙記載したる如し牴
 は一時より開演、第一席は今西文學士にして

太古と好古學

今西文學士

と題し一時四十分間の講演ありたり今其要を摘記すれば歴史の研究には三つの方法あ
 り第一は記録にして後世に史實を傳ふ可き文書第二は金石にて金屬又は石に刻みて後
 世に傳へたる者第三は遺物にして其時代の人の遺したる物品は勿論城跡、古墳若しく
 は山川と云ふ如き者なり記録なく金石なき時は遺物によりて知る外古き時代に遡りて

之れを知るの方法はなし左れば遺物より歴史を知る學問乃ち考古學は最も重要なものにして今日は非常に尊ばるゝに至りて大切な學問となれるなり今考古學に依りて之れを研究する時は古墳時代と石器時代とは頗る明白なる區分あり古墳時代の種族と石器時代の種族は全く時を異にして存在したる事を確め得たるなり我々の祖先は古墳時代の種族にして何處からか日本に來りたる事は明かなり然らば如何なる所より來りたるやと云ふに之れは極めて重大の問題にして容易に之れを斷定する事を得ず第一は日韓同域なりと云ふ説である其説に素戔鳴尊は朝鮮を征服して同國のソスモリに都を奠めたと云ふ説にして新羅の祖先壇君が祖ち尊なりと云ふにあれど之れ極めて通ぜざる説にして壇君とは平壤の別名を王儉と稱し之を祭りて壇君の稱號を與へたる者にして必竟平壤と云へる事なりとて痛快に之れを説破し又熊襲と新羅を同盟したりとの説を滑稽なる誤りに依りて傳へられたる者なりと舉證し最後に言語學上より同域なりとの説は必竟コジツケの甚だしき者なりと論じて種々例證を挙げ櫛觸の峰は洛東江の西の龜旨峰にも似たるを以て或は之れを高千穂の櫛觸峰とも云ひ得可しとて幾多の例證を以て之れを擲論し第二は支那説なるが、呉の太伯の子孫と云ひ或は徐福の子孫なりと云ふは支那かぶれしたる人の説のみならず中華の文明に媚びて唱へたる者にて笑ふ可き者なりと斷定し第三に南洋説も亦取るに足らずとなし多くは暗合若しくは全一傳來に外ならずと斷じ結論として我が祖先は何處より來りたるや不明なりと論じたり考證該博實に傾聴す可き者ありし第二席は、

上古の服裝 關安之助氏

氏の此講演は最も興味を以て聴衆に迎へられたり氏は古事記日本書紀の上に現れたる記述と各所に發掘し得たる各種の材料より上古の服裝を論じたる者にて二時間以上に及びて既に日没に至り上古の服裝を巧妙なる黑板畫を以て畫解し折々滑稽を交へて極めて流暢に説明したり先づ第一に頭髮より説き初め太古の男子の髪は美豆羅と稱すとして三種を三様に説明し之を梳ずりたる櫛の説明をなし當時の櫛は今の庇髮の櫛の様なものなりとて之れを記録に徴して説明し次は冠の説明に及び、之れにも各様ありとて種々圖解を試み次は耳飾の金環を語り次ぎに頸飾りに及び管玉曲玉の説明をなし次は櫛はハカマにしてズボン下の様の赤裏のものを穿ち釧として手輪を嵌め之れには日本になき大なる貝を以て作られたるものありとて各種の釧を圖様に示し其傳來の南洋にと説明し次ぎに上衣の製法を説き帯を締める事ありしを設宮し足帶、襪はシタウツにして今の靴下の様の者なりと語り靴もありたるが下駄を穿ちたる事ありと立證し更に武器に移り弓、矢、鎧、楯に及び日本人程弓術の進歩し且つ大なる弓を持てる人種なしと論じ鎧は甲（カウラ）にして其製作の巧妙なる事實に驚く可し蓋し非常なる文明國の製品なりと斷じ圖様を示して説明したるが長時間の講演なりしも最後まで熱心を以て聴聞したり

■古蹟調査彙報 一九二二大正元年二月二四日火朝刊「三五三四号」二頁

▲増田千信、喜田博士の兩氏は二十四日の講演あるを以て残り其他の諸氏は本日午後七時宮崎出發の筈なるが今後の日程左の如し

一、十二月廿四日午後七時宮崎發西都原巡視妻町宿泊、一同廿五日午後八時字坂本の第十八號墳の附近にて祭典を行ふ

右終つて各發掘に従事

全部結了後更に祭典を行ふ

出品物の處分

一、宮内省東大部京大部宮崎縣部の三部に分ち各大墳一個を發掘し小墳一二の發掘は各便宜調査する事

一、發掘模様は撮影の事

一、發掘の後には必要の外は原形に復することとし縣に於て之を行ふにつき發掘分擔者より其程度を申出づること

▲古墳の發掘は混雜を避くる爲め發掘場所に入る者に徽章を與へ、徽章なきものは繩張以外にて模様を見聞する事と爲す由なり

▲昨夜七時より日州教育會主催の博士一行の歡迎會紫明館にて行はれたり全副會長市川氏開會の辭を陳べ黑板博士の答辭ありて開宴主客歡を盡して散會せり

▲今西關らの諸氏は昨朝運が池の穴居の跡を調査すべく出張せり黑板博士の談に據れば以前は穴居の跡なりとの説なりしが今日は墳墓なりとの説に一定し居れりと云ふ

■黑板博士史蹟調査談 一九二二大正元年二月二四日火朝刊「三五三四号」二頁

來縣中の黑板博士を神田橋旅館に訪ふ博士は流に枕める樓上にありて語らる ▲全行の諸氏と話すのですが此樓上より眺めた景は丁度フタベストに行つた様で大淀川がダニューブ河で兩岸に市街のある所が能く似て居る夕陽に山川の映帶する所全く油繪の様であると景色を賞し ▲今回の史蹟調査は笠狭の陵墓が果して瓊々杵尊又は木花咲耶姫の御陵であるがドウであるかと云ふ事を知る爲めのみでない、知る事が出來れば夫れに越した事はないけれども夫れよりモツと大なる史學上の目的があるのである ▲天孫降臨の櫛觸峰が霧島であるか西臼杵の高千穂であるか夫れには種々の議論もある事である今日の知識ではマダ斷定する事は出來ないのである ▲學者の研究は勿論今日尚其途中にあるので種々の推定が出て夫れが段々變化して後には動かす可からざる者となる例令ばコロボツクル説の如きもソウである是迄はアイヌ以前にコロボツクルと云ふ人種が居つたと唱へて居たが今ではアイヌの古き時代のもので別に異つた人種ではないと云ふ説になつて居る ▲今回の如く各方面から出て古墳の調査をしたと云ふ事は珍しい事で曾てないのである自分は昨年從來の古墳發掘が學術的でない夫れでは調査とならな

い故に今後は之を學術的にしなければいけないと云ふ意見を發表した▲丁度其時古知事よりの交渉があつたので右の意見を以て答へたのであつたが知事も勿論全意見であつて今回の如く公然と學術的に發掘研究する事となつたのは喜ぶ可き事である▲古墳の保存と云ふ事は大切な事で史蹟調査會などでは是非實行したいと云ふ意見であるけれど何分金の入る事で今日迄實行されないのは遺憾である幸いに本縣には原形を壊さずに多く残つて居ると云ふ事だから先ず古墳臺帳とでも云ふものを作つて之れに巨細記入をなし開墾でもなす時は一々届出ると云ふことにしたいものであると思ふ▲本縣には三浦氏の如き研究者があつた事は實に喜ぶ可き事である其爲めに余等の如き研究者の爲めにはドの位便宜であるが知れない今後とても同氏の充分の研究と保存上の斡旋を希望したいものである▲今回來縣の途中中川南村字湯迫のカンカン原の松林中に高城の城主山田有信と云ふ人が天正六年に大友宗麟の兵と戦ひ敵味方の戦死者の爲めに招魂碑を立てた其の碑は高さ一丈で今に存在して居るけれど文字が磨滅して判然しないと云ふ事を聞いた▲之れは實に珍しいもので慶長年中高野山に建てられたと云ふ碑が一つ残つて居るが此外には見當らない天正六年と云ふと慶長より前である博愛主義と云ふ様な事を研究する方面にはコンナ碑は誠に珍らしいのである▲當地方には初めて來たのであるが暖氣で静かで實に好い所である旅館料理屋等も割合に進歩して萬事が清潔で居心地の好い所だ三十日も暇があつて思ひの儘に跋涉研究して見たらば面白からうと思ふ

■古代史講演會 一九二二(大正元年二月二四日火)朝刊「三五三四号」五頁

(昨日備の分)

古代の文明 濱田文學士

本日は古代の文明と云ふ事に就て申述べたい古代は野蠻にして今日と比較にならないと云ふ考があるが之は好い考であるが併し之れを野蠻國として見ては間違である即ち進歩せる人間と進歩せざる人間があるが併し之れを文明の人間と云ひ進歩せざるものを不文明の民族と云ふのである例せば亜弗利加の如き野蠻人として今日取残されて居るにあらざるか併し古代を以て直ちに當時を云爲するは誤謬と云はねばならぬ今日を以て直ちに進歩したりと云ふは是又大なる誤解である自動車の如き若しくは其他の如き新發明に係るものは勿論古代にはないが併し古代に於ても立派な建物や種々な美術があつて今日に於て眞似ることの出来ないのがあることに精神上の文明は著しきものがある故に今日の文明と古代の文明とは甚しき軒輊がないと云ふことを承知して貰ひたいのである考古學の研究は外國でも近世であるが我が日本でも明治時代からの事で我が日向の古代研究の如き又大正元年から始まつたと云つて宜しいのである近代世界的考古學の著しい點に於て御話したいエヂプト文明の如きナイル川の附近より勃興したので種々な美術が残つて居るがピラミットの如き技術の精巧と堅牢なる著しき

建築の發達を示して居るのであるが是れが四千年以前の建築でエヂプト初代の王様の如きは六千年以前で其時代は又精巧なる石器時代で尚ほ今より一萬年以上に於ても文明は發達して居たので今日より思へば實に驚くべきものがある又亜細亜の一部に起つた文明はエヂプト迄はないが併し之れも随分發達して居た之が則ちバビロンアッシリヤの文明と云ふのであるハミラビの法律の如き世界最古の法律で二百餘條あつて之れには道德上の事も記してあるので之れは今より十年前に發見されたのである希臘建築の如き宛も日本の奈良地方を歩くやうだが是皆紀元前千數百年の文明の遺物であるのである獨逸のおとぎ話に依つて考古の趣味を養ひ其話にある土地を發掘して世を驚かしたと云ふ事もある又クリート發掘の如きは十年間も之れを繼續して幾十萬の金を投じて居るが茲處より發掘されたる三階の建築の如き彫刻の如き實に精巧なもので此文明は紀元前三四千年前である又東洋文明の中心たる支那の如きは如何支那の漢時代及び六朝時代の遺物が近來發見されたが之れはトルキスタンが發見されたのであつて砂漠の近くより發掘されたる經文の如き隸書楷書中間の文字で記した實に立派なものである即當時に於て種々の文明がは入つて居たと云ふ事が窺はれる殷時代の如き石器を使用して巧な書が彫刻してあつたのである滿洲の如き石器時代の遺物若しくは煉瓦の如きがあるが而もアーチのあるのと内部の構造の如き著しく當時の文明が進歩して居たと云ふ事が知れる尚ほ當時漆器の發達して居たことも發見されたのである更に研究せば支那は三代以前にも立派な文明があつたであらうと思ふ竊て吾日本は如何著しき文明はなかつたと云つて宜しい多くは隋唐文明の輸入で奈良町時代の文明が平安朝時代の文明となつたのである其れから宋明清と云ふ風に輸入され又印度希臘等からも支那を経て輸入されて居るのであつて之れを同化するに努めたる過去に於ては特殊の文明はなかつたと云つて宜しい唯戰爭に強かつたと云ふ位なものである併し吾人は決して過去を研究するが之れを悲しまない過去に於て誇るべき文明なきは將來に向つて大に活躍すると云ふ事を意味するのである要は將來である吾々人間は將來に向つて如何に活動せざるべからざるか吾人は進むで近代の文明を作るべき第一にあるを覺悟せざるべからず化學的文明の完成は數千年後であると云ふ達觀意識がなくはならぬ我が日向は尤も古いが併し古い文明の國ではない天孫は他より文明を以て來られたが併し其れは元氣であつて四國などとは比敵しなかつた悪く言へば野蠻國であつたのである併し尊ぶべきは元氣で此元氣がなくては進歩しない新しく發達するのは必ず野蠻であつたのである云々

國造と國府の關係

増田于信氏

今回は古墳發掘立會の爲めに參つたのであるが私は今回初めて九州に參つたので何處に兒湯があり古墳があるのも知らないで知らぬ所に就て論定して見やうと思ふ併し

私の論定が意外のお叱を蒙ることがあるかも知れぬ其れは學問上の事であるからあらかじめ御承知を願ふ國造とは所謂國を治むる役人である宮庭に事へるのを伴造と云つたので國造とは今日の知事で其地方を治むる役人である然るに之れは畿内附近で地方までには御任命はなかつたのであるが開化天皇時代には外國との交通も著しく開化になつたが崇神天皇時代には一層發達し垂仁天皇時代には益々手をお擴げになつて種々の役目を任命されたのであるが景行天皇時代に九州を平討になつたが然るに尚ほ餘黨があつたので日本武尊を御遣しになり九州平定の後更に本國を御討平遊ばされたのであります。崇神天皇時代に四道將軍を置かれ景行天皇の時には東西を平定し之には皆皇子を以て任ぜられたので御勇武の皇子方は盡く全國に配置して御遣はしになり之れが爲め文明が普く行渡つたのである聖武天皇が御位に即かれてから山河の形勢によりて境界を置かれまして國造と云ふ今日で云へば辭令書を御渡しになつて始めて茲に國造と云ふのが一定したので其後漸次増加しまして繼體天皇の時代に至り百十二國になつて居る奥羽の如き邊鄙に至るまで立派に治まつて居たのである山河によりて境界を定めたる今尚ほ昔の如くして此日向の如きも敢て神代と山河の形勢は決して異なる所はあるまいと思ふ此境界の事に就ては日本計りでない支那でも同じ事で支那の本に書いてあるのに日本は百十二の軍尼があるで我が牧宰の如きもので又其下に伊尼冀と云ふものが附屬して居ると云ふ事が書いてある之れに依つても之れを知る事が出来るであらう蘇我氏出でて亂れたのを天智天皇の時代に至り制度を改めて郡縣政治となしたので隨て合併して全國六十六ヶ國に分つたのである此時に至り國造を廢して國府と云ふものを置く事になつたのであるが國府には矢張今日と同じやうに政府より人物を撰みて其長官に任じ之れを國守と云ひ其交代年限が四ヶ年となつて居たのであるが國には又郡と云ふのがあつて郡長は尤も人民と關係があるので其土地に明かなる國造を擧げて之れに任じ之れを郡司と云つたのである國造にして郡司とならざるものは宮司となつて神様の事を司るやうになつたのである例令は出雲に於ける千家家の如き其れであるサテ此國府と云ふ都は決して一朝一夕に出来たものでない必ず古い歴史を有して居るので國造の居た所に國府を置いたので其後に縣廳が出来ると云ふ具合に永い歴史を有して居るので各地方に於ける國府中の如き古器物の出来るのにも知らるゝのである私の縣の如き茨城と云ふのであるが之れは其昔土族の來襲を茨で防いだので茨城と名けたと云ふ事である國香將門の合戦地であつたと云ふ常陸府中の如き至る處古墳累累たりと云ふ有様である所で古墳の大なるは國造初代の墓地で應神仁德時代であらうと思ふのである何故に當時の墳墓が大きいかと云ふに當年は朝鮮とも交通して朝鮮人を使役して土工を盛むに營んだので仁德天皇御陵墓の如き生前に作られたので殆んど一里もある應神天皇の約五六町の丸い山であるのである地方の古墳の大きいのは國造初代の墳墓で最初任命されたものゝ墳墓であると云ふ事が判かる其れも其身分に應じて大小があつたのみならず埋葬品に就て非常に制限があつたのであるが國造初代は至

て大きく作ることが流行したので且つ貴重品を其中に埋めると云ふので之れが爲め父母の墳墓の爲めには破産すると云ふやうなものもあつたのである今此れから考ふると兒湯の古墳の如きは瓊々杵尊とか木花咲耶姫とか申す様な墳墓ではなからうと思ふのである御歴代の御陵墓の如き場所は判つて居ても什麼して判然しないのである一例を申せば神武天皇の皇兒の御陵墓の如き實際其れで唯此附近であらうと云ふのに止まつて形を存じて居ないのである孝元天皇の時代に至つて始めて形が判然するやうになつたのである孝元天皇の御陵墓は開化天皇の御代に出来たので之れは記録にあるのであるが是に至つて私は開化と云ふ御諡號に就て尤も深き意味のある事と思ふのである前方後圓は即ち此時代からであると云ふ事は蒲生君平始め之れを證して居るで大和地方ですらすの如き有様地方にある筈がない然らば兒湯の前方後圓は何かと云へば此麼である元來兒湯は行政上の中心で地方を治めるには適當の所であつたらうと思ふ日向の中でも贈噺郡が熊襲の居た所薩摩乃ち隼人は古來勇武を以て現はれ年々交代交替して朝廷の護衛に任じたものである後之れに國造を置かれまして薩摩の國造大隅の國造日向の國造とあつたのを大化年間に之れを廢して日向一國となし其後更に三ヶ國に分れたのである而して景行天皇は日向國に前後六年間御出でになつて其時御寵愛になつた御刀媛に出来た豐國別皇子を日向の國に御殘しになつたのである國造本義によれば日向の國造は應神天皇の時代に豐國別皇子三孫を以て國造となすと云ふことが見えて居ますが此豐國別皇子は極めて勇武の御方であつたと拜察するので天皇はこの皇子を茲に残し日向一國の治めに任ぜられたのであらうと思ふ然らば皇子は何處に御出になつて居たかと云へば其れは兒湯であらうと思ふ行政上の都合上他のものは移轉するが併し國分寺丈は移轉しない此點から考へると兒湯の古墳は或は豐國別皇子の御陵墓ではなからうかと思ふのである云々

■大毎記者 一九二二大正元年二月二四日(火)朝刊「三五三三號」五頁
大阪毎日新聞記者平島氏は阪口教授と同伴古墳調査視察の爲昨日來宮廣瀨旅館に投宿す

■阪口教授 一九二二大正元年二月二四日(火)朝刊「三五三三號」五頁
京大文科大學教授阪口昂氏は古墳調査の爲め昨日内海上陸神田橋旅館に投宿す

■古代史講演會 一九二二大正元年二月二五日本朝刊「三五三五號」五頁
第二日 牯の講演
日本石器時代の住民
柴田學士

石器時代とは石器の器具就中利器を使ふた時代で今日各地で發掘せらるゝのである此

時代は非常に永くて十數萬年續いてたか知れない然し民族に依りて長短がある歐洲に生活した全民族は早く全時代を終つたけれど臺灣の如き若しくは樺太の如きは近頃まで石器時代が續いて居た日本民族と石器時代民族とドウ云ふ關係があるかと云ふに或説では最初の日本民族も石器を使用して居たらしと唱へられたが今日では全く無關係であつて日本民族渡來の時は既に開明の域に達した民族であつて精巧なる器具を有して居たのである全時代の事を知るには發掘されたる當時の遺物を見るより外にない第一は貝塚である貝塚は其當時の人民が食用に供した貝殻を捨てたものが残つて居るのである厚いになると一丈五尺にも及ぶのがある其中から石器及び骨などを發見する次ぎは焼物である日用品宗教的に使用したものと見可きものがある埴と同一視せられた人形も發見さるゝ夫れは甌具ではなく之れも宗教的に使用されたものゝ様にある焼物の内では最初の日本人の製したものは模様が一定して居つて輻輳細工のがあるが石器時代のは輻輳細工ではなく且つ模様がいろいろ異なつたのがあるとして陶器と磁器との遺物に就きて詳細の説明を試み本縣には石器の非常に多き事は今回初めて知り得たと云ひて其保存を必要なりとなし夫れより當時の石器民族は何者なりしやと説きてアイヌ説と非アイヌ説ありと論じ平井博士小金井博士は貝塚中より人間の骨を發見し之れより想像してアイヌなりと斷定したが反之坪井博士は非アイヌ説を採られて居る臺灣の生蕃と人類學上同一であると唱へられるは足立醫學博士であつていろいろの學説があるモルルス教授が肥後の八代の貝塚の中から發見した人骨に依りて人肉食ふ人種であつたと唱えられて居る食人種と云ふのは必ずしも人肉食ふと云ふのではない近親の者の死亡した時に肉を腐敗せしむるに堪へずとて食ふのもある又は愛情の爲めに食ふのもある或は敵の肉を食ふのもあるが要するに全族相食むと云ふ事はない様である去れば偶々其骨があつたとて却つて其種族のものでないと云ふ事も云はれる「中略」貝塚及び石器の分布などに就きて説明を爲して終れり乍一時より三時まで約二時間なり

明治時代を論じて古物保存に及ぶ

黑板博士

此講演は三時より五時半に及びたり博士は先づ日向に入りたる觀想を述べ新舊様の思想の浮べるありとて極々古國でありながら宮崎の市街は何となく新しい感がするとして共進會三十二年の大祭會四十年の全會等が日本の二大戦争によりて一段の文明を増進したる如き段落を爲すと述べ此新舊の思想は調和せしめざる可からずと日向の前途を祝福し明治時代の日本の文明に善惡両面とありて善良なる方面に就き述べ次ぎには此爲めに惡結果を來せりとて各種の方面より詳細に明治文明の缺點を列舉し論一轉して史學の發達に就きて陳べられ破壊時代より史料蒐集時代に及び今日は即ち史料蒐集時代なりとて詳細なる講演あり最後に古物保存に論及されて謔、宗教的の迷信、石器時

代の遺物、地理上には海岸線、河川流域考古學上の材料としては、皇室に關する皇居の跡、御陵、國民的のものとしては、古墳、古城、神社佛閣等の者は之れを保存し保存することが出来なければ先ず圖面記録を残して置く事に就き親切なる説明あり既に日没となりたるを以て講演を終つた

■古墳調査彙報 一九二二(大正)元年二月二五日(水)朝刊「三五三五号」二頁

▲穗北の歡迎 今回の古墳調査に就て地元なる上下兩穗北村にては兩村長及井上勇雄氏等十餘名を委員に撰び歡迎其他の準備に當らしめたり黑板博士一行の宿所は大坂屋、知事一行は日向屋宮司一行は若松屋に撰定せり

▲發掘人夫は前科無き者のみを選び志願者を採用する事となりたり

▲歡迎會 兩村發起にて一行の歡迎會を催す計畫あり

▲出迎 三宅神社々掌井上勇雄下穗北村長河野益兩氏は出迎として來宮、昨日一行と共に陵墓地に向へり

▲黑板博士一行は豫定の如く昨日午後七時當地を出發西都原に向へり

▲山内兒湯郡長 古代史講演の爲め來宮し居たる山内兒湯郡長は昨日古墳調査一行と共に下穗北に赴けり

▲知事出張 有吉知事は西都原古墳調査視察の爲め昨日午前より出發せり

▲本山大毎社長 大阪毎日新聞社長本山彦一氏は二十三日午後七時神戸より木浦丸に乗船細島より上陸來縣穗北古墳調査狀況を視察し全所にて來縣中なる全社記者東野善太郎氏と會し當地に引返し都合に依りては霧島登山の壯舉をなす由なり

■竹頭木屑 一九二二(大正)元年二月二五日(水)朝刊「三五三五号」二頁

大正元年の最後の旬日の宮崎縣は古香天地に満ちて世は再び太古に逆戻りした感がある▲連日の大家先生方の講演は何れも二三年前若しくは十數萬年前の事のみで身も心も神代若しくは石器時代に染まつた様だが人に會ふても社に歸りても二三人寄りさへすれば何れも古墳だ石器だ土器だと丸で神武東征以前の日向に還つて仕舞ふた▲東西大學、諸陵寮、博物館等聯合しての發掘で會てコンナ大仕掛の事はないと云ふ事で大阪の新聞社は勿論の事近縣の新聞社まで大舉して集つて來るらしい▲之れは學問上有益の事であるは勿論の事だが日向の紹介として此上もない機會であると思ふ▲大正改元の當年に斯る大仕掛の古史研究が起ると云ふ事は何かの因縁であらうと思ふ▲

〔後略〕

■古代史講演會 一九二二(大正)元年二月二五日(水)朝刊「三五三五号」五頁

(昨日の分)

太古の日本 喜田博士

本日は前回の申残を御話します天孫降臨以前の人民は如何なる種族であつたか今日ではまだ研究が届かないのであるが當時はエゾ卑人土蜘蛛の如きものが各地に居たのであるが出雲を中心とした頗る開けて居た種族や支那の文明を傳へた地方もあつたのであるが古代文明は之れにても認められて居たと云ふことを御話し致して置いて置いたが又當時倭人と云ふのが九州地方に居たのである此倭人の支那の歴史に見へたのは天孫降臨以前で支那と交通して居たのは周の代に於て已に見へて居るのである支那の本に蓋は許遠の南倭の北にありとあり又惡浪海中に倭人ありとある壇石塊が倭を撃て湧川に連れて歸り今に其邊に倭人ありとあり又汗人とも云つたのである此倭人の事は委しく書いたのは魏史である之れに倭人は大海の中にありて百餘國あるとあつて其中三十國が來朝したとある尚ほ韓の南は倭に接すとありて狗韓國より海を渡りて對州松浦灘の津に至るとあつて種々澤山な強國が出て居るが其中で一番強い國が女王國とある今魏史にある倭人の風俗を記したのを見ると文身して居るとある併し古事記などにある上古の風俗は文身を蔑むので文身したと云ふ事はない倭人は何故文身するかと云ふと龍の外を避けむが爲めに文身するとある最初は左様であつたかも知れぬが其後は飾になつたのである唯漁師丈は文身した云ふ風が見てゐる其れから倭人は冠を戴かず衣物は縫はずとある併し日本人は上古より冠も戴けば衣物も着て居る唯みそきをするのと塚を造ると云ふ事は似て居る又人に逢ふて拍手すると云ふこと又婦人にして淫せず妬せずとある所で卑人には赤い物を好むと云ふ風があつた赤い鉢などの今漁師間に残つて居るのは其れである依て考ふに魏史に記してあるのは此卑人ではなからうかと思ふのである日本古代に於て女の酋長が多かつたことは上古の歴史に明かである倭人の習俗は日本人とは違ふ然らば日本人は如何なるものかと云ふ事が起る近來人類學者の研究して發表する所によると馬來人や支那人や其他に似たものがあると云ふのであるが併し其れは種々なる種族が居るので左様思はれるのも無理はない各地にある種族は所謂天孫種族化したのである卑人丈は後世でも認められて居たので大隅薩摩は別になつて居たのであるが併し日向は左様でなかつた日向の曾の君と云ふのがあつて日向にも卑人が居たと云ふことを云つて居るが今考古學者の説によると日向大隅薩摩地方には天孫種族の墳墓と云ふものは一つもないと云ふことになつて居る神武帝東征に當り武士の頭梁大友氏の祖先の率ゐたものは其種族に從つて行つたので之れに從つて各所に勇戦したのは久米部の種族とある卑人と久米部とは甚だ克く似て居るが如何にして久米部が天孫種族に隨つたかと云ふ事は有史以前の事で判然としない併しエゾの天孫種族に從つたと云ふ事は明瞭であるエゾ人を兵に使ふと云ふ事は昔から行はれ尚ほ舍人として使はれて居たので早くより王化して居たのである俘囚乃ちエゾの熟蕃を内地に移した事も古くからの事で延喜式にも俘囚料と云ふのが出て居る之れで以て養つてあるエゾ人は丁度王化してより三代目である又俘囚は各種の方面に使用されて始終討伐に任じたのであるが當時エゾ人の勇氣は一以て干に當るとある其一例を擧ぐると僅か

四十人のエゾ人を征討するに國府の兵一千を以て勝たず更らに援兵數千を朝廷に請ふたとあるに見るも明かであるエゾ人懷柔策としては姓名を與へたので即ち安部とか大友とか云ふのは其れであるエゾ地方の古くより開けて居たのは前九年の役當時に於ける義家貞任の和歌に見るも明かである又兵にも餘程長じて居たのである貞任を亡ぼしたのは義家ではなく義衡である義衡を亡ぼしたのも義家でなく清衡である是れに見るも奥州でエゾの進歩して居たのと勇猛であつたのが知られる本國人は倭屋にあるのにエゾ人は金殿玉樓の中に居たと云ふ時代もある然らばエゾ人の開化したのは何時代であつたかと云ふと鎌倉時代に於ては賴朝は之れが平定に際して之れを神佛に祈誓したとある橘南溪の東行西遊紀にもエゾ人の事が出で居る所で今日は已に悉く日本人となつて居るのである卑人は天孫種族と早く接觸しエゾ人は天孫降臨以後に種族に接して王化したのである上古日本が支那と交通したのは呉の國で雄略應神の朝である雄略帝の國書に東毛人を征する六十餘西醜人を征すること五十五海を渡りて九十五國とあるこむな風で段々隨つて來たのである日本では印度地方の様でなかつた開化したものは何れも相當の取扱をなして之れを賤民としたものはない要するに天孫種族は同化せしむるの能力を有して居たので大海は細流を撰ばず益々各種の種族を同化して終つたのである。

古代と現代 坂口教授

古代と現代の關係に就て少しく述べん人生は一体歴史の法則に支配されて居るのであるが人生の法則には絶体的吾人が避くることの出来ない法則で向上とは異なる向上は信仰である法則とは傳來と個性の相互作用で傳來即ち傳へ來るで是を繼續すると云ふので例令ば遺傳の如き家産の如き是れ傳來である地方にも之れがある個性は獨特の性質で之れを他に向つて發揮せやうと云ふのである此両性は相互に集つて一つの物をなして居るので一方が強れば其れは停滯して居るので支那の如き春秋戰國に於ては個性が非常に發達して傳來が弱かつた併し個性の著しく發達したる者に佛國の如きは革命が起こつたと云ふ風で此両性は必ず和一致して平等に進まなければならぬ此両性の調和は尤も必要である現代を完全に發達せしむるには如何にすれば宜きか例へば古墳研究に就て言へば其目的に於て第一は精神上第二學術第三は地方の開発を計ると云ふことが肝要である會長のお話に妻町は日本の埃及であると云ふことがあつたが是は面白からうと思つて此様な演題を撰むのですがエヂプトとは細長い國で砂山の後は砂漠であるが茲處の文明は此附近の河畔より五千年以前に起こつたのであるが其後種々之れを研究するものが出來たので近來は研究の出張所が設けられ其所に本部があつてエヂプト發掘財團なるものが組織されて居るのであるそこで餘程當年の文明も研究も出來るやうになつたのである然らばエヂプトは以上擧げた三個の目的を達して居るか

ない又ギリシヤは日本の九州に當る所で而も古蹟の多い處で此國は今より八十年前に獨立國が出来た處で其以前は亡國であつたが其後種々の學者が出て其傳來によつて遂に土斯古より獨立したのである全國は海岸線が細長いので海軍も必要で又考古學の研究も必要と認められ全國では富籤を設けて之れが充實を期して居る是れは現に實地に目撃した所で希臘は傳來精神上地方の發達と云ふ事に十分其目的を達して居るが唯欠點としてはまだ獨立國として十分でない一事である獨逸人の傳來は中古に於ける帝國で個性の調和だ伯林に於けるホーヘンツォルンと云へる博物館は古來からの歴史を直覺的に覺知しむる様になつて又一の公園には各君主の像と時代の人物とがあつて實物的教育の下に新獨逸帝國と云ふ事が直覺される様になつて居るのでは是は教育上尤も必要であらうと思ふ又森林と交通機關の完全なのは至れり盡せりで獨逸ではことに郷土美の發揮に努め祭日に當つては時代劇と言ふのをやつて居る京都でも時代祭りと云ふがあるが併し一向精神が這入つて居ないのは遺憾であるかく獨逸は古代を研究して古蹟の保護發揮に努めて居るのである以上述べしエチプトと云ひ獨逸と云ひ希臘と云ひ中にも獨逸は總てが尤も相調和して發達して殆むど間然する所がない即ち我日本の如きは獨逸の如く祖先の古蹟宣揚に就ては大に努めねばなるまいと思ふ我國は萬世一系の國で精神教育も尊い點に歸着して居るのであるが當地の如きは皇祖發祥の地で古代を研究宣揚するのは精神教育上資する所決して少なからざるべきを信ずるのである唯古代を研究するに就ては是を現代に應用すると云ふこと、又一面に於ては世界文明の大勢に眼を注ぐと云ふ事が尤も肝要である。

■公私來往 一九二二(大正)元年二月二五日(本朝刊)「三五三六号」五頁

▲永友縣屬 古墳調査の爲昨日より兒湯郡へ出張

▲江藤技手 全上

▲星野技手 全上

▲田村事蹟調査員 古墳調査の爲昨日より兒湯郡へ出張

■古蹟調査 一九二二(大正)元年二月二六日(本朝刊)「三五三六号」二頁

黒板博士、増田于信、濱田講師、今西文學士、關安之助、柴田常惠諸氏六名の一行は、齋藤警務長、三浦敏氏、永友縣屬、田村事蹟調査員、江藤星野兩土木課技手、黒田技手、松葉縣參事員、大阪朝日新聞記者等と共に出入迎人黒木重藏、兒玉人藏、河野豊、今井德藏氏等と馬車三台を連ねて二十四日午前九時五十二分來佐、増田、關、今西、三浦の四氏は下車して同地釈迦牟尼堂を檢視され聴て十時十分一行發車宗宮中教授、布留川師範教師、井上高女教師、青山郡中教師、和田本社支局記者も加わりて穂北に向ひ出發せり島田下穂北署長、河野下穂北村長等は船橋迄出迎へ兒玉恭平、河野兵次郎、黒木財祐、本部直一氏等の妻町有志者の多數は瀬口渡場附近一面に堵列して出迎へた

り午前十一時十分表町着、一行六名と警務長永友縣屬の諸氏は直に大坂屋旅館に入り其他の人々は日向屋旅館に投宿せり晝餐を濟して一先休憩、零時二十分一同旅館を出で井上三宅神社々掌先導にて西都原の御陵に向ふ、山内兒湯郡長、下穂北村長、助役、則松小學校長、岩崎妻局長、須田巡查部長外巡查二名、本部大次郎、杉田利平、本部直一、河野藤一諸氏の有志者更に是に附隨して案内旁々從ひたり御陵目標の在るは第一號より二百四十七號にして、初め第一號より第十八號を檢視し、第十八號陵に上りて霎時瞰下祭典場を定むべく協議したり此時永友都農神社宮司、伊東鶴戸宮々司、都萬神社々司も來りて協議に加はり式場を定むる爲め鬼の窟附近より漸時西方を逍遙したるが終に可愛神社南側即瓊々杵尊御陵と木花咲耶媛尊御陵の前面堅十二間、横十間の平地を撰びて東方に向ひ祭壇を設くる事に決定し、夫れより前記男狹穗塚、女狹穗塚を檢視すべく一同は山野を跋涉して陵に上り、女狹穗塚上に於て少憩此間數回黒板博士は撮影せり一行非常に疲勞して見えたり之より再び式場に戻り爰にて午後二時半より増田、關氏等は江藤土木課技手案内にて田村氏と共に北方高塚方面に赴き黒板博士、濱田講師、今西文學士、關、柴田氏等は永友縣屬案内にて南方諸陵を見舞ふべく二手に別れて赴き何れも迂回して三宅村に出で、五時三十分頃各旅館に歸りたり右に就き妻町は旅館を初め有志者は目まぐるしき混雜にて市中活氣を呈したり一行の爲め二十五日夕より慰勞會を開催せらるゝ筈也▲有吉知事は二人曳腕車に乗りて午後四時五十二分來穂多數有志者に出迎へられて直に日向屋旅館に入れり▲喜田博士阪口教授東野大毎記者は馬車にて午後五時二十一分來妻、黒木重藏、兒玉恭平、田村虎吉、本部平太郎諸氏瀬口川渡場迄出迎へ共に來着直に大坂屋に入れり(二十四日支局報)

■公私來往 一九二二(大正)元年二月二六日(本朝刊)「三五三六号」五頁

▲新坂縣屬 古墳調査の爲一昨日より兒湯郡□出張

■土中の日向(一) 藏六 一九二二(大正)元年二月二七日(金)「三五三七号」二頁

◎日本現代の碩學が快を聯ねて來縣し連日古代史の講演があつたので、噂は遠近に傳へく、西都原の發掘が凄い人氣だが、譯の分らぬ輩の評判に、却て警句があつて『神様を掘り出すげな』と言つた百姓がある、成程おもしろい、三千年來隠れてござつた御方を掘り出し申すのだからと感じ入つた、其所で此の紀行に題して『土中の神』としやうとも考へたが、知事の言はれた『妻は日本のエチプト』あの斬新な而して深き／＼思ひに入る情趣から取つて『土中の日向』としたが、一行の意氣は豈啻に『土中の日向』のみならんや、當に『土中の日本』若しくは『土中の世界』を掘り出すに在ると思ふ。

◎序言は斯なことにして、さて僕が一行の跡を追つて俤を馳せたのは、廿五日の朝、

諸陵寮兩京大學博物館の共同事業たる

▲諸陵寮の増田氏兩京大學の黒板、喜田兩博士阪田教授、濱田、柴田、今西の諸學士及び博物館の關氏を併せて八人何れも史界のオーソリチーにして、太古史專攻の大家先生なり今回日向國西都が原の古墳を發堀して一つには古き帝都の迹を探らんと欲し一つには考古學上の參考に供せんとて斯くは天下の粹を抜きて我日向の古帝都に集れるなり一昨廿五日を以て其最初の鋤を入れて古墳發堀なる興味ある事業に取りかゝりぬ

▲古墳發掘の行はるゝ以前に西都ヶ原は瓊々杵尊を葬り奉ると稱する男狹穗塚正面の芝生にて壯嚴なる祭典は執行されたり此祭典の命名に就きては諸博士間に異論ありしが遂に古塚祭と名づくる事となりたり今日^輔八時齋主以下着席跋式の儀あり供饌を終りて齋主祝詞を奏し有吉知事玉串を捧げ調査の諸員禮拜あり撤饌の上式を終る斯る祭典の陵墓に行はれたるは他に餘り例なき事なりと諸氏は語り居れり

▲発掘の古墳は諸博士談議の上三個所と評決されたり第一は木花咲耶姫の御陵と唱へらるゝ、女狹穗塚の西北に當れる就中大なる圓塚にして右女狹穗塚の陪塚ならんとの説あるもの之れは御陵參考地となれる場所の附近なるに依り宮内省方面の發掘と稱して可なる可く即ち縣の調査になれる第百十號古墳なり増田關の兩擔當する第二は原の中央に當れる場所に地位せる第十一號古墳にして立派な前方後圓にして御陵に次ぎて大なる墳墓なり黒板博士阪口今西の諸氏擔當せる第二十一號古墳にて小学校裏手の道路を上れば原の上にて、路傍に當れる極めて小なる墳墓なり柴田、濱田諸氏擔當する喜田博士は遊軍として各方面に注意しつゝあり

▲着手されたるは、輔なり。人夫は地方より志望者を募り、身分あり品行正しき者を選びたりしが、中に中學生及小學教員なども研究の爲め混じ居れりと云ふ。人夫頭を置き各墳墓間には傳騎ありて諸方面の音信を通ずるなど、手配り中々行届けり。晝食頃までは別に何等注目す可き者を發見せず。午二時頃となりて多少の發見物ありたり。

▲第一圓塚の發掘方面は此類の古墳は多く南方より北方に向つて墳道あり其奥に石柵あるを例とすればとて右の方向に周圍より漸次頂上に向つて堀鑿する方法を採れり然るに周圍より三尺ばかりの所にてカチリと歟に當りたる者あり點見すれば圓筒なり圓筒は乃ち埴輪にして之れを左右に探り行けば一尺許を距て、塚の周圍を繞りて列べある事を發見し得たり更に頂上に向つて堀鑿を續くるに頂上の平たき場所に密生せる芝生を除けば圓筒の破片と見可きもの出づ頂上に圓筒を置くは古例あり關氏右の破片を點見せるに圓筒にあらず紋様も明かに見られ且つ多く扁平にして圓を爲さず更に發掘したるに愈々祭壇の塔なる事を發見せり此塔と稱するは一階若しくは二階にして急

傾斜の屋根あり階毎に窓ありて高さ二尺横一尺許の陶器製のものたり古陵墓の上に安置して祭を爲したる者らし破片の内に右塔の底と見可き者あり紋様は荒き格子様のものあり又は木の葉の如きものも見ゆ

▲第二前方後圓塚の發掘は後圓部の高き頂を三間四方位に堀り下ぐる方法なるが掘鑿二尺位にて土器の破片あり赭色にして酒壺らしく祭器に用ゐたる者なり此祭器出で、は餘り望多からずとの説もありしが甕四時頃四尺餘掘り下げたる時鏟で現形を失へる長き太刀様のもの出でぬ夫れより四尺許距て、鏃の先きに當りたる者を掘り出せば白色の土器にて古代稱して尊と稱して酒を盛りたる者なり此尊には口の左右に耳あり耳には穴あり耳のある尊は時代古き者なりと唱へらる此古墳は高さ二丈餘あり南北三四十間もある可し然るに頂上より四五尺の所にて此種の發見あるは素人の目には異様に感ぜられたり

▲第三小塚の發掘も第二と全様に頂上に二間四方の垂直穴を堀るにありしが之れは三尺許の所にて大刀の鏃たる者及矢の根など發見されたり

▲第一日の發掘は甕四時半を以て終了したり採集物は特に製作されたる箱の内に納められ嚴重に保存する發掘擔當の諸氏は各専門の事とは云ひながら人夫の下す一ツの鏃にも重大の注意を拂い何かに混じて發見さるゝ者あれば直ちに檢見して苟もせず一々分類選別しつゝあり第二發掘の前方後圓塚より出でたる尊には梗の流れ出で居る如き模様あり之れは土中に埋没せる事久しきために斯る有様となれる者なりと云へり

▲發掘場所に入を許されたるは新聞記者及見學者のみにて何れも徽章を以て分たれ居り係員は白色記者は綠色見學者は赤色なり地方の有志の集れる者多く西都が原は非常の人出なりし(妻にて一記者)

■博士一行歓迎慰勞會 一九二二(大正元年)二月二七日(金朝刊「三五三七号」)五頁

二十五日午後七時より妻町石川亭に博士一行六名有吉知事、本山大毎社長、東野大毎記者、五十崎大朝記者、齋藤警務長、市川事務官、新坂永友兩縣屬、田村事蹟調査員、松葉縣參事員、江藤、星野、黒田各技手、長友都農宮司、伊東鶴戸宮司、縣下新聞記者一同其他朝野の關係者全部を網羅して一行の爲め上下穗北有志主催の歓迎慰勞宴を催したるが列席者無慮百五十餘名席定まるや山内兒湯郡長の開宴挨拶あり次で宮内省増田于信氏一行を代表して町重なる答辭ありて開宴妻檢紅裙連十九名杯盤を幹旋し歡談笑話十二分の興を盡して三々五々散じたるは十時頃なりし

■東臼杵郡人士の冷淡 一九二二(大正元年)二月二七日(金朝刊「三五三七号」)五頁

本邦有数の考古學者が打揃ふて穗北の古蹟調査に着手せるは空前の快舉にして裨益す

る處亦實に多大なるべし然るに我が東臼杵郡にては北川村に御陵墓傳説地たる長井山陵を有するに拘らず千載一遇ともいふべき考古學者來縣を機として山陵調査を希望するなく對岸の火災視せるは全郡人士の冷淡眞に驚くべきものと某氏は憤慨し居るれり(延支)

■知事歸廳 一九二二(大正元年)二月一八日(土朝刊「三五三八号」)二頁

古蹟調査視察の爲め二十四日下穗北村に出張し連日博士一行と共に笠狹御陵に赴きて調査視察中なりし有吉知事は二十六日歸廳せり

■日向古墳の發掘《第二日》 一九二二(大正元年)二月二八日(土朝刊「三五三八号」)二頁

▲西都が原は神武東遷以前の諸神の古都なりとて古くより多くの信仰を有する所たり笠狹五百陵とて男狹穗塚女狹穗塚を繞りて五百からの古墳が星散羅列して一見して如何にも由緒ある古蹟地たる事を知り得可し今回縣の調査に依りて發見され標識を立てられたる者二百四十七に及び此外塚形の損じ居る者多し斯る場所なれば來縣の諸博連も其の雄大なるに驚きたるものの如し

▲諸博士の屢々唱へたる如く今回の調査は謂ふ所の笠狹の陵が果して木花咲耶姫及瓊々杵尊の御陵たるや之れを鑑別するを以て唯一の目的とせざるは明なり去れど調査の結果として自然に明白となるを期待するを得可し増田氏は各方面より論及して此陵は景行天皇の皇子豐國別皇子の陵なる可しと推論せり(過日の講演筆記參照) 此論は是迄公には唱へられざりしが斯る諸説を吐きたる者もありしなり増田氏は此見地より陪塚たる圓塚の發掘を試みたる者なる可し

▲圓塚(琴塚)發掘の結果は如何、其發掘見物は皇子説を確かむ可き有力なる材料となるか之れが頗る面白き問題となるなり塚の周圍を繞りて羅列せる圓筒は埴輪の出来たる以後の者也即ち第十一代垂仁天皇以後の者也と斷定す可きかと云ふに關氏は語りに圓筒は埴輪の退化して斯る形状となりたるか或は此圓筒より埴輪に進化したる者か不明也殉死は支那よりの傳來を垂仁天皇の採用されたものにて頭だけを地上に出して生理めしたる者也圓筒は乃ち生理の形状にて此上は頭部の土偶を置きたる者とも云へば單に土留めの爲めに羅列したる者なりとも稱すと云へり

▲左れば圓筒のみにて直ちに垂仁以後の古墳なりと斷言も出来ざれど頂上部に發見したる祭壇に用ゐたる塔或は家の發見されたる事は此説を一層有力ならしむる者ならずとせざと全氏は語り居り頂上には右の塔の破片と全時に祭器に使用したる土器の破片を發見せり之れは塚上にて陵を祭らるときに用ゐたる者なる可し

▲本日發掘を繼續せるに周圍の圓筒は塚を繞りて或は一尺或は三尺位を距て、置かるゝ事明かとなれり此圓筒は昨紙も説明したりしが喜田博士などは埴輪にもあらず土留め

にもあらず一種の柵とも云ふ可きものにて今の玉垣の起源なる可しとの新説を有せる位なり頂上よりは昨日発見したる家或は塔の破片の外に何物とも名稱を付す能はざる破片續出したり家の以外に何物もありたる可く蓋し後日の研究に待つものたる可し増田關の兩氏は多大の興味を以て發掘しつゝあり本日は昨日の場所を一層深く切り下げ既に五尺餘に及びたり塚の高さは二丈三尺もある譯なければ猶ほ一兩日を要せざれば石棺又は石廓の存否を知る能はざる可し

▲第二の前方後圓塚（飯盛塚と通稱す）は本日は各種の發見物ありたり昨日劍及土器の出でたる場所を續掘せるに其所在二個所に分別され西部の方よりは三個の土器五寸許距て、並び立ちその傍らに劍、矢柄、矢の根横たへあり多數の管玉、切子玉及び一個の曲玉發見されたり假りに此部分を甲號と稱へ之より五尺ばかりを距て此處にも二個の土器列べあり劍、太刀及び馬具出でたり甲號に出でたる土器は普通風色にて食器なる可し蓋を置きたる形となり居れり乙號の土器は尊乃ち提瓶にて穴を穿てる耳ありたり去れど昨日の發掘物に比較せば粗造なり右にて大要終末を告げたるを以て人夫を割きて前方部頂上の發掘に着手したるに何處にも土器及び太刀を發見したり

▲第三の小塚は昨日發掘の劍のみにて何等獲物なかりしを以て休止し更に鬼の窟の陪塚と見る可き小塚を發掘したりしが既に一度發掘したる事あるらしく何等發見物なく休止し更に附近の發掘に着手せんとしたるが何れも曾て發掘したる痕跡多く鬼の窟より北東方に當りたる小なる古墳發掘に着手したりしも昨日終了までは何物も獲ざりし日引き揚げは午四時半なり（妻にて一記者）

■土中の日向（二） 藏六 一九二二大正元年二月二八日（土）朝刊「三五三八号」三頁

◎人間は墓の上で踊つたり狂つたりしてゐるといふ感じを今更又、新しい別様の意味で受けたので、今朝も曉に起きて窓を開けると、寒空白く星華花より鮮かに、日頃は縮み込む癖の、珍しうも冷水に體を淨め、心を清らに出で立つのである。

◎昨日今西學士の叫んだ所へ往つて見ると、三浦先生が人夫を督そいて霜柱をサク／＼と掃かせてゐらつしやる所で、碩學一行も既に來てゐられる、風は吹かず然う凍えもしないのは神慮の程の畏く有り難し、美しい旭が上つて、紅葉黄葉の榮めでたく、彌十時頃には小春日の長閑に、牛叱る農夫の聲さへ厭はは聞えぬ。

◎僕の觀たのは矢張姫塚だが、昨日人夫の鍬の先の觸れたる爲、提瓶の半面を砕いた誤りに懲りてか、今西學士も大事を取つて、容易に手を進めず、黒板博士は外套を脱ぎ上衣を脱ぎ、カブスを土だらけにして、土の中に膝折敷きの両手で掻き出すやうに、起つて力限り掘り返してゐたが『どうもシャベルるのは仕よいが、シャベル使つて掘のは酷いね』と呼吸もきれぎれに成る。

◎喜田博士もマントと羽織を投げ出して、移植匙で土を崩す、濱田學士も坂口教授も

柴田學士も時々來て加勢をする、其の内に長劔一口と提瓶一個を始め、管玉、切子玉、瑠璃玉を幾つとなく得て、一行の歡び一方ならず、人夫も『萬歳々々』を内々で唱へる優しさ殊勝さ。

◎尚ほ此邊に何物かあるといふ見込らしく、黒板博士はムダ口を利かなく成り我を忘れ、周囲の人を忘れ、塚の外なる世界をも忘れた風に堀り廻はしてゐるが、三浦先生が『提瓶があれば蓋物のやうな土器がある筈だよ』と言はれるに應じて『然うイクラ酒好きの恩方であつても酒ばかりぢや往くまいからね』言ふ其の言下に『出た／＼蓋物が出た』と聞く嬉しさ、すると小言奉行の三浦先生が『靜かに／＼』とやり出して『割らんやうに御願ひ申します』で一同が笑ひ出す。

◎傍觀生も段々『古墳通』になつて博士等に對して一廉承知顔で説明するのあれば、熾に『逆講演』をやるのもあるが、就中新坂君の主張が面白い、ソレは穂北の農家や高岡地方では、靈舎に死人の好きな物を繪く慣習がある、例之、酒好きには徳利を描き、煙草好きには煙草入れを描く、是は實物を入れる代りだといふのである、成程殉死に替へる埴輪見たやうなもので、一は經濟問題、他は人情問題だなどと『逆』の『逆』をやるのもあつたが、黒板博士が『君等の解釋の方がウまいよ』で又々大笑ひ。

◎笑つてゐる内に、又蓋物が並んで出る『ヤツ出た』という程もなく『又出たぞ』と言ふ、博士の帽子もシャツも土まみれ、而して其の周邊には例の瑠璃玉や、切子玉や、水晶玉が續々と數知れず出る、出たといへば、縣廳の江藤君がスク見取圖を作り、記録は紫洞君がノートに収め、實物は僕が萌黄の袋で受けるのだが、喜田博士は口が悪いので、ソレに『乞食袋』といふ名を命ける然し『斯んな乞食』なら平生も仕たいと思ふ内『オイ袋』『オイ乞食』と右からも左からも聲を掛ける、今年や乞食の當年年。◎蓋物の傍に又長劔一口、其の他方には水晶玉（六角或は八角で圭角の取れたもの、中には外から朱が入つて美しい）が六ツ出た、其れを撮影してゐると、スグ傍で堀つてゐた（同じ姫塚の内）今西學士が『出た／＼凄しいものが出た』といふ、三浦先生も其の方にゐて『出たのは好いが、毀さんやうに』と例の奉行を發揮し、こゝで黒板の方を甲號とし、今西の方を乙號とし、出た物を別の容器に入れることに定めたので、記録と製圖の忙しさ一方ならず『乞食袋』も甲乙の二個となり『オイ甲號の乞食』『オイ乙號の乞食』と呼ぶので『オイ甲號の乞食』の時に『ハイ』と言つて僕が往くのは、ドウも『甲藏の乞食』に聞えるといふ人があつたがドウだか。

◎閑話休題として、諸其の乙號の方からは馬具の一部（鐵環）鐵片、圓釘、長刀、外に香爐形の蓋の無くなつた土器（今よく焼酎を沸かす黒デョカの浅いやうな形）が一ツ、其れと無數の簇である『どうも此邊はヤジリが多いよ』今西學士が言へば『餘りに野次る可らず』と誰かが言つて笑ひ出す、すると其邊にゐる人が口々に野次り出してイロ／＼嶄新な物を出したが『宮内省部では、家を堀し出した』といふ報告に對して『家の瓦だらう』と一人が言ひ『家の瓦の片の一ツだらう』と一人が言へば『ソレ

でも家だといへばイへるだらう』とは知事様の傑作。

◎破るな、こはすなの聲が始終に聞れる『破つたら百年目だぞ』と知事が言ふと『千年目だ』と喜田博士が應じたのに對して『萬年待つたとて分らぬやうになるからね』は愈々出て愈々振つたが一方又人夫が幾十人、その『前方』の方を掘つてゐるが、夕方(三時頃迄)に出たのは三尺二寸の直刀を一口、外にまだ是といふ程のものを認め。◎知事は祓に、齋藤事務官は輔に歸途につかれたが、三十日には一行も残りなく、一ト先づ宮崎に歸り、同夜學士會開會、再び一月二日より來向の筈だが、知らず『土中の日向』は幾百年前のものか、はた又幾千年前のものか、追追回を重ねて紹介するのである。(妻町日向屋にて)

■關氏と佐土原 一九二二(大正元年)二月一八日(土)朝刊「三五三八号」三頁

古蹟調査の爲め博士と共に來縣し目下兒湯郡下穗北村笠狹御陵に於て調査中なる關安之助氏は曩に馬車にて佐土原を通過の際全地名物の一たる佐土原人形に就き三浦敏氏より大要の説話を聽きて垂涎措く能はず是非其初年の造物を探りて各種取纏め携へ歸る考へなりと右に就き二十五日妻町歡迎會席上に於て同氏は和田本社支局記者に語りて曰く『現今の東都の玩具界は複雑なる組織にて造られたる玩具は廢れて單純なるものを嗜好するの傾向あり且つ目今成人に於ても玩具として古器物に類したるものは一般に之を存じて趣味を頒つ者鮮しとせず依て余は貴地製作にかゝる佐土原人形は必ずや現下玩具界の人心に適合すべしと思へるに付之を携帶して歸京し博物館に陳列すると俱に大に之が研究の事實を社會に公表する精神也云云』

■古墳發掘状況 一九二二(大正元年)二月一八日(土)朝刊「三五三八号」四頁欄外

二日目第一號圓塚(琴塚)發掘を繼續し一丈計り堀下たる處にて劔の斷片を發見し石棺石槨なきを見れば木棺なりしなるべし第二號前方後圓塚姫塚(前號)飯盛塚とせしは誤)は前方部の發掘と□□□□□□堀繼續□▲黑板博士の□妹逝去せりとの急報に接せしが博士は發掘を了へ三十日歸京の筈▲本山大毎社長は本日茶臼原視察に赴けり(廿七日午二時妻町電話)

一九二三(大正二)年

■徵古館陳列 一九二三(大正二)年一月五日(日)朝刊「三五四二号」二頁

宮崎宮徵古館は今般内藤子爵家より具足並掖兜伊勢因幡守貞重作模樣采配軍配梨子地の鞍、鎧、外多數の家寶其他諸家よりも貴重品數點陳列せられ飾箱等も増加し幾分か館内の面目を一新したるやの感あり元旦より觀覽者多しと

■日向 古墳の發掘 一九二三(大正二)年一月五日(日)朝刊「三五四二号」二頁

▲廿九日、快晴なるも前々夜來降り續きたれば、黒土道の往き通ひに困難なるが、發掘個所には意外に水溜りも無く人夫等も一日の休息に元氣を回復し、定刻より盛に作業を始めた。

▲一本松(二十一號)の塚は黑板博士擔當前々日堀り初め廿九日には既に團石を幾百も出だし、其下より土器の斷片を數十得たるが午二時迄には何物をも新に堀り出さざるも、博士の所見にては極めて有望なりとぞ。

▲發掘は定例の如く後圓より始めたが東北二間づ、西南一間半づ、の方形に繩を引き其の中を三尺位堀りたるものゝ如し、又事勝塚に赴けば周圍の埴輪は殆ど残りなく堀り出だし大圓線を成しぬ、増田氏一々尺を取りて堀らせるに、寸分違はず堀り當てるを見るものから、見學の徒は屢々歎服の聲を洩らしり。

▲この塚の發掘方法は、横より堀り割りたるものにて、關氏は其底に起ちて松の丸太梯子より土を上げしめつゝ在りしが、前々日堀りたる殘餘物として刀の斷片、鞘らしき物の斷片を幾個となく集め居りて、尚ほ頭蓋骨の在りし邊に薄く朱を詰めたる跡を認め、其少し西の方に輪形になりたる貝の腐れたるが如き物を見出したるも、其輪の内部に存する物質の何たるやを詳にせず、或ひは大腿骨の關節の球にては無きかとも思はれしが、球ならば内部が實質ならでは適はざるを以て、今の所唯何物かの腐りしと見る外なしといふ、是等も得べきものならん。

▲尚ほ其所に一つの穴ありて、關氏は必ず何物か貴き品を得ると言ひ／＼人夫を督勵し居りしが、果して徑五寸位の古鏡を得たり、鏡は伏せたるまゝにし撮影終るまで手を觸れざるも、其の伏せたる鏡の上に玉虫の羽一ツ置かれたるぞ不思議なる、是に就きて關氏の語る所なりといふを聞くに、玉虫を入れることは古き風習にてエヂプトにては玉虫を神に擬したる跡もありと傳へ日本にては正倉院と法隆寺の飾りに其の形を見るとなり

▲事勝塚の附近なる百十二號塚も熾に堀り割りたるが擔任は柴田濱田兩學士にて、此所も周圍を埴輪(高さ一尺)にて取り廻はしたり、而してふつうは圓形に取り廻はすべきも、此の塚は方形に取り廻はし、其中には大なる(周圍の埴輪の二倍大)埴輪ありて、土器の斷片多く、土製の鎧の斷片に似たる物を見出しぬ、此の方形塚は應神天皇の御陵を挟みて前と後に在れば、帝王の陵ならんかと思はるゝ由、殊に事勝塚及び此塚の形が前方後圓の間の邊に所謂耳なる物の在るを認む、此の耳なる物の在るは帝王の陵の制なりとも言ふ、何れにしても貴き方々の墳墓に相違なかるべし。

▲一本松の方の塚は高さも高く、三納の山から續いて、尾鈴山を眺め、あいそめ川も近く、穗北の池がお濠のやうにて風光まことに佳なるを見る。

▲斯くて發掘し終りたる個所には制札を建て、繩張を施し、頗る鄭重に取扱ひ、本日再び祭典を行ひたる後原形狀に復する筈なるが、事勝塚並に參考地の保全上の施設に

就て尚ほ數日滞留の要あれば増田氏等は一月二日より再び彼の地に赴くと聞く。

▲今回の發掘について活動したる土地の人々の熱心は寔に感すべき事にて、人夫などの誠意は他の青年會員の範となすに足るべし、宮崎より出張したる向にては永友、新坂、江藤、星野、渡部、黒田諸氏は或は製圖に或は撮影に努め準備補助作業に當りぬ連日の勞寔に多とすべきものあり（二十九日藏へ）

■二度の笠狹 紫洞生 一九一三（大正二）年一月五日（日）朝刊「三五四二号」二頁

大正二年正月第二二度の發掘を試みるべく穗北に向ふ、彌十時四十五分馬車で宮崎を出る、増田關柴田三氏と吾輩四人連れ、三氏は頻りに専門のお話をなさる、吾輩は謹んで拜聴する、時時諧謔の面白いのもあれど一々其道に因んだ即興、無駄口は一口もない、佐土原で一旦下車兼て觀て貰ふべく陳列せられた佐土原人形を小學校に見に行く、古いので七八十年、新しいのは洋服姿や丸鬚リボンの女人形もある、多大の興味を以て皆々觀て居られる、時間切迫また之れから西都原に登て發掘に取掛らねばならぬので關先生だけ居殘て大光寺其他の寶物を見らるる事になり、其他は直に妻に向かつた、牴三時大阪屋に着する、澁谷郡書記赤塚視學など來て居らるる、晝食をした、めて直に出發、先日掘り殘しの第百十一號と第廿一號との發掘を續けた、廿一號塚からは『前方』に又石の層を掘り當て其西北隅に高杯の破片を發見した、これからは愈々怪しい、擔當の今西三浦先生がお出にならねば滅多に鋤が入られぬ、第百十一號には増田柴田兩氏が掘て居られる、劔が出た、まだ掘り了らぬに日が全く沒した、今日は一先づ解散、宿に着くと關先生も來て居られる、聽て三浦今西兩先生も宮崎から着かれた、夜は多數の訪問者に接した。

■日向古墳の發掘 一九一三（大正二）年一月五日（日）朝刊「三五四二号」五頁（第五日）

舊臘三十日は各々彌九時より着せり

▲濱田、柴田二氏の擔當せる百十二號塚は前日の作業を續け上段より基底部の圓筒を發掘し其配列の状態を精査したり上段は一方約十八本にして其内南面及東面に於ては破壊亡失せるもの多く纔に南三個を見る而已也他の二面に於ては殆ど完全に配列せり基底部に於いては南面西面に於て能く完全に配列せられたれども北面は殆ど其半を残せる而已、次に牴頂上の發掘を進めて家屋形埴輪の下方を深く掘り下ること六尺なりしが其間一個の土器の破片を發見せり而して尚ほ深く之を續行せずんば不明なれども曾て發掘せり疑いあるが如し

▲増田、關二氏の擔當せる百十一號塚は彌十一時頃鏃の群集せるものを得たるが更に進んで發掘を繼續したるに南方を前にして東面を頭にし西方を足にし横位置に埋葬し

たるものを發見せり復其附近に諸刃の劔五本並に其東方に四本を發見せり而して其附近に土器の小破片混在せるを認めたり

▲今西、三浦二氏の擔當せる第二十一號塚は前日の作業を續けし牴零時半頃砂床全部を露出せしむることを得たり砂床は棺の底面の如き形狀を爲し更に其西南に一個の巨石と鐵物の一端を發見せり『前方』は巾一間深さ三尺の溝を上方に向ひて掘り割りしに約八間の個所に方四尺位の敷を發見せり

▲右にて本日は牴三時解散一先づ一行は馬車にて夜陰を冒し宮崎に引揚たり（第六日）

一月二日は増田、柴田二氏而已牴二時四十分來穗し關、今西、三浦氏等は日沒に來穗せしかば豫定の行動を取る能はざりしも時刻を貴重する諸氏は而も各々牴四時より殆ど田村事蹟調査員三名發掘に着手せり客臘二十五日以来四十名の入夫を督し居たるも不足を告げしかば本日より六十五名を使用したり

▲増田氏の擔當せる第百十一號塚は更に北方に發掘面積を擴張し約二尺を隔て、鐵丹色を含める土壌を發見すると俱に南方に於ては刀劔の一部分と土器の破片散在せるを認めたれど黄昏なりしかば翌日に譲りて解散せり

▲柴田氏は第百十二號及第二十一號の兩塚を擔當せしが前者は中心部の發掘を續けし地平面に及びしが何等の遺物をも發覺せざりし後者は前方後圓共作業を繼續せしも土器の破片少量並列石の面を認めたる而已（第七日）

三日は各々彌九時より開始せり

▲今西、三浦二氏の擔當せる第二十二號塚は牴三時頃頂上より大凡八尺の底部に於いて西方より東南に横はれる長さ約三間巾三尺深さ未定の黄色粘土よりなる獨木舟形の一物を發見せしも其何物たるかを知らず諸氏は未だ曾て見たる事なきものなりといふ前方部に於ても之と同様の土壘及刀劔、鏃等を發掘せり

▲次に其西方に當れる小墳二十五號二十六號の兩塚を發掘せしに二十五號に於ては石層を發見したる而已にて其下部を掘出したれども何者をも認めざりき二十六號に於ては齒牙數個を發見したりしも已に薄暮に及びたれば翌日に精査を残せり

▲増田、關二氏の擔當にかゝる第百十一號塚は前日發掘物の東南部に鏃、甲冑一領及異形の埴輪群集物を發掘し撮影の上取り上たり

▲柴田氏擔當の第百十二號塚は前日の整理を爲す内に東南部に於て曾て發掘せし空隙を認めたるに依り直に發掘を中止したり因に増田氏は女狹穗塚の測量を爲し各自五時過開散せり

▲此日は牴四時頃より黑板博士、市川事務官、成合事務官補、石神縣視學、新坂縣屬、長友縣技手、澁谷郡書記等來場せしが大部日向屋に投宿せり（三日支局和泉發）

■古蹟調査と穂北の混雜 (二) 支局記者 一九一三(大正二)年一月六日(月)朝刊

「三五四三号」一頁

△三日(月)二時に黒板博士、市川事務官新坂縣屬が來た、夫れから一時間置いて成合事務官補と石神縣視學は來穂したが博士外は皆日向屋に腰を下した、日向屋では客臘こそ遽に多人數のお客様に目をまはしたと見へ今日は又四名増して八名の女中加之に壁を塗るやら塀を拵へるやら便所の改造やらでよほど垢抜けて見へた

△かくる方々の往來で妻町の當局者は送迎に忙はしく市中生々して居る事は疑いないが割の好いのは宿屋許りで貧乏籤は旗亭だ天佃女命式の別嬪さん達が今夜こそと力んで居た甲斐もなく案外此方面にはおとなしいのでガツガツして居る

△笠狹部落や三宅、山路邊では百姓達が『今度古墳を發掘しなさるから今年は屹度不作ぢや俺達に罰が當る』と落してゐるものもある、ツイ去年の三十日の未明御陵方面に鋒か何か大かい物音がしたので『サ、サ、大變ぢやハハハハ神様が腹立ちなすつた、之では何んとか博士様たちに願つて止めて貰はねばボクぢや』と騒いだ向もあつたさうなが後でその音が小鳥打の砲聲であつたので大笑い

△女狹穂塚に陪塚らしい左右の耳があつて北面に方墳があるので帝陵の制から申せば有力なる貴重なる塚ではあるまいかと想像されたので増田先生は三日薄暮之が測量をやられたがコンナ事を聞いた三宅附近各部落青年會員は健氣にも此大塚の草拂ひを助勢すべく協議を遂げたさうな、青年會員が自ら志願して萬事萬端一行の行動に便宜を與へる事は洵に感心の外はないのである(三日和泉)

■長江山陵に就て 一九一三(大正三)年一月八日(月)朝刊「三五四三号」三頁

舊臘より穂北に於て陵墓調査あるに關せず東臼杵郡長江山陵は調査なきを慨して報道する處ありしが確聞する處によれば來縣中の増田于信氏十日頃來延する趣なれば無論長江山陵を視察するものなるべく又同時に三浦敏氏も氏と同伴歸延すべしといふ

■古墳調査 一九一三(大正二)年一月七日(火)朝刊「三五四四号」二頁

四日引續き前日の各殘部發掘をなし尚第廿一號古墳の陪塚第廿九號迄新に發掘して直刀一本を得更に第廿六號の陪塚よりは齒牙十數本と鐵鏃二本を採得したり第廿一號粘土の東部は別に土穴を發見して堀廣げ赤燒土器の破壊せる一群を得たり、尚一行は二手に別れ一は國分寺趾及國府等を調査し他は西都原にある全部の古墳を踏査したり(月)八時大阪屋に於て村長小學校長各青年會長二名其他を招集して黒板博士増田氏關氏市川事務官より古墳保存其他に就き懇談あり(月)十時解散す、尚一行は五日(日)午前一部は發掘を續行し一部は都郡高屋故趾を調査し(月)より宮崎に向ふ豫定なりといふ▲五日増田氏は赤塚視學新阪縣屬と共に都郡高屋山陵に行き其他は全部第廿一號塚の發掘を

續行す昨日の粘土大棺内より劔數本並に凹入の西北部に直徑約六寸の古鏡一面を發見したり、朱交りの土中に在りし爲めか鏡面多少の曇りを生ずるのみ能く物体を映照すべき鮮明の度にあり頗る貴重なる發掘物と稱せらる(月)河村内務部長夫人令息佐竹縣視學と共に來る、本莊村長三輪氏宮永千代太郎長嶺和助氏來り博士一行を本莊に迎へて其地方の古墳並に寶物觀覽を請へり事未だ決定せず(月)五時過解散

■古墳調査一行 一九一三(大正三)年一月七日(火)朝刊「三五四四号」二頁

西都原古墳調査の爲め出張中なりし兩京大諸陵寮の諸員一行は市川事務官、石神佐竹兩縣視學、新坂縣屬、田村事蹟調査員と共に昨日當地へ引揚げたり

■古墳調査 一九一三(大正三)年一月八日(水)朝刊「三五四五号」二頁

六日發掘物の整理をなし今西學士と江藤技手とは第廿一號塚の測量に出掛く内務部長夫人大阪屋に發掘物觀覽に來る關今西三浦三氏は發掘物荷造りの上悉皆携帶(月)三時頃より出宮せり黒板博士増田二氏市川事務官其他は本莊に向へり赤塚視學澁谷郡書記其他村端れまで見送る(月)四時本莊着出迎人澤山直に銚子塚其他の古墳を巡覽し宮永千代太郎氏宅に其寶物を觀更に小學校に立寄陳列の古器物を視郡長其他有志と晚餐を共にし(月)七時發十時來宮せり因みに同村長並に宮永菊池二氏宮崎まで見送る

■黒板博士一行 一九一三(大正三)年一月八日(水)朝刊「三五四五号」二頁欄外來宮中の黒板博士一〇〇〇……

■古墳調査終りの日 一九一三(大正三)年一月九日(木)朝刊「三五四六号」一頁

古墳調査には各種専門の學者が集つた古文書、歴史地理、朝鮮史、考古學、人類學、歴史、古器物考證等の諸學者が各其專攻の知識を發いて悉く之を西都原の古墳に傾注した、遠く關西地方の大新聞記者が來る高等學校の教授各縣立學校の教師が集まる、發掘に従事した人夫は青年會員中學力品行並び秀でたものばかり、縣郡村當局の理事幹旋亦頗る遺憾なく、前後十二日に亘れる發掘と調査とは天下の耳目を聳動し空前の盛事を以て茲に全く終りを告げた、更に丁寧なる復舊の工事が施された後に於ては再び崇嚴嚴肅な祭典の舉行に依て諸神の靈を静め奉る事に成て居る、今其發掘の模様に至ては連日緒新聞の記載に在るが如して更めて陳べる事を要せぬ、兎も角も今回の事たる實に破天荒の盛舉であつて古國日向が更に更に廣く紹介せられ顯彰せられた事は言ふまでも無く一面には多數の學者間に新研究と新發見の材料とを提供し得た事を非常なる本縣民の誇とせねばならぬと考へる。

今其發掘した太古の遺物に至ては大部分本縣の所有に歸する筈と聞て居る、いづれ共不日公衆の爲には此貴重なる祖先の遺品が縦覧に供せらるゝ事を疑はないのである、

古墳一切に關する内容の巨細なる研究の結果は是亦不日學者の報告を得て相共に拜承する事が出来るに聞て居るのである、年代の新舊や何様や何の尊の陵などの憶測や想像は決してお互の濫りにす可きものでもなく亦決してわかつる事でも無い筈のものであつて、實際専門の學者間にも異説紛々其統一した斷案や決定は到底今日の即答や即決に待つ可き筈のものではないのである、夫れ等の點は之を其道の人に譲て其忠實なる熱誠なる研究の結果に待つ外の外は無いので一般縣民の立ち場としては何處までも在來の此古墳を鄭重に保存すべく精神的に具體的に何等かの方法を設くるに在ると信ずる苟も何千年來の寶墳である、エライ人エライ神様だちの墳墓である、口碑に傳へ文書に止め大切に保管し來つた墳墓である、氣違ひに成る目の玉が飛び出るなど神奇靈怪な口傳での保存法に依て崇尊敬虔苟も一土一石濫りに侵さず遠く今日まで持ち續け保存しつゝけた古墳である、吾人は此美にして高き祖先の此心を何處までも繼紹して譬ひ一面に法律や何かの制裁があるにしてそれはそれとして眞個精神的に保存す可きものだと思ふのである、聞けば此方の學術的研究は未だ甚だ幼稚であつて未定不明に屬する問題は頗る多く遽しき判定は危険千萬寒心の極であるさうな、思ふに大古の研究は誠に空漠なものたるに相違ない確實な理解や判斷はまだ／＼遠き將來に待たねばなるまい、斯る状態の今日に於て遽しく發掘し崩壊して貴重な埋藏物を得んとしてたり耕地を廣げんと企つるなどは甚だ惜む可きもの頗る恐多い事であるまいか、私有は之を共有にするか共有は之を其筋に献上するか何等か最も出來易き方法の下に丁重の保存が地方人士の祖先に對し又子孫に對し國家に對し地方に對する最も貴重な務めではあるまいかと信ずる、殊に此度の調査の結果既に或る四五箇條の新發見が學者間に認められたので其巨細の事は言ふを憚るが旁々以て大切に保存したい年代の新舊などチョット聞きかじつて失望の極粗末に取扱ふなどは甚不心得、前陳の如くまだ何等も落着解決もせぬ今日の狀態である、ウカと疎略には取扱はれぬ、此邊十分に合點して矢張舊來の傳説の儘に飽くまで崇敬奉仕す可しである、遽しく人の言ふ事に耳を傾けてもまだ第一學問の研究が落着せぬ、中々以て傳來の寶物を滅多に安賣りは出來ないではあるまいか、古墳調査に關する所感は頗る多いけれども言ふ丈けが人笑はせ、知らぬ事は默するに如かずであると差控へた。

兎も角も此節の事は實に空前の盛舉であつた、震天撼地確に古國日向の名を揚げた、學術界に一新紀元を拵へた、高く美しき心を持てる祖先の保存に依て大正二年の新时代に斯道新研究の新資料を提供し得た事は頗る其地方人民の光榮とし痛快とする處であらうと思ふ、田舎なればこそ保存も出來た、撲實なる其かみの遺民なればこそ保存も出來た、是に至て吾人は深く田舎と其地方人士とに感謝せねばならぬのである、學界に貢獻した同地方は又何等かの方法に依て其報酬を受け得るであらう、發展や繁昌や其他精神界の上に多大の進歩を贏ち得るであらう事を信ずる、落寛悲愴人目も草も枯れ枯れの西都が原は大正の改元と共に忽ちにして大古の春に若返つた、原頭ありと

ある幾百の神靈は神集ひに集ひまして聖代の新して朝日影に太初的笑みを洩し玉ふたであらう、今や一先つ事を終へて西都が原を下らんとする時感懷萬端、遙に御陵墓參考地を拜して言ひ知らぬ涙が滾々として頬を傳ふのであつた。

■黒板博士一行出發 一九一三(大正)二年一月九日(木)朝刊「三五四六号」五頁

來宮中なりし東京帝大文科教授文學博士黒板勝美今西龍、柴田常惠の三氏は山内技師全行昨日午十時半當地出發内海より乗船鶴戸を経て油津にて直航に乘換へ歸京の途に就き増田于信氏は佐竹縣視學同行午十時出發奈原を視察して高鍋泊本日延岡に赴き御陵墓參考地を視察の上西日杵に出で高千穂の舊蹟を探りて熊本鹿兒島を経て歸京の筈又關係之助氏は午八時半陸路小林を経て歸京の途に就けり

■古墳調査書報(一) 一九一三(大正)二年一月一〇日(金)朝刊「三五四七号」二頁
競馬場より見たる男狹穗塚女狹穗塚「写真は省略」

■増田于信氏の講話 一九一三(大正)二年一月一〇日(金)朝刊「三五四七号」二頁
増田于信氏は既報の如く昨日三浦氏同道延岡に赴きしが長江山陵視察後十日延岡女學校に於て講話を爲す由一般の來聽大歡迎するとの事也

■古墳調査書報(二) 一九一三(大正)二年一月一〇日(金)朝刊「三五四七号」二頁
西都原鬼の窟前の松並木「写真は省略」

■古墳調査書報(三) 一九一三(大正)二年一月一〇日(金)朝刊「三五四七号」二頁
古墳調査に就き行はれたる古塚祭祭文を讀めるは長友宮司右方の最端は有吉知事外調査員一行「写真は省略」

■市川事務官 一九一三(大正)二年一月一〇日(金)朝刊「三五四七号」二頁

古墳調査用を帶び昨日より兒湯郡へ出張先きに發掘せる古墳埋立を視察の上引續き増田于信氏の後を追ひ東日杵及び西日杵地方へ出張する由

■古墳調査書報(四) 一九一三(大正)二年一月一一日(土)朝刊「三五四八号」一頁
古塚祭に於ける有吉知事の參拜「写真は省略」

■古墳調査書報(五) 一九一三(大正)二年一月一一日(土)朝刊「三五四八号」一頁
三列三人目より今西學士、濱田學士、阪口教授、増田御用掛、有吉知事、黒板博士、喜田博士にして阪口教授の後には關氏「写真は省略」

■古墳調査書報(六) 一九一三(大正)二年一月一日(土朝刊「三五四八号」)一頁
媛塚(前方後圓) 發掘状況「写真は省略」

■長井山陵視察 一九一三(大正)二年一月一日(土朝刊「三五四八号」)二頁

諸陵寮御用掛増田于信氏は三浦佐竹兩氏と共に九日延岡着龜城館に投宿十日彌中北川村大字長井の長江山陵を視察市川事務官も十日夕着せり延岡支局員も山陵視察に随伴したれば實況後報すべし尚ほ加藤南方村長は増田氏來延を機として其部内吉野の未開古墳十八ヶ所を取調べあるを以て實地視察を請ふべしといふ但増田氏其後の行動左の如し十日夜は延岡の一般歡迎會に臨み十一日出發日平着之れには佐竹縣視學隨行す

■高鍋地方の古墳調査 一九一三(大正)二年一月一日(土朝刊「三五四八号」)五頁

八日午一時増田宮内省御用掛三浦敏氏佐竹縣視學一行高鍋に着し夫より蚊口鶴戸神社に參詣後神社周圍を細密に視察し全社より南方約五十間の處に在る大小圓形の塚を詳細調査せしが古墳には相違なかるべしとの斷定なり猶ほ全社の寶物古器を見其より一行は山内郡長を始め凡そ二十名にて三艘の小舟にて鳴野の彼岸に上陸し上江村大字持田字龜塚の龜塚調査に到着し其形状の少しも崩れず古墳の前方後圓式中的一異例にして珍しき古墳なることを認識せられ圖面を調製し間數を實測せり此龜塚の周圍八十二間前額面十五間半南方前額より後圓の直徑二十七間一尺あり又外廓堀の形状尚田畦となりて存在し東側塚下より六間半あり埴輪の破片及古代陶器の破片數多發見せり同行の認定は近古の元勳國造の墳墓ならんと一行は進で全大字家床の西にある岩穴の實見ありしかば穴居時代の家にあらずこれ尚豪族なるらんとの事なり其より全大字の字西の原に達し關所の古墳にて數年前に發掘したる長七尺の石棺露出せるを見たり此地方の各所には一百以上の古墳ありて曲玉管玉杯折々出づることあり全所に發見せし石器曲玉類を見其より場所にて出發高鍋町小村第二四季亭に到着高鍋上江の有志と共に五十餘名の慰勞の宴會に臨めり席上増田氏は大要左記の如き演説ありたり

最初には先般來穗北の古墳調査を爲し略結したるを以て尚九州の各地巡回の爲め歸京の途に着く筈にて實は高鍋には參る筈にてはなかりしも郡長より懇切なる所望に依り本日終に當地に參り諸所拜見することゝなりしに鄭重なる招待を忝し一同を代表して感謝する旨を陳べ尚古墳調査結果は歸京の上發表す可も自己一人の所信を少しく述べん全体古墳の調査の主旨は古墳の保存にして本縣有吉知事よりも其主旨にて申請しあり古墳は我々の祖先元勳にして本邦の文明發達を助けたる有功の人々殊に原始時代より幾萬億とも數へられぬ人間の數に比すれば誠に少數の偉人の古墳なれば大に之れを尊重し保存せざるべからず又古蹟古墳を宮内省にては已に調査して神武以來現代迄の天皇の御陵は皆調査済となりたるも皇后の御陵は知れざるもの

多し其他皇族方の古墳も調査の方針なれど前の桂内閣にても古墳調査費は削減せられ又前西園寺内閣にては善惡に關らず新事業は爲さずとの主旨にて調査費を削がれ天皇以外の御陵は尚充分に調査出來ず皇族の古墳も調査することに爲しあるも其の他元勳の古墳も未だ調査の届かず元來形なきに到りしもの多かるべくも今後は一切大に保存するの方針なり皇族とは五世迄を稱することに古昔より定めあり皇室典範にもそうなつてあり元來日本の種族が三種に區別せらる第一は皇別にして天孫降臨以來の皇族を稱し第二は神別にて天の兒屋根尊の如き天孫と共に日本に降臨せられたる皇室に大に忠義を盡されたる方々なり第三は蕃別にて支那朝鮮より歸化したる種族にて蕃別と言ふと輕視したる語の如くなれども然らず尚秋月藩主の如く昔の田村麻呂の如く大に皇室に忠義を盡されたるもの多く殊に秋月氏の如きは漢の高祖の孫にして將門を討伐して大に勳功を立てられたり此純友の亂は日露戰爭の比にあらず東西相應じての内亂なれば一通りの騷に非ざりし如此國家混亂の時に皇室に忠義を盡されたることにて之れも大に尊崇せざるべからず要するに日本人種は此三別なれば本々來會の方々は皆皇別か神別か蕃別の子孫にして日向地方にある古墳は即ち諸君の先祖の墳墓なる故大に尊敬して保存せざるべからず

穗北西都が原の古墳は瓊々杵尊及此花咲耶姫尊の古陵なりとの主旨にて御陵調査所と爲り此度調査の結果自己一人の考は景行天皇が高屋の宮にましまして世をしろしめし玉へりと云ふことが書いてあるが其高屋とは穗北地方の高屋にて此地勢は高莊にて茲に高屋を築かば如何にも眺望も善し古代の宮殿なりしこと疑ふべくもあらず且つ景行天皇は熊襲素蘇を平げ日向に止まり玉ひ皇妣數百人あり皇子八十餘名皇女三十五名ありて日本武尊皇嗣たりしも早く天せられ第二の皇子立ち給ひたるが茲に兒湯にて生れ玉ひし豐國別尊日向の國造となられ兒湯郡が日向の主府なりしこと明瞭しあり日本は當時百以上の國々に分れありしも日向は當に山勢地勢の都合にて常に一國なりしが國府は常に中央の兒湯郡なりしなり皇子を國造に戴くことは臣民の歡迎すること昔も今の如くにて其當時上野の國に景行天皇の皇子を國造に遣し玉ひたるに中途覺せられたれば其地方の人民は皇子の遺骸を乞ひ盛大に送葬し其古墳今尚あり同形のものなり又國分寺のありしことにても其證據充分なり國分寺は聖武天皇が佛法を大に信仰せられ各國に大なる國分寺を政治の府と共に双べて立てられたるものにて國分寺のある處は即ち國府なり自己は宮崎に來るや事務官に面會して縣廳は何故に高鍋に立てざりしものかと訪ひしに事務官は其當時高鍋の輿論は縣廳杯が建てば面倒なりとて之れを拒みたるが故出來ざりし由と答えられたるが果して然りしことありしか知らざれど宮崎縣廳は高鍋に置くこと當然なりと考ふるなり議論は枝葉に涉りたるが豐國別皇子が日向の國造にして穗北の御陵は此皇子の古墳なるべしと認むるなりそれは歴代の御陵の比較より之れを推定すべし神武天皇より開化天皇迄は土を高く盛たる御陵なく開化天皇の御代は其諡號の如く大に開け化して

御陵立派な者となり殊に仁德帝の御陵の如きは周圍が一里もありて歴代に於て最大のものなり其比較上形式上豊國別皇子の御陵にはあらずやと推定するなり他の古墳も祖先偉人の墳墓なれば大に尊敬して保存せねばならぬと思ふ本日は之れ丈にて御免を蒙りたし

■長井山陵調査 一九一三(大正)二年一月一日(土)朝刊「三五四八号」 五頁

増田諸陵寮御用係は三浦敏、齋藤郡長佐竹縣視學、上井郡視學、木村神職、若松署長、本社支局員と共に昨日(日)八時延岡を出發し北川村大字長井小字松尾なる御陵墓傳説地調査に赴き(日)九時半到着多田村長外二三有志の出迎を受け傳説地の番人をして門を開かせ一巡して視察を爲せしが増田氏は地理を案じ方位を察し實に申分なき御陵墓なりと言明せり其説に依れば陵墓は可愛岳の山尾蝙蝠の羽を擴げたる如き地勢の末端の中央に在り前に北川を控へ東に案山となるべき長尾山あるは是全く御陵墓所在地の地勢として疑ふべからざる處にして欽明帝の御陵朝鮮山陵の地勢と同型にして宛然伊勢の神路山を見るの感あらしむ云々可愛岳の左の山尾なる江良の尾に木花咲耶媛を祀り其後に磐長媛を祀り西北方の谿に瓊々杵尊を祀れる箇所あるも遙拜に留め其より番人の宅にて茶菓を喫せり此時増田氏は陵墓附近に一の古墳なきを聞きて一層御陵墓たるに信を措くに足る旨語り一行益崇敬の念を深ふせり猶ほ番人に就きて地名の詳細を聞き陵の前面四十間の地點に佇立して見取圖を書き村民に對して是迄陵より何か發見せし處なきやを問ひしに村民は小破の箇所より礫現れ出しことありと答へ土器の發見なかりしやと再問せしに村民は知らずと答へたり増田氏は陵墓地保護に就て語る處あり全地を引上げ正午十二時延岡に歸り(日)一時より豫定の如く高等女學校に於て講話を爲し全夜米金樓に於ける歡迎會に臨みたり(延支)

■増田氏講演 一九一三(大正)二年一月二日(日)朝刊「三五四九号」 二頁

既報の如く去十日(日)一時より延岡高等女學校雨中体操場に於て増田于信氏の講話ありしが聴衆は無慮數百名堂に溢るゝの盛會なりし講話は天孫降臨より説き起し天照大神素戔鳴尊の事歴に及ぼし日本武尊の東夷征伐大國主命の事歴高天原の考證、神武帝の東征等に就て該博なる意見を述べ其れより古墳調査着手の由來より古墳に就ての解説と調査狀況を詳述し古墳の制、石棺木棺圓塚前方後圓塚等の豫明を爲し更に徳川氏以降の山陵調査の歴史を述べ西都ヶ原の古墳に就ての推定を與へ古墳保存に就ての注意を喚びたり

■古墳調査畫報(七) 一九一三(大正)二年一月二日(日)朝刊「三五四九号」 三頁

事勝塚(圓塚)發掘狀況「写真は省略」

■増田氏歡迎會 一九一三(大正)二年一月二日(日)朝刊「三五四九号」 五頁

増田于信氏は一昨日(日)一時延岡高等女學校に於ける講演を終り全七時米金樓の歡迎會に臨めり齋藤郡長歡迎の辭を述べ次で増田于信氏三浦敏氏の謝辭ありて開宴九時散會頗る盛會なりし席上増田氏は可愛山陵に就き大要左の如き談話を爲せり

可愛山陵に就き史を按ずるに『日向の可愛山陵に葬る云々』の事は日向を割きて薩摩大隅を置きたる以後に著されたる古書に掲げあるより見れば如何にしても現在の日向國內に存在せざる可からず然し乍ら御陵が薩摩に在りとの事既に勅諭を以て定まりし以上今日之に對して云爲する能はざるを以て意見を述べ難し思ふに薩摩に治定されしに就ては二大原因あり(二大原因に就ては公表するを憚る點あるを以て之を秘す)今長井なる可愛山陵を見るに後方に山を負ひ左右に山尾を擁し東方に案山の横はるあり陵墓としては一點の非難すべき點なし余はその伊勢の神路山に極似し全く其陵制を同ふせるを見崇敬の念を深めたり山陵たるを確むるは學者の斷説と或時期を待つの外無し云々

■山陵保存の議 一九一三(大正)二年一月三日(月)朝刊「三五五〇号」 二頁

今回宮内省御用係増田于信氏は三浦敏氏補佐の下に東臼杵郡北川村可愛の山陵を調査せしが其結果は茲に公表するの時機ならざるも最早山陵として疑ふべからざるものあるより大に郡内の人氣を喚發し來りしが神職會支部は勿論一般郡民の間に於ても一の山陵保存會なるものを設立し無格社たる木花咲耶媛の祠なり又は村社瓊々杵尊の祠なりに外交的神職を置き以て祭事及び守護に任じ同時に一時的寄附を募集し取敢ず山陵の玉垣と神扉を寄進し尚進んでは參詣者の便宜を謀ると共に縣又は郡より相當の補助を請ふべき準備を爲すは刻下の急務なるべく尚竿頭一步を進めて瓊々杵尊御陵墓治定に就ては其筋に請願し徹頭徹尾其目的を達するの手段に出づべしとは既に郡内の輿論となりける處喧傳し居れり事實となりて現はるゝは今より數句を出ざるべしといふ(十一日延支)

■増田御用掛一行 一九一三(大正)二年一月三日(月)朝刊「三五五〇号」 二頁

増田御用掛一行は市川事務官、佐竹縣視學、上井郡視學其他隨伴十一日(日)六時延岡出發三田井に向ふ同夜日平一泊十二日三田井着同地に於ても古墳を視察する由

■古陵調査の後 一九一三(大正)二年一月五日(水)朝刊「三五五二号」 一頁

本縣に於て計畫されたる古陵調査の義は、多大の効果を齎したり、之れ全く各方面に於ける專攻學者の來縣を得たると、縣が之れが爲めに幫助を惜まざりし結果ならずんばあらず、而して今効果の著大なる者を舉ぐれば、大体左の三方面に分類する事を得可し、第一好古學上偉大の資料を得たる事、第二古陵に對する崇敬心を増さしめたる

事第三古陵の湮滅に對し、新たな発見を爲したる事之れ也、第一の好古學上偉大の資料を得たる事は、余輩評論の分限内に非ざる故に之れを省略す可し第二古陵に對する崇敬心を増さしめたる事は、余輩古帝國の縣民として、深く此現象を喜ぶ者にして、益々古陵墓の保存を丁寧にし、報本反始の誠を致す可き也、從來とても決して疎かならざりしが、今後は何等か方法を設けて崇敬の道を講ず可し、之れを爲すには絶対に陵形の毀損を禁じ、永遠に太古の靈蹟を偲び得るの設備を爲す可き也第三古陵に對し新たな発見を爲したる事に就きては、余輩の切に當局に要望せんと欲する者あり、開は男狹穗塚の豐國別皇子の陵墓たるを、長井山陵の瓊々杵尊の御陵たるを公認せしん事之れ也、男狹穗塚が豐國別皇子の御陵たるは、増田氏の考證と、調査の結果之れを認得するに於て異議なかる可し既に之を認得せば、西都原附近が建國の跡なる事は、幾多の方面より之れを傍證する事を得る也、豐國別皇子は景行天皇の妃御刀媛の座む所たり、皇子は勇武を以て名あり、日向の始めの國造なりと云ふ、之れを皇子の御陵と崇め祀り、他の五百の古陵を併せ祀らば、西都原なる古陵高原の意義明かとなり、其昔皇居の跡たりしに依り、景行天皇來りて駐蹕されたる理由も知るを得可く、國府を茲に奠められたる所以も明白となりて、舊都の光輝を放つに至る可し、次に長井山陵の瓊々杵尊の御陵たるは、古書之れを記載して疑ひなき所、日向の愛の山陵とは長井山陵を措きて他に之れを求む可らず、然るに今日に於ては鹿兒島縣に定められ、唯傳説地として保存されたるに過ぎず、増田氏親しく之れを調査し陵形、結構、周圍の地勢、古帝陵制に違はず、古書の示す所に準據し、一點の批難す可き所なしと斷言したりと云ふ、山陵の所定は重く、俄かに彼を非とし此を是とする能はざる可きも、既に尊の御陵として疑ふ可からざる者ありとせば、宮内省は相當の手續を履みて、之れを御陵なりと斷定し崇尊の誠を致すに躊躇す可からず、以上兩地の古陵に對して、從來の湮滅を啓きたる事は、今回古陵調査の最も重大なる効果たり、古陵を保存し之れを崇敬する事は、兩御陵の公認奉祀に隨伴して、必ずや余輩の目的を達する事を得可き也、余輩は當局の此事に關して更に一段歩を進めん事を欲する者たり。

■西臼杵郡における増田于信氏 一九二二(大正)年一月一日(水)朝刊「三五五二号」二頁

古墳及び古蹟調査の爲め來縣せし宮内省御用掛増田于信氏の一度西臼杵郡に入らるゝの確報に接したる官民一同は好機逸す可からずとなし直に西臼杵郡役所に參集し歡送迎の準備古蹟案内の方法古器物陳列宿舍等に至る迄各係員を設け可及の全力を濫ぎ以て便宜を與ふ可く熟議し一面には七折、岩井川、岩戸、上野、田原の各村長及び各小學校長有志家神官等の參集を促し一行の來穗を期待したり同氏は市川事務官及び佐竹縣視學同道去る十一日早朝延岡出發途中南方村に在る古蹟を視察し西臼杵郡役所より七折村字日ノ影迄出迎ひたる岩切郡視學と共に高千穗村三田井字長井に於ける官民多

數の出迎を受け七時三十分西臼杵郡三田井着直に新松屋旅館へ投宿翌十二日滞在し輔中四皇子ヶ峰穗觸神社の眞名井吾平原横穴吾平山高千穗神社の神社及び古蹟を視察し夫れよりも郡役所内に陳列せる古器物を縦覽し同所に於て晝飯を了へ七時より岩戸神社及び其附近を視察し七時より郡會議事堂樓上に於て講演を爲し終了と同時に同所に於て官民一同より成る歡迎會に臨み翌十三日早朝出發熊本縣下杵ノ木温泉場へ一泊せる由(三田井支局)

■西臼杵高千穗附近古蹟調査 一九二二(大正)年一月一日(金)朝刊「三五五四号」一頁

既報の如く増田諸陵寮御用掛は縣廳より同行したる市川事務官及び佐竹縣視學の外岩切郡視學宮原校長田尻藤四郎田尻皓平、田崎神職、依元一郎、平原警察署長、坂元村長、中澤郵便局長、本社支局記者其他有志家等と共に去る十二日輔九時宿舍を出發し既報せし順序を以て調査ありたるが就中天の眞名井の如きは其名稱の如何は別問題として最も尊べき場所なりとせり其理由を擧げて曰く地上に於ける物体は往々後世製作せらるゝもの若くは他に移す事の出來得べきも地下に於ける物体は容易に人工を以て之を製作すべからざるものとなし二三引證せらる而して吾平原及其附近一帶十數所に於ける横穴古墳は先年本縣の囑托を受けたる某文學士の大部分發掘し種々なる太古の遺物を得たる所にして貴き墳墓なるは言ふ迄もなき事なるが増田氏は幾度か立止まりて大なる研究の材料即ち寶墳に付崇嚴々肅なる態度を以て些細に踏査し保存上に付種々注意を喚起したるが要するに年代の新舊乃至何の尊の陵なりなど臆測及び想像等をして決して濫りにすべきものにあらざるは言を俟たず宜しく一般郡民は之の寶墳の保存上に付精神的に鄭重に具體的に其方法を設くるにありと(三田井支局)

■増田氏講演 一九二二(大正)年一月一日(金)朝刊「三五五四号」一頁

既報の如く去る十二日古墳及神社古器物等を調査したる氏は調査終了後七時三十分より郡會議事堂に於て二時間餘に亘る講演ありたるが聽衆百有餘名にして講話は延岡に於ける夫れと大同小異なりしが三田井附近に於ける古墳に就き氏の感想を具體的に講演ありしも公表するの時機に非らざれば見合すべし講演終了と同時に直に同席に於ける歡迎會に移れり甲斐郡會議長歡迎の辭を述べ次で増田氏及び市川氏の謝辭ありて開宴頗る盛會を極めたり因に今氏は去十三日輔七時三田井出發熊本縣へ向へり右に付市川事務官、佐竹縣視學、岩切郡視學は縣界迄其他多數の官民は舊郡役所脇迄見送りたり

■吉野は古都：東臼杵郡南方村の古跡： 一九二二(大正)年一月二三日(木)朝刊「三五六〇号」五頁

古蹟調査員中の増田諸陵寮御用掛が可愛山陵調査の結果は今茲に發表する時機にあらずるも瓊々杵尊の御陵墓なる事は地形に於て一點の批難なしと聞く尚増田御用掛は進で加藤南方村長の請を容れ同村字吉野を調査せしに一帶の丘上は東西南北何れも里餘に亘り確に古都たりしものゝ如く其附近には古墳多く加之同村天下と呼ぶ處即ち吉野の片邊には前方後圓にして稍や大なる陵墓二ヶ所ありしが此の陵墓は已記せし如く

古史の證するものなきも陵墓と地形に依りて十分敬虔の心を以て保存するの必要ありと深く村長に告げたり右に付若松延岡署長は支局員に語つて曰く長井の可愛山陵の如きは村當局と協議し不敬に渉らざるやう相當の干渉を試みんと欲す又吉野の古都も即ち古蹟として保存する要あり共に近日該地方に出張し交渉せんことを期し居れり云々

■増田氏九州巡回日程 一九一三(大正)二年一月二四日(金)朝刊「三五六一号」二頁

宮内省御用掛増田于信氏は熊本縣下の調査は二十日まで終了したれば二十二日鹿兒島に向ひ左の豫定にて九州各縣を巡廻すべし

鹿兒島縣(一月二十二日より全二十五日まで四日間) ▲福岡縣(一月二十六日より二月一日まで七日間) ▲佐賀縣(二月二日より全七日まで五日間) ▲長崎縣(二月七日より全九日迄三日間) ▲大分縣(二月十日より全十三日まで四日間)

■古墳の遺物 一九一三(大正)二年一月二五日(土)朝刊「三五六二号」二頁

舊臘黑板博士等が西都原に於て發掘せる古代の遺物の一部は此程漸く東京帝國大學法科文科の研究室へ到着せるが是等の遺物の年代等に就きては之れより研究の上ならでは詳らかならざるのみならず古墳中にも各々年代を異にせるを以て一様ならざるも少くとも千年以前のものたるは明かにして隋唐の文明を受けたる以前の支那文明を受けたる者たる事は明瞭なり而して右の遺物は種々研究の上四月頃公表すべくその後は宮崎宮なる徵古館に陳列すべき筈なりと

■古墳復舊工事 一九一三(大正)二年一月二五日(土)朝刊「三五六二号」二頁

古墳復舊工事は本月九日より着手し目下着々進捗中なるが全部終了は來る二十八日頃なるべしと

■市川事務官出張 一九一三(大正)二年一月二五日(土)朝刊「三五六二号」二頁

市川事務官は兒湯郡穗北地方に於ける古墳復舊工事狀況視察のため昨日出張本日歸廳せり

■古墳復舊工事終了 一九一三(大正)二年一月二八日(火)朝刊「三五六五号」二頁

兒湯郡西都原に於ける古墳復舊工事は去る廿六日(木)中に全部終了したるを以て知事の

歸廳を以て鎮靈祭を執行すべく目下夫れ夫れ準備中なりと

■古陵に就て 一九一三(大正)二年一月一九日(水)朝刊「三五六六号」五頁

若松延岡署長は古陵保存の件にて廿七日南方村に出張せり

■知事一行招待 一九一三(大正)二年一月三十日(木)朝刊「三五六七号」二頁

今回地方長官會議のため上京中なりし有吉知事一行は在京中龔に本縣各地の古墳調査を終へて歸京せる黑板博士一行の招待を受け本縣今回の古墳調査其他に關して種々興味ある談話ありたる由

■記録脱稿 一九一三(大正)二年一月三十日(木)朝刊「三五六七号」二頁

本縣各地古蹟に關する記録は豫ねて田村調査員の手によりて起稿中なりしが此程全部脱稿せしを以て遠からず上梓さるべしと

■陵墓地視察 一九一三(大正)二年一月三十日(木)朝刊「三五六七号」二頁

三浦敏氏、若松延岡署長、加藤南方村長、有馬南方小學校訓導一隊となり去廿七日午前八時頃より南方村なる天下の天神社に會し古陵地の視察をなせしが天下の天神社所在地一帯は或は高千穂より都を遷されし土地ならんと思はるのみならず現に其傍に前方後圓の陵墓二ヶ所あり其陵墓の廣さは東西三十九間南北十八間ありたり夫より吉野に移りて視察せしが此處にも十三ヶ所の陵墓あり内最も大なるは鏡形にして東西三十八間南北八間あり南北の幅員はヨリ以上ありしものゝ如くなるも既に或時期に於て掘崩したる如き形迹あり此吉野より南方五ヶ瀬川を隔て高天原と呼ぶ處あり此高天原も古來の傳説にては天下と同様高千穂の都より此處に都を遷されしものと稱し居れるが此高天原は或は景行天皇の行在所なりし事あるべしとの説あり同一行再び日を期して此高天原及び陵墓の散在せる野田野路、大貫の各部落を跋渉調査すべしと右に就き若松署長は吉野地方は確に或時代の古都に相違なかるべく今回の視察よりすれば高千穂は此處に遷都され順次、兒湯郡の笠狹に遷されしにはあらずやと思はるゝなりされば南方村には直に陵墓保存の舉あるべきも國庫若しくは縣郡にても相當施設補助を爲すは尤も至當なるべし云々と語れり

■知事の歸來談 一九一三(大正)二年一月三十一日(金)朝刊「三五六八号」二頁

【前略】

▲此時田中宮司の來訪に依りて談は他轉し過般來縣の教授連には屢々面會せり古墳調査の談話を聽かん爲め教授連と上野精養軒に會合したり幸に山口諸陵寮頭斯波宗教局長も出席を承諾せられたるに依り深更まで古代の日向を語りて興味と實益とを併せ得

たり▲黑板博士の如きは日向には好古學の教室を設くるの價值ありと迄言へり日向の古蹟が我國體に關聯して重大なる事は各方面に唱えらるるに至れる如し之れ極めて喜ぶ可き事なり正午に近きを以て辭し去る

■石柳貝塚発見 南方の陵墓地に於て 一九一三(大正)二年二月四日(火)朝刊「三五七二号」五頁

延岡の三浦敏氏等は先月東臼杵郡南方村の陵墓地を視察したるが去一日第二回の踏査を為せり全行者は加藤南方村長、荒木警部補、壹岐巡查、延岡支局員村有志松田品吉、富山實作の諸氏にして最初大貫の丘山字丸山の林中を踏査せしに意外にも石柳及貝塚の大発見を爲し此発見に就き三浦氏の語る處を聞くに

石柳は今迄縣下に於て発見されしものゝ内最偉大にして他に非類なきものたり貝塚は縣下に於て第二の発見にして貝層約一尺五寸延長七十間に餘れり此地一帯に點在せる古墳中大なるは十數間に餘るものあり此等の點より察するに確かに古都たりしは明かなり加ふるに野路の域區に屬せる高天原と稱する一帯の丘畔より西南に連續紆餘水田に面せる處は延喜式に言へる河邊の驛にして往昔景行天皇の御通御されし處なり云々

全所より野田校の有馬訓導一行に加はり野路に入り一二古墳を発見し再び高天原に到り景行天皇腰掛石を見たるが此處は所謂河邊驛の一畔にして眺望頗る絶佳なり夫より野路山稻荷社畔に前方後圓の陵墓を発見し夫より野路の中央を横斷し常樂寺に至る全寺は實に土持家の菩提所たり夫より山伏塚を経池畔の鏡形の古墳を視察して歸延したり當日發見せし古墳二十餘中疑なきもの十三多少疑を存するもの七八あり後日再調査を爲す筈なりと

■發掘者送附 一九一三(大正)二年一月八日(土)朝刊「三五七六号」五頁

兒湯郡西都原より發掘せる各古器物は縣廳にて夫れく荷造を爲し兩三日中に東西兩大學へ一應送附する由なるが同品は總て貴重品として途中の運搬も取扱はれ中カブトの分は本縣より近々上京の警官に特に携帶持參せしむる筈なりと

■考古學分科の設置説 一九一三(大正)二年一月二十五日(土)朝刊「三五八二号」二頁

曩に本縣各地の古墳を調査して歸京せる喜田博士一行は其後各材料に基き各方面より種々研究中なるが全博士の研究に依れば比較的新らしと目せられたる本縣の古跡は研究の歩進むに従ひ殆んど時代の判明に困難し來り益々研究の必要起りたるを以て大學の考古學分科を本縣西都原に新設して斯道の専門家に共に親しく起臥し研究するの必要あることを主張され居る由なるが果して此の舉の實現するに至らば本邦史學界の注意すべき一問題となるべしと

■可愛の山陵祭 一九一三(大正)二年二月一七日(月)朝刊「三五八四号」三頁

東臼杵郡神職支部主催となり三月廿三日東臼杵郡北川村の可愛の山陵所在地に於て祭典を執行すると同時に有志會を開き山陵保存に關し協議會をも開くべしといふ

■申告祭 一九一三(大正)二年一月一八日(火)朝刊「三五八五号」二頁

兒湯郡西都原に於ける申告祭は來る廿日(日)十一時より舉行の事に決したるが祭主は都農神社永友禰宜にして有吉知事、市川事務官、大野宮崎宮禰宜、永友屬及附近各町村の神職等多數參列の上最も莊嚴靜肅に施行せられ附近各村青年團體其他より餘興として種々の計畫ある由なるが今回は始めての事なれば出來得る限りの盛典を舉ぐる必要なるべし

■知事巡視 一九一三(大正)二年二月一八日(火)朝刊「三五八五号」五頁

有吉知事は十七日(日)二時より市川事務官、遠山技師を隨へ本日兒湯郡役所に於て舉行の教員表彰式及郡農會主催の二毛作及桑園品評會褒賞授與式及農事獎勵賞與式青年大會に臨席の後廿日に西都原に於ける申告祭に臨み序に川南村へ巡視の由

■古墳講話 一九一三(大正)二年二月一九日(火)朝刊「三五八六号」二頁

東臼杵郡延岡地方教育會十日會の席上にて三浦敏氏は兒湯郡西都原古墳に關する實地調査に就ての講話を爲せり講話の要點は埋藏物土棺方墳肩鍔等の新發見墳輪の配列法にして何れも耳新しく感興する能はざらしめたりと

■可愛山陵に就て 一九一三(大正)二年二月二十日(木)朝刊「三五八七号」二頁

東臼杵郡北川村大字長井なる可愛山陵に付ては神職會東臼杵郡支部の主催にて山陵所在地に郡内有力なる有志の會同を乞ひ山陵保存の必要より全般に及す件々を協議し其贊同を得ると同時に山陵祭を執行し併せて陵守として有力なる神職を常置すべしといふ因に山陵祭の日取は尚未定なるが已記三月廿三日山陵祭を行ふといふは二月廿三日の誤植に付き茲に正し置く

■可愛山陵祭 一九一三(大正)二年二月二十五日(火)朝刊「三五九二号」五頁

東臼杵郡北川村なる可愛山陵に就ては廿三日有志の來集を催し保存方法に關し協議會を開き併せて祭日を決定すべく變更せしに又復再變して同日有志會後山陵祭を執行せり

■九州の古墳に就て 増田宮内省御用掛の談 一九一三(大正)二年三月四日(火)朝刊

「三五九号」一頁

曩に有吉宮崎縣知事より宮内省に調査方上申したる結果御用掛増田于信氏を初め東京京都兩大學派遣員諸氏が實地踏査ありたる顛末に就き増田氏の語る所を聴くに九州各縣に於て巡視したる古墳は鹿兒島二箇所大分縣二十箇所佐賀縣五十箇所熊本縣約六十箇所福岡縣約八十箇所宮崎縣約二百箇所に於て尚ほ長崎縣及び大分縣下に巡檢したる古墳は多くありたれど日數之れを許さざりし爲め他日に譲るの餘儀なきに至りたるも要するに九州の古墳は殆ど皆景行天皇以後のものにて其以前のものとしては僅に宮崎縣西臼杵郡高千穂に於て少し見たりと佐賀縣松浦郡に於て所謂國造の古墳を見たり止り他は殆ど荒廢に歸し居りたるは誠に残念なり宮崎縣下は別として全體の上より見て九州の古墳は關東關西或は奥羽地方のものに比し完全に保存せられたるもの少きが如くなれど今回の巡視の爲め各縣とも史蹟保存上或は風致上古墳若くは建築物の取締等に就き夫れ／＼各市町村に向つて多少の刺戟を與へたれば今後は大に見るべきの結果も生ずべけれども今日迄は之等の貴き遺物に對し何等の注意も拂はず等閑に附せられ居たるは甚だ遺憾に堪へざる所也云々

■鳥居龍藏氏來縣 一九一三(大正)二年三月一六日(日)朝刊「三六一号」五頁

本邦人類學者として有名な現朝鮮總督府囑託鳥居龍藏氏は本縣下古墳陵調査の爲め近日來縣の筈にて期日決定次第田村事蹟調査員熊本迄出迎ひ縣下西臼杵郡に入り三田井附近の古蹟を調査して延岡に出で可愛山陵其他を視察の上兒湯郡穗北の西都原古陵を調査して來宮の豫定

■鳥居龍藏氏來縣期 一九一三(大正)二年三月一七日(月)朝刊「三六一号」二頁

本縣下古蹟調査の爲め鳥居龍藏氏來縣の事は昨紙所報の如くなるが氏は昨日朝鮮出發本日熊本着研屋支店投宿の旨來電ありたる由にて田村事蹟調査員は出迎の爲め昨朝熊本を向け出發したれば氏一行は明日若くは明後日縣下西臼杵郡に入るべく當地着は多分廿七八日頃なるべし

■鳥居龍藏君を迎ふ 一九一三(大正)二年三月一八日(火)朝刊「三六一号」二頁

◎鳥居君のやうな人が、なぜ日向に一度も來ないだらうか、僕はモウ久々斯う考へてゐた、彼は殆ど世界的の人になつてゐるので、常に、多く海外に出てゐる爲でもあるが、此の最も古い土地に、今迄見えぬといふのは遺憾であつたが、今度僕等の希望が事實になつたのは愉快だ。

◎有りやうを言へば、日向に於ける人類學的研究はマダ無い、第一次の宮崎宮大祭典の時、坪井博士が來られて、幾らか調べもあつたらしいが、コレといふ程の發表もなく、縣人では三浦先生の考古學的蒐集の外には、システマチックの材料を持つものさ

へ無い。

◎最近には柴田、今西兩學士が指を染めたばかり、黑板、喜田、増田諸氏は自ら別方面であるから、純粹の人類學的研究としては、君に於て始めて試みられ、且つ遂げられる譯であらう。

◎君の名はモウ都鄙の人の耳に熟してゐる、今更閱歷の紹介でもないが、十六七の少年時代から、怖い意志の硬い人で、小學を卒へたばかり、中等教育もろくに受けないのだが、二十歳頃はモウ獨逸文の講解が出來て、而もムツかしい術語の多い人類學の原書を耽讀してゐたが『人は人を知らねばならぬ』と言ひ『人類の爲めに人類學をやるのだ』と言つて、既に學者的確信を持してゐたのである。

◎郷里は阿波の徳島で、東船場の商人宿兼回漕業『鳥新』の息子だが、干鰯や昆布などを並べた店を通つて二階に上ると、天井に頭の支へるやうな一室、ソレが鳥居君の書齋で、机の上には金文字の厚いのが綺麗に並び、周圍には考古的の遺物が難然として雜居してゐる、中には鬚髯の眼黒く我等を睨むやうなものも在て、氣味の悪いやうな、小穢いやうな所だが、豆のやうな燈の下に、君は夜を徹しての研究を續けたのである。

◎其の頃は政黨の競争が盛んな時で、僕等は壯士擬きの演説屋であつたが、君は古い鞆を肩にして、晝は終日古墳を掘つたり、貝塚を探したりして、寫生圖だけでも百以上になつてゐた「中略」。

◎僕等當時の郷里の新聞にへのやうなことを書てる時、君は東洋學藝雜誌や東京人類學會雜誌等に、内容の多い研究的報告を絶えず掲げてゐた、將來展るのは鳥居だと言はれたが、流石に社會の眼は利いてゐた。

◎君を見出したのは、櫻井知事で、徳島を去る時連れて東京に上つたが、ソレから後の君の苦學といふものは、並や大抵ぢや無い、然し程なく學界で注目されるやうになり、坪井博士を輔けて大學の講座にゐたが、いろ／＼の協會から囑託を受けて、二十年間世界の各方面に出張し、人類學的研究をしてゐるが、其の手を著けた範圍や、足跡の及ぶ所は、凄じう汎いものである。

◎夫人きみ子は、實は君より豪い人で、君を苦學生の中より見出し、學士に非ざるも學士以上の學士也とし、博士に非ざるも博士以上の博士也と信じ、神聖なる經過に於て自由結婚をしたのである、而して夫人が蒙古の王宮に教師として聘せられたのを幸、君も同伴して彼の地を調べて歸つたのである、對蒙政策についての根本的知識は確に君によつて、且つ夫人によつて提供せられる筈である。

◎君の著述はマダ大部なものを出さぬが『人種學』『人種地圖』『蒙古旅行』其他澤山ある、文章も溫籍で含蓄があり、夫人の筆は又格別に巧みなものである君がモウ數十回掲げてゐる大阪毎日の『鴨綠江』などは極めて面白く、時勢に切要な大文字だ。(若山甲藏)

■神職支部會 一九一三(大正)二年三月一日(火)朝刊「三六一三」五頁

十四日延岡今山蓬萊館に其春季總會を開く諸般協議又は報告の後可愛山陵保存問題に入り熟議の結果一は山陵所在地に保存會を起すべく村長へ交渉する事一は神職會支部主催となり一ヶ年に春秋の内一回乃至二回の祭典を行ふ事と決定せりと

■貝塚を発見す：恒富村に於て： 一九一三(大正)二年三月一日(水)朝刊「三六一四」五頁

延岡三浦敏、山室元吉兩氏は近來相携へて古墳探求に従事し何かに珍物を發見して考古學の爲めに貢獻せんと専ら熱申し居れるが去十五日は兩氏郡招魂祭參列後延岡中學校の西方に節を曳き有馬小學訓導を東道となして附近を跋涉せる内恒富村字田の里道に沿ひ小溝の傍にて雨露に晒されし鹿角の如きものを拾ひ幸先好しと猶ほも附近を探求し少なからぬ古器を得たる内圖らずも、南北五十間東西五間に亘る貝塚を發見せしかば兩氏は非常の喜びにて詳細なる取調を爲して歸宅せし由なり山室氏の語る處に依れば此貝塚發見に關しては不日其踏査實況を世に公にすべしと

■可愛嶽探險 一九一三(大正)二年三月一日(水)朝刊「三六一四」五頁

來る二十三日の日曜日をトし延岡三浦敏、山室元吉兩氏の發企にて可愛山陵を以て名ある可愛嶽探險を爲すべし同山は先年二六會主催の下に一行三十有餘名登山したる事あり而して一行中には三浦敏氏もありしのみならず來縣中なりし山口諸陵寮頭亦共に可愛山陵の視察を爲し時の村長芳賀瀧次郎氏に對し諸陵頭より直接に生垣等の設備方を計りし單に可愛嶽登山其物が目的なりしも今回の探險は主として可愛山陵に重を置くものなれば随つて何等か新に發見する處あるを期待せるものゝ如し因に當日は午前八時出發何人にも同伴差支なしと

■鳥居氏の旅程 一九一三(大正)二年三月二日(金)朝刊「三六一六」二頁

本縣の古墳調査に向ふ鳥居龍藏氏の一行は十九日熊本出發高森に一泊の上三田井を経て縣下各地を視察する由なるが今後の行程は大凡左の如し

熊本より高森(一日) 高森より三田井迄(一日) 同地滞在(二日) 三田井より延岡迄(一日) 延岡より高鍋迄(一日) 高鍋より西都原迄(一日) 西都原より妻迄(一日) 妻より宮崎迄(一日) 同地滞在(二日) 宮崎より小林迄(一日) 小林より吉松を経て門司に至る
猶ほ歸路は鹿兒島に迂回し大宰府地方調査をなすやも知れずと

■鳥居氏着村 一九一三(大正)二年三月三日(日)朝刊「三六一七」二頁

鳥居龍藏氏本日午五時當地着二日間滞在古蹟を調査し二十二日講話ある筈二十三日延岡に向ふ由

■鳥居氏本縣に入る 一九一三(大正)二年三月三日(日)朝刊「三六一七」二頁

既電に如く本縣下に於ける古墳及び古蹟の調査を囑託せられたる朝鮮總督府囑託東京帝國大學理化大學講師鳥居龍藏氏は同總督府關東都督囑託佐藤醇吉氏及び熊本市迄出迎ひたる本縣事蹟調査員田村氏と共に去る廿日熊本縣下高森町出發同日午五時西臼杵郡高千穂村三田井着直に新松屋旅館へ投宿せり之れより先き附近各有志家は村界迄出迎ひたり因に一行は三田井附近の神社及び古墳古蹟も調査し二十二日午二時より郡會議事堂に於て一場の講話ある筈詳細は後報すべし(三田井支局)

■鳥居龍藏氏消息 一九一三(大正)二年三月三日(日)朝刊「三六一七」五頁

去る二十日西臼杵郡三田井着の全氏は昨日迄全地の調査を爲し本日全地出發の筈にて當地着は廿八九日頃なるべしとの事なるが全一行には美術學校出身佐藤某氏も全行居れりと

■竹頭木屑 一九一三(大正)二年三月四日(月)朝刊「三六一八」二頁

「前略」▲誰れがドウ言ふた話か鳥居氏は熊本で宮崎縣に行くのは支那の苗族の取調べの爲めでないと辯明して居る▲氏の來縣は知事の要求で古墳調査に來らるゝのだ苗族研究のオーソリティーである所から結び付けて噂する所が面白い▲別府は本縣はビュウと訛る苗族の傳來地ではあるまいかととは中村(徳)などが能く語つて居た事だ▲氏の事だからコンナ噂を研究して見るか知らないが夫れが主要の目的とは滑稽だ。

■延岡に於ける鳥居氏 一九一三(大正)二年三月五日(火)朝刊「三六一九」二頁

鳥居龍藏氏は隨行員佐藤醇吉氏及出迎ひの田村事蹟調査員と共に一昨二十三日三田井を出發し鹿狩戸の坂下より川舟に乗り瀧下に上陸し全所より馬車にて全日七時延岡に着菊池旅館に投宿せしが馬車到着の際三浦敏氏と偶然相會し全氏と視察の打合せを爲し昨日午前八時出發可愛山陵調査に赴けり一行は右三氏の外三浦、浦井、上井の三氏全行全調査後東海村大字栗野名の横穴古墳を視察し歸延後三浦氏宅に於ける古器物を視察し本日は午前九時三浦氏の案内にて過日發見せし恒富村の貝塚發掘視察を爲し午大貫の古蹟を視察し明二十六日午前中高等女學校に於て講演を試み午後五時中町喜壽亭に於ける官民合同の歡迎會に臨み翌二十七日全地出發の筈なり

■岩戸に於ける鳥居氏 一九一三(大正)二年三月二五日(火)朝刊「三六一九」五頁

鳥居龍藏氏田村本縣事蹟調査員一行は田尻西臼杵郡書記、坂元高千穂村長の案内にて

西臼杵郡岩戸村へ三月廿一日入り天岩戸神社に詣て古器物を見次で郷慕ヶ窟に至り竹内旅館に休憩更に古器物を見字五ヶ村に至り横穴古墳及バンバの塔等を踏査し再び天岩戸神社に詣て岩戸神樂の岩戸五番〔□ 芝引、手力男、戸取尊、大神、舞間〕外一番の奏樂を參觀牝六時三田井に向ひたり

■鳥居氏談片 一九一三(大正)二年三月二六日(木)朝刊「三六二〇号」二頁

私が本縣史蹟の調査を致す事になりましたのは本縣知事から政府の方に、政府から寺内總督へ總督から更に私に囑託があつた譯なのです、由來史蹟の調査なるものは細心の注意を要します殊に本縣等は靈蹤到る所に散在して居るのみならず皇祖發祥の靈地として有名なものなれば確なる證蹟があれば兎も角苟も無責任の事等をば發表することは出来ないのです、それに私は久しく大陸の方を踏査して居つた者で急に内地に歸つたのですから、稍趣きを異にして居ると思はれる、加之大体私は、全く九州の事情には疎いものですから甚だ困難であります、何か參考書でもあつてお話すると好い、だけれど事實夫等の古史をも携帶しない、只單に深く自ら究むると云ふ覺悟で來たのです云々(廿四日(木)續延支)

■鳥居氏一行 一九一三(大正)二年三月二七日(木)朝刊「三六二二号」二頁

延岡に於ける鳥井氏一行は一昨廿五日田村紫洞、三浦敏、上井郡視學、加藤南方村長及南方村有志と共に全村字天下、野地大貫等の古墳を視察して廿六日(木)八時より恒富村延岡中學校西方の貝塚を視察し牝二時より私立延岡高等女學校に於て講演をなし本日牝七時延岡發美々津より自動車にて宮崎着の筈なり

■鳥居氏の講演 一九一三(大正)二年三月二七日(木)朝刊「三六二二号」二頁

既報の如く鳥居龍藏氏は昨日(木)二時より東臼杵郡岡富尋常高等小學校に於て古蹟に對する講演ありたる由

■西臼杵に於ける鳥居氏 一九一三(大正)二年三月二七日(木)朝刊「三六二二号」二頁

已報の如く人類學者を以て名ある鳥居氏は二十一日坂元高千穂村長の案内にて岩戸村に出張古蹟及び古墳を調査し牝七時三田井に引返し新松屋に投宿翌二十二日早朝より同地有志家の案内にて四皇子峯を始めとし苟も古蹟として研究材料となるべき箇所は限なく調査し同行の美術學校卒業生佐藤醇吉氏をして寫生せしめ一方吉田寫眞館主をして撮影せしめ點燈時歸宿せり氏の同行者に語る所を聞くに是迄多數の斯界に精通する學者は多く古蹟若くは古墳を主として調査以て之れを研究材料となせしも氏は専ら碑及び丘城を主として調査せらるゝの方針に在りと因に二十二日牝八時より郡會議事

堂に於て各官衙長官屬僚各村長小學校職員有志家等に對し一場の講話ありたるが其要旨に曰く

私の學問は御陵墓等には關係なく人類學に關係あり而して日本と朝鮮の關係は學術的に而かも精密に調査しなければならぬ夫れで輕率な事は出来ないで御當地に參りまして本日有志家諸君より所々を見て貰ひましたけれどもまだ他の方面を視察し且つ調査しませぬから誤りがあつてはなりませんから今晩發表すると言ふ様な事は出来ませぬ要するに單に私の考へを申上る迄でありますから御同意を求めて置きます聞きますと御當地には坪井博士とか中村文學士近くは増田氏等が參られました詳細調査せられましたから御當地の事は或る點では調査が届いて居る事と思ひます乍併私には神話と言ふ事に異見がありますとて第一徳川時代より近來の國學者に就き縷々異見を述べ現今學術の調査は徳川時代と異なるを以て各方面より調査研究するの必要を論じ尚神話傳説と歴史の異なる點を挙げ何れを先きに研究すべきものなるか種々既往の實例を挙げ甚だ疑問であると結びたり尚四皇子ヶ峯の周圍に濠を掘りたる後がある之れは古い時代を研究するの必要あり日向に於ては此の點に注意せねばならぬ云々 (三田井支局)

■鳥居氏來宮 一九一三(大正)二年三月二八日(金)朝刊「三六二三号」二頁

本縣下古蹟古墳調査の鳥居龍藏氏は既報の如く昨日(木)七時延岡發下部試補、田村事蹟調査員と共に牝五時四十分着宮神田橋旅館に入れるが一行中の佐藤醇吉氏は寫生の爲め延岡に居残り日州教育會よりは若山甲藏氏福島迄出迎ひを爲せり尚は來る三十日牝宮崎郡會議事堂に於て鳥居氏の講演ある筈

■延岡に於ける鳥居氏 一九一三(大正)二年三月二九日(土)朝刊「三六二三号」二頁

二十六日鳥居龍藏氏一行は既報の如く恒富村出北なる貝塚を調査し全日牝三時より岡富校に於て『日本帝國々境に住せる住民々族』の題の下に講話を爲せり其大要は日向の郷土に散在せる事蹟靈蹤を調査するは大に其價値ありと前提して内地、内地及外國との境界の關係を説き更に我が民族の往古現在の由來より人種の類別、諸外國との係累を詳細説述せらるる特に臺灣人種に就いて餘す處なく語り最後に我が國の祖先は日向より發祥せられ給ひしこと等を説き降壇せり此の間約一時間を要したり全日牝六時半より延岡中町喜壽亭に於て鳥居佐藤及田村三氏を正賓として歡迎宴を張れり來會者は

三浦敏、長池淨、安藤國秀、橋川徳治、根井久吾〔〕廣瀬太平、清水雅己、甲斐伊佐雄、齋藤政喜、上田信和、奈須榮右衛門、日吉幾治、川名拙藏、上井甚太郎、野井三夕、炭本次三郎、松崎貞利、岩切胤信、川澄民七、河野格、仲田又次郎、吉田律〔〕菊澤鹿吉、長野猪滿藏、渡邊貞四郎、岩切靜馬、大内典保、中山通四郎、

木村伊豆雄、山室元吉、若松悌二

の諸氏にして齋藤郡長簡單なる挨拶を述べ次に鳥居氏の口演あり午七時半開宴し各自十二分の歡を盡して散會したるは午十時半なりき佐藤氏を除き他は翌廿七日午七時延岡を發せり

■鳥居氏の穂北視察 一九一三(大正二)年三月二十九日(土)朝刊「三六二三号」五頁

一昨日來宮したる鳥居龍藏氏は昨日若山、田村諸氏の案内にて廳下附近を視察し今明中西都原視察の筈にて永友縣屬は右準備の爲め本日より全地へ出張の由

■鳥居氏一行 一九一三(大正二)年三月三〇日(日)朝刊「三六二四号」二頁

來宮中の鳥居龍藏氏、佐藤醇吉氏一行は若山、田村兩氏の案内にて昨日午九時出發青島を視察夕刻歸宮したるが本日は榑中宮崎宮徴古館に於て參考となるべき器物の寫生を爲し午一時より郡會議事堂に於ける日州教育會主催の講演會に出席し明日午八時出發西都原視察を爲す由にて永友縣屬は本日より全地へ出張の筈

■鳥居氏の講演 一九一三(大正二)年三月三十一日(月)朝刊「三六二五号」三頁

豫報の如く鳥居龍藏氏は昨日午一時より郡會議事堂に於て得意の講演を爲したるが聴衆非常に多かりき講演の大意は次號に報ずべし因に今氏は本日午八時西都原に向ふ由

■東蒙古の蒙古人(一) 一九一三(大正二)年四月一日(火)朝刊「三六二六号」二頁

東京帝國大學講師鳥居龍藏氏は今回本縣の依頼に應じ數日來縣下各地の古墳等調査中なりしが三十日の日州教育會臨時總會席上に於て約一時間に亘り大要標題の如き講話を爲したり〔後略〕

■鳥居氏慰勞會 一九一三(大正二)年四月一日(火)朝刊「三六二六号」二頁

日州教育會に於ては講演を乞ひたる鳥居龍藏氏を一昨日午六時紫明館に招待して慰勞の宴を開り

■鳥居龍藏氏 一九一三(大正二)年四月一日(火)朝刊「三六二六号」二頁

昨朝八時妻を向け出發したるが全行者は佐藤氏の外若山、田村兩氏にして約二日に亘り西都原及都於郡村高屋城趾等を視察し都農神社に立寄り再び延岡に赴き古墳塚の調査を行ひ來る五六日頃來宮小林を経て鹿兒島に赴く由なるが田村事蹟調査員は妻地方の視察に全行して歸廳し全所以北は永友屬全行の筈なりと

■青島遊記(上) 鳥居氏一行の調査 一九一三(大正二)年四月一日(火)朝刊「三六二

六号」七頁

〔省略〕

■東蒙古の蒙古人(二) 鳥居龍藏氏談 一九一三(大正二)年四月二日(水)朝刊「三六二七号」一頁

〔省略〕

■鳥居龍藏氏 一九一三(大正二)年四月二日(水)朝刊「三六二七号」二頁

同氏一行は三十一日妻町着大坂屋に投宿昨日より古蹟調査に着手せり三日午一時より穂北小學校に於て一場の講話を爲す由なり

■青島遊記(中) 鳥居氏一行の調査 一九一三(大正二)年四月二日(水)朝刊「三六二七号」四頁

〔省略〕

■青島遊記(下) 鳥居氏一行の調査 一九一三(大正二)年四月三日(木)朝刊「三六二八号」一頁

〔省略〕(若山甲藏)

■佐土原に於る鳥居氏 一九一三(大正二)年四月三日(木)朝刊「三六二八号」二頁

三十一日午十時來佐せし鳥居龍藏氏は植村町長、和田縣會議員、大川郡參事員等の案内にて小學校に臻り佐土原人形を熟覽の上全人形製造場をも視察し佐土原辯天座に行きて歌舞伎俳優加賀富三郎に逢ひ人種學骨相上に就き佐藤氏をして寫生せしめ其より町有志者に見送られつ、佐土原町上田島字堤村つむぎ田の古墳を訪ひ其形狀等寫生の上午三時四十分其場より妻町西都原に向つて出發したり

■土器散布の村 一九一三(大正二)年四月七日(月)朝刊「三六三二号」二頁

宮崎縣輕鐵線路に當れる本郡赤江村大字津和田にて全工事の爲めに土地の發掘を爲したるに土器層を發見し谷口炭山氏之れを調査しつゝありとの噂あり昨日曜を作用し散步旁々有吉知事大橋所長齋藤事務官浦井平野本部の三技師岩切加藤の諸氏右の土器層の視察を爲したり谷口氏先着して案内の勢に當りたり目下露出し居れるは線路用盛り土のために發掘したる場所にして表面より一尺五寸許下部なる黒土に赤、鼠の土器の破片多數散在し鋤を入れて掘るに従ふて益々多數發見さる夫れより案内に従ふて各方面を調査したるに方二三十町の田と云はず畑と云はず到る所に散布露出し土地の者は土器畑と稱し居れり右は石器時代の遺物にして所謂土器層なる者なりとの事なり右土

器のある所には陶磁器の破片も発見さるゝは如何にも不思議なれど實際釉のかゝり居れる焼物を多数散布せりと云ふ。

■土器村視察(上) 狷庵生 一九二二(大正)二年四月八日(火)朝刊「三六三二号」二頁

縣廳では知事の發起で折々日曜には郊外散策が行はるゝ丁度赤江村津和田で石器時代の土器層を発見したとの噂があつたので好時節節ではあるし視察旁々出掛けやうとの事から縣廳からは知事「」齋藤事務官、浦井、平野、本部の諸氏と大橋所長で岩切氏及び僕等も随伴する事になつて朝の九時に縣廳で集合ひ全所を向け出發した。

津和田の橋のある所の左手の輕鐵線路の左側に土工の爲め土を四尺許り切り下げた場所がある上層は砂土で一尺五寸許り下部が黒土で其下が粘土になつて居る其黒土に點々赤又は鼠色の土器の破片が散在して居る鍬を以て土を削り落とす何處からも多數発見さるゝのである最初は誰れも注意する者がなかつたので土と共に輕鐵線路に盛られて仕舞ふたと云ふ事だ其内に多少完全な壺及び土偶は谷口氏が保存して居ると云ふ事である更に導かれて線路の右手の部落のある所に到り附近の畑地や屋敷などを見ると何處にも右全様の破片が散布されて方二十町は全く土器を以て充たされて居ると云ふても善い。

右土器の破片はドンな種類かと云ふと多くは赤土器である鼠色のものも多い完全なものが見當らなかつたから何とも明言は出来ぬが多くの壺及酒器の類らしい古墳から發掘するものと全様の土器であると思へば大差はない中には種々の紋様のある者もある紋様には別に異議はないが能く調べると布目のあるものがある之れが疑問の種となるものではあるまいか。

此外最も不思議なのは陶磁器の破片の澤山ある事である當日採収したものには確實に夫れと認む可きものはなかつたが谷口岩切氏等の採収中には呉須、青磁、高麗と見可きものがある土器の多い所には陶磁器の破片もある抑も何故に陶磁器があるかは疑問ではないか僕等素人には判らないが貝塚は石器時代の人類が貝類を採収して食用とした其貝殻の棄てられたもの土器層は全時代に種々家具に製造した土器類の用品の棄られたものが埋り埋つて今日発見さるゝのであると承知して居る石器時代の事と云へば我々の祖先が此地に住居する以前に居た人類の生活時代を總稱して云ふので幾千年幾萬年前の事や判りはない右土器は其時の遺物と見のが相當だが茲に疑はしいは布目の付いたのが発見さるゝ事である布目がありとすれば奈良朝以後と見ねばならぬソナ新しいものが層をなして埋藏されて居る筈もない爾も方三十町も散布されて居る筈がない。

次ぎには右の土器が石器時代のものとする陶磁器類の釉のかゝつて居るものがある筈は絶対にない勿論陶磁器は右の黒土層の中にはないが土器の散布して居る畑などに

は往々散見する之れが一大疑問である皮肉屋は皮肉つてナアニ土器層もあつたものでない昔瀬戸物屋があつて夫れが破産して散らばつたのだイヤ夫れが支那焼でありとすれば陶器船の戎克が暴風に遭ふて漂着破船したのだと云ふて居るがソナ惡口も一部の道理がないでもないが一村全般に分布されて居るのと陶磁器と土器とが交つて散在して居ることは瀬戸物屋の破産でも戎克の難破でもない様に見える之れを斷定するにはドウしても土器と陶磁器とは別種にして考へねばなるまい夫れで僕は歸宅後岩切(柏堂)君の採収した陶磁器の破片を見て種々想像を逞ふして見たのである。

■土器村視察(下) 狷庵生 一九二二(大正)二年四月九日(水)朝刊「三六三三号」三頁

先づ土器の散布に就きて考へて見るに此地方は海濱に近く一体低地であつて全般が沖積層から成立して居る總て太古は海であつた事は多くの好古學者の一致する所である過日倉岡村の貝塚を視察した岸上博士も倉岡一帯の高地が太古は海岸であつた事は地形から見て争はれぬと云ふて居られた倉岡村に貝塚がある事から考へると此邊は無論海でなければならぬ海中に石器時代の人類が棲息する理由もないから之れが全時代の遺物であると云ふ事が怪しくなる殊に全地層中に輕石を発見したと云ふ事であるから益々石器時代のものでないのが證據立てらるゝ然し茲に疑ひを存せしむるのは此地方に石斧、石刀の如きものが発見された事であるソウすると或は石器時代のものかとも思はするのだ。

次には陶磁器である此散布も土器の散布されてある場所が多い岩切君の採収したものは五六十種もあるが破片と云ふ内に糸底の部分が多い大半は青磁の釉がかゝつて居る中には呉須もある様だ生地に模様があつて象嵌の様になつて居るものもあり又唐草様の藍繪もあるが何れも精巧品でなくて不格好の品が多く糸底などはドレを見ても甚だ不出来で中には全く釉ののつて居ないものがある土器と違つた時代のものたるは疑ひなく土器が奈良朝頃とせば此陶磁器はモット近代のものであると云ふて善からう。

支那式で爾かも未製品たる如き陶磁器が何故にコンナに散布して居るか種々の想像を逞しふする事も出来るが僕が考へて見るのに此の地方は上古から窯業地であつたのではあるまいか津和田は海神に通じ全地には其祭神の社がある木花村は此地から近く之れは木花咲耶姫に因みがある舊記古傳に窯業地であつた話でも傳はつて居るかソナ考證は知らないが笠笠の都の需要品は此地で製作されたのではないか今地層に残つて居る土器は其時代のもので其れが時代の進歩と共に窯業も發達し支那との交通もあつたりして後には釉のかゝつたものを焼く様になつたのではないか素人判斷に此位の事を考へて見ると益々判らなくなつて仕舞ふ。

遍ねく視察して稻荷山の方に歩を進め全山頂にて中食をなした一眸千里まことに風景が好い空腹ではあり時節は好し辯當の甘かつた事夥しい知事の携へられた瓶詰も今日

に限りて天の美祿と頂戴した夫れより歸途大日本教會の河谷氏方にて恒久岩切家に古く傳はつて居る兜を見た之れは妻神社に景行天皇の寄進されたのを全家が津和田の田元神社に携へ來つてのだと云ふ事で歴乎とした系譜が付いて居る之れを見て一行家に歸つたのは牴三時であるた。(二頁)

■教育會 講演筆記正誤 妻町旅舎 鳥居龍藏 一九一三(大正二年)四月一〇日(木)朝刊「三六三四号」二頁
[省略]

■古墳調査談…考古學會に於て… 一九一三(大正二年)四月一日(金)朝刊「三六三五号」五頁

此程東京帝國大學構内山上會議所に於て開會したる考古學會例會は先づ關係之助氏は其擔任調査したる西都原第百十、百十一號二個の古墳に就き詳細に述べ引續き黒板博士は古墳調査の經過に就き最初の動機其顛末等を詳述せるが就中今回古墳の發掘に於ては博士從來の抱負を實行し得たる事即ち發掘に際し祭典を行ひ道徳と學術研究との融和を計り又其調査に際し極めて學術的に遂行するを得たる等の始末を述べ更に今西龍氏の西都原姫塚及一本松塚の調査に付二個の古墳の構造遺物の配置等に就き詳細の講演ありたるが既に閉門時刻に近づきたる爲め説明の一部を省略したる程なれば豫定の喜田博士の日向と天孫種族とに就きての講演は纔かに其梗概を紹介せられたるに過ぎざり即ち天孫種族が日向に降臨せしは如何なる事か、天孫降臨以前の日向の歴史上に現はれたる事實、神武帝東征以後の日向の狀態等にて其他の大部は遺憾ながら次回に割愛したりと

■鳥居龍藏氏 一九一三(大正二年)四月一四日(月)朝刊「三六三八号」二頁

二週間前より兒湯郡下穗北に滞在し古墳調査中なりし全氏は去十二日新田村を経て牴五時高鍋に來り鼈甲屋旅館に投宿し今夜稱專寺に於て『有史以前の日向』といへる題にて一場の講話を爲し昨十三日は牴七時より郡役所農學校高鍋上江兩町村吏員其他の有志一同全氏に隨伴し木城上江高鍋各方面の神社古墳古蹟及蚊口鶴戸神社等を精査し牴七時より第二四季亭に於て全氏の歡迎會を催せりと

■鳥居氏來宮朝 一九一三(大正二年)四月一五(火)朝刊「三六三九号」二頁

穗北地方視察中なりし鳥居龍藏氏は既報の如く去る十二日高鍋に出で翌日滞在附近視察の上昨日延岡を向け出發したるが本日は南方地方の視察を爲し明十六日來宮の豫定なるも雨天の爲め或は一兩日延期となるやも知れずと云ふ因に全氏と全行穗北地方へ出張中なりし田村縣書記は十二日歸廳したるが聞く處に依れば鳥居氏の穗北地方に於

て發掘したる個所は七ヶ所にして多數の古器物を得たるが右の内玉類其他重なるものは田村氏携帶歸廳したるも其他の雜品は全地に於て嚴重荷造の上今明日中縣廳に送付し來る筈なりと

■鳥居氏一行 一九一三(大正二年)四月一五(火)朝刊「三六三九号」五頁
鳥居龍藏氏及佐藤隨行員一行は十四日牴陸路高鍋を経て延岡に來れり上井郡視學は土々呂迄出迎ひたり

■鳥居龍藏氏 一九一三(大正二年)四月一六(水)朝刊「三六四〇号」一頁

鳥居龍藏氏は十四日牴延岡に着し直に菊地旅館に投宿佐藤醇吉氏と長友縣屬附添へり岩切郡書記郡塚幸協に出迎たり十五日は早朝より一日豫定にて東臼杵郡南方郡天下の最も大なる前方後圓の古墳及び又最も小なる前方後圓の古墳二ヶ所を發掘調査する筈一日にて終了の豫定なりと(延支)

■鳥居氏の古蹟調査…劔鏡玉類を發見す… 一九一三(大正二年)四月一七日(木)朝刊「三六四一号」一頁

延岡滞在中の鳥居龍藏氏は一昨日南方村字天下上野原山林中の古墳發掘を爲したる結果組立石棺二個を發見せり内一個は長さ七尺三寸幅二尺七寸厚三寸にして其の中より劔一口直刀一口古鏡一面を發見せり棺は朱を以て詰めたる如き迹あり他の一個は長さ九尺幅三尺厚三寸にて其中に直刀六口鉾一個劔一口瑪瑙管玉三個青色曲玉一個硝子製南京玉八十個鐵製鐵十本を發見せり是亦朱づめにしたる跡あり夫より全地筒井の古塚發掘に従事せり塚の一部は既に切崩し柳田近次、全福左衛門の居宅を築造し居れるが塚は繪鏡形にして長さ四十間幅九間あり一丈餘掘下げたる地點にて粘土に達したるが永友氏先づ土棺あらんといひ鳥居氏も或は然らんと同意したるが三浦氏は石棺を覆へる粘土なるべしといひたるも時既に薄暮となりしを以て一先發掘を中止し昨日又々繼續發掘に従事したり

■貝塚に人骨 一九一三(大正二年)四月一七日(木)朝刊「三六四一号」五頁

過般發見されたる東臼杵郡恒富村字沖田の貝塚にて鹿骨野鳥の骨の間より人骨を發見したる由なるが附近にては早くも食人々種が人肉を食ひたるものならんなど噂し居れりと

■竹頭木屑 一九一三(大正二年)四月一八(金)朝刊「三六四二号」二頁

「前略」▲延岡の貝塚から鳥獸の骨と共に人骨が出たと云ふ事だが之れは大に研究す可き事である天孫人種以前の人種が獐猛なる食人々種であつたかは學者の種々議論の

ある所で多くは食人々種でないといふ事に一致して居る様だ▲鳥居君等の研究の好材料であらう▲其時代には餘程鹿が多かつたものと見えて鹿の骨が多く釣道具なども鹿の角が多いと云ふ事だ▲何千年の昔の話で現代には交渉がない様だが日向は太古の歴史あつて初めて意義があるので古香衣を吹く所に眞の日向が解釋さるゝ。

■鳥居氏の古墳發掘（續報）：土棺の中より劔と玉… 一九一三（大正二年）四月一日（金）朝刊「三六四二号」五頁

東臼杵郡南方村字天下筒井の古墳發掘は前號所報の如くにして一昨日も猶引續き續行されたるが今當時の状況を項別にして報ずべし

▲天下の地位 天下は五箇瀬川北岸の丘上の地にして南方に大日如來を安置す往昔天神社の舊蹟なるが大日如來の在る所即ち長さ七十餘間幅二十餘間の鏡形陵形を存す此北方村家を隔てたるもの即ち筒井の古墳なり

▲發掘状況 去十五日發掘に着手せし筒井の古墳は長さ三十九間幅九間なり全日は薄暮迄に約九尺堀下げたるに淡紅色の粘土現はれたれば永友鳥居兩氏は正しく土棺ならんと主張せしが果して其言見事に命中したり全日は其にて中止し一昨十六日は午前六時より引つゞき開棺に従ふ事となりたり佐藤醇吉氏は寫生ワイエス寫眞館主人は撮映に従ひ時々刻々に現はれ出づる器物、墳内状況の變化を描し取るに餘念なく鳥居氏三浦氏等は其發掘に専心意を注ぎ居たり土棺は東西に伏せあり長さ一丈五尺、幅三尺二寸上部は悉く一尺の粘土にて包み之に川石を叩き付け其上部を砂利にて覆へるものなりき

▲棺内の劔と玉 土棺を覆へる砂利の中より石斧其他の器物木炭出でたり其地層變色せるを見たり鳥居氏は之を観て石器時代の人類の住せる地層なりと言へり斯くて愈々開棺に及びたるに内部は朱の色鮮明にして墳の主人公は東枕にて臥し居たるもの、如く肩より胸部と覺しき邊に管玉二十曲玉五個在り是當時細にて吊し居たるものらしく千鳥形になり居たり然のみならず其頭部ならんと想像する邊に足袋の甲馳より稍大なるもの數個ありたり鳥居氏は之に對して最も多大の注意を拂ひつゝ、熟視し此形狀は伊邪那岐尊の用ひ給ひし櫛に等しとて佐藤氏の寫生に對し最も意を注げり、体の中央より下部と覺しき處には劔鉞大小四五口現はれたるなり

▲附近の雜踏 十五六兩日村内の有志青年會員は悉く出役して其發掘に當りて參與者に對しても懇切なる待遇を爲したるが發掘の状況を見んとして集り來れる村民は其周圍を十重二十重と取圍み人の垣を作り雜踏名狀すべからず警官は其取締に忙殺され居たり

▲參與員 鳥居氏一行の外發掘に參與せしは三浦氏加藤村長及發掘前後の祭典の任に當りし甲斐神職、齋藤郡長、加藤村長、上井郡祝學、若松署長荒木警部補其他にして終了後以上の人人並に青年會員等記念撮映を爲せり

▲訓示 齋藤郡長、若松署長は古墳保存に就き村民に對して一場の訓示を爲したり▲某氏談 此發掘の際某氏は語りて曰く天下は天が下と書く此字既に天神の天降れる神代を意味し又附近に高天原と稱する處あり發掘せる土棺の構造も西都原の陵より年代古きより察し如何にも神代の古き昔を物語れるものの如し云々

▲鳥居氏出發 鳥居氏及佐藤永友兩氏は昨日午前五時延岡を發し妻町に向へり

■竹頭木屑 一九一三（大正二年）四月一日（土）朝刊「三六四三号」二頁

「前略」▲岩切君が津和田と全様の土器村を下北の舊皇居跡地方に發見したと云ふ事だソウなつて來ると昔の窯跡などと云ふて居られないかも知れぬ。

■發掘せし古墳は何？…某氏の斷定… 一九一三（大正二年）四月一日（土）朝刊「三六四三号」五頁

▲其時代 昨紙所報天下の筒井なる柄鏡形の古墳に就き某氏の評に曰く地下一丈餘の地點に於て石器及木炭等を發見せしのみならず其地層の著しく變色せるより見れば正しく石器時代の間人が居住せし處なるは疑ふ可からず而して石器時代の遺物を發見せし地下二三尺の處に土棺あり其棺中曲玉類を發見せしより見れば石器時代と神代は或は接續せしものならんかと思はる其古墳は言ふ迄も無く神代のものなるべし前號所報の如く棺中よりも伊弉諾尊が用ひ給ひし櫛と同形のものを發見せしが此櫛は『ミヅラの玉櫛』と稱するものにて當時頭髮を中央より左右に分け耳の上部に於て輪を作り之を止るに用ひし品にて或部分に於て現時の束髮櫛に幾分似たる點あり此等の物体に徴するに石器時代に次げる古墳たるは疑ひも無き事實にして或は日向の他に無かる可からざる彦火々瓊々杵尊、彦火出見尊、鸕茅草不合尊三神の中の御陵墓ならんも知る可からず兎に角筒井古墳の發掘は本縣内に於ける大なる發見物たと同時に考古學上に資する處至大なるべきを信ず云々

▲日向と大和 某氏は曰く南方村大字三輪地内なる青谷城は全く太古の城址なりし城は城の轉化せるものなり此地は深林中に在て其中に大三輪神社なる社あり、河を隔て、北方に吉野と呼ぶ地あり吉野は天下の本字にして筒井の古墳より南西に當れる地點なり茲に注意すべきは大和國にも大三輪神社なる社あり同じく川を隔てし處に吉野と呼ぶ地名あり思ふに大和の大三輪神社は或は青谷城山中より勸請し吉野の地名も同時に移名せしものならん云々

▲古墳多數 南方村吉野、天下、大貫、野地、野田地方の丘上には古墳散在し目下已に多數判明し居れるが尚未知のもの亦多數なるべしと

■神籠石ならんか…三浦氏に調査を囑托す… 一九一三（大正二年）四月一日（土）朝刊「三六四三号」五頁

東臼杵郡西郷大字山三ヶの鬼の岩屋と稱す處は孤立せる山にして其山邊谿谷は言ふも更なり其山を抱繞して幾百千と數知らざる石並列せるを此程に至りて發見せしが或は神籠石ならんとの評あるも何分人跡絶えたる地なるが故に未だ精査するものなかりしが今回阿賀多神社々司持氏は三浦敏氏に其調査を囑托したりと云ふ神籠石とは太古に於ける城砦の趾にして石を以て自然の山廓を抱繞せしものを稱するなり

■鳥居氏一行 一九一三(大正二)年四月二〇日(日)朝刊「三六四四号」二頁

豫ねて兒湯東臼杵兩郡地方の各古墳を調査中なりし鳥居氏一行は一昨日妻より來宮神田橋に投宿し昨日は永友縣屬佐藤囑托一行と高等女學校に蒐集しある各種の古器物及徴古館内に於る各器物の寫生を爲したり

■發掘土器と鳥居氏 一九一三(大正二)年四月二〇日(日)朝刊「三六四四号」二頁

昨日は遠藤高女校長の催にて全校に津和田郡司分下北等にて發掘せる土器陶磁器の陳列を爲し鳥居氏の來校を待ちて講話を開きたり來會者は有吉知事大橋裁判所長高野檢事正田中宮司大崎貯蓄頭取谷口岩切の諸氏及各新聞記者其他十數名にて各陳列品に對し全氏の談話ありて後ち全校生徒に對して少時講話ありたり

■貝塚を見る 一九一三(大正二)年四月二〇日(日)朝刊「三六四四号」五頁

十八日午より某々兩輩相携へて東臼杵郡恒富村字沖田の貝塚を實見せり塚の在る處は南方に沖田を望み後方東北は愛宕の山麓にて延岡を距約一里道坦々として人車を通ずるを得塚のある邊は麥籾あり小溝あり附近に人家を見ず塚の後方一帯は往古海屋ありしものの如し溝に蒞る四五尺の堤畔累々として貝殻現れ居れり現に某々兩輩も何かの骨片土器の破片又は貝殻を拾ひ歸れり(古酔生)

■官邸の調査談 一九一三(大正二)年四月二一日(月)朝刊「三六四五号」二頁

縣下各郡の古墳古蹟を探究して來宮せる鳥居龍藏氏は一昨夜晡七時より知事官邸に於て調査に關する詳細なる談話を試み約二時間に涉りたり當夜來集の人々は縣廳、裁判所、新聞社及び廳下の重なる人々數十人にして何れも熱心に傾聴したるが氏の談話は未だ發表するに至らざるも考古學上最も貴重なる新發見及び交證に富み太古の日向を研究するに大なる光明を得たる如し何れ公式に發表の機會ある可しと云ふ氏は猶ほ本郡各所の古墳古蹟を探りて一應調査の終結となす由

■古器物寫生 一九一三(大正二)年四月二一日(月)朝刊「三六四五号」二頁

古器物調査のため鳥居氏と同伴來宮の佐藤朝鮮總督府囑托は昨日より徴古館内に蒐集せる各古器物の寫生中なるが鳥居氏も目下各古器物に就て研究中なれば茲一兩日中に

全部終了し直ちに出發歸京の筈なりと

■滞在中の鳥居氏 一九一三(大正二)年四月二三日(月)朝刊「三六四七号」二頁

縣下古蹟調査の爲め來縣目下神田橋旅館に滞在中の鳥居龍藏氏は昨日大宮村南方の古蹟に就き實地調査を爲す筈なりしも雨天の爲め見合せ旅宿に於て既調査個所に關する圖書の整理に従事せるが近日中出發歸任の筈なりと

■陵墓祭 一九一三(大正二)年四月二三日(水)朝刊「三六四七号」二頁

東臼杵郡南方村字天下にては古墳復舊と共に東臼杵郡神職支部の主催にて廿四日陵墓祭を執行する由

■曾木の古墳 一九一三(大正二)年四月二三日(水)朝刊「三六四七号」五頁

東臼杵郡北方村は如何にも古墳のある處ならんとは近頃世人の注目せる處なるが廿一日付志賀曾木駐在巡查の報告によれば概要如左

▲同村字曾木の甲斐萬吉所有山林に石棺あり而して此石棺の在る峯巒一帶の頂上にて權現原と稱する邊は喬樹矮木森々として繁茂し全く人跡の絶え居る處なるが即ち此石棺を實見するに横一尺六寸縱七尺餘にして朱の點々として微に認めらるゝは槌に古墳としての價值を示すものなり

▲又明治十七年頃同所の和田磯吉の所有に係る或原野よりも石棺を掘出せしに石棺の形容は前記の如く同一なるも棺内より長さ一尺五寸位の石劍現れたるが此石劍のある部分には唐草模様様の彫刻ありて實に珍とせし時の郡長故原時行氏の所望により之れを譲り氏より神田孝平氏に贈呈せり噂ありて其後を知るに由なし尚同所の矢櫃と呼ぶ處又は山神の祠あり是亦古墳なるべしといふ

▲曾木田園中にも長さ二十間幅十五間に亘る小丘あり是亦古墳なるも目下開墾して麥籾となり居れり然るに明治五六年頃には此古墳を呼て切支丹塚と唱へ居り此地一帯は樹木雜草蓊々として全く人跡なく何人と雖も一枝を伐採する者無かりしも明治廿五六年頃初めて誰かの主唱に現在の如く成れり

▲尚同所には多くの古墳ありしも明治七八年唯上部のみを掘りたるものゝ如しと同所の前面山といふ一帯の山中に二ヶ所の古墳存在し居れり

■新形式の古墳 一九一三(大正二)年四月二三日(水)朝刊「三六四七号」五頁

一昨日鳥居氏一行の調査したるは宮崎郡大宮村字南方、岩戸、生目村字跡江の古墳なるが南方には柄鏡塚らしきもあれど一ツ最も珍しき形式あるは前方後圓の外に更に一ツ延び出でたるものあり其上の木立ちも頗る古きものなれば餘程面白き研究たるべく跡江の古墳も尊きものなるが岩戸の古墳は前方後圓の中に偉大なる横穴のある如きも

九州にて始めてのものならんとのことにて右二三ヶ所を發掘すれば宮崎方面の古墳の形式内容共遺憾なく知れる譯にて鳥居氏は日程を延長しても發掘することになるべし

■鳥居氏一行 一九一三(大正)二年四月二四日(木)朝刊「三六四八号」二頁

各地の古墳より發掘せる各古器物に就て親しく調査中なりし鳥居氏一行は昨日新坂縣屬と本郡赤江村に於ける古蹟を調査し明日小林を経て歸任の筈なりと

■古墳復舊工事 一九一三(大正)二年四月二四日(木)朝刊「三六四八号」二頁

先日來鳥居氏一行の發掘調査したる兒湯郡下穗北村なる各古墳は本日より全部復舊工事を開始する筈なるが全部終了の日は約十四日間を要すべく縣廳よりは監督として永友屬昨日より出張せるが鎮魂祭は全部終了の日行ふ筈なりと

■貝塚と古墳發見：三浦氏に調査を囑托す： 一九一三(大正)二年四月二四日(木)朝刊「三六四八号」五頁

東臼杵郡南方村字高野にては去二十日貝塚を發見せしが其中より無數の貝殻石器時代の遺物等多數現はれたり又全日全村字平田にては一の古墳を發見せしが其形狀は天下の大日如來所在地の古墳と伯仲の間に在りと室町時代の墳墓ならんと鑑定するものありと全村にては天下古墳發掘以來村民何れも神經過敏となり一種の考古熱に浮かれ居る有様なるが尤も全村内の古墳調査並に保存方法に就ては大に考究すべきものあるを以て加藤村長は三浦敏氏に其方法を囑托することとなりたり調査すべき古墳は天下、吉野、高野、平田に亘り十五ヶ所なりと其内には天日の大日如來、景行天皇行在傳説地等も含み居る由調査の結果は隨時報道すべし(延支)

■鳥居氏一行 一九一三(大正)二年四月二五日(金)朝刊「三六四九号」二頁

鳥居龍藏氏は古蹟調査の爲め佐竹縣視學同行昨日東諸縣郡高岡方面へ出張即日歸廳したるが一行中の佐藤醇吉氏は穗北の御陵墓等寫生の爲め廿二日出張昨日歸宮せり全一行は本日出發陸路歸任の豫定なりし

■愛宕山下の古墳に就て 一九一三(大正)二年四月二五日(金)朝刊「三六四九号」五頁

愛宕山下の古墳と題し東臼杵郡恒富村鬼ヶ城附近にて古墳を發見せし事を報ぜしが全所にては六年前今の柑橘園主井上大三郎氏が開墾せし當時も古墳らしきものに堀當て墳内より土器を堀出せしも何分無智の手足等のごとて普通の陶器の破片同様に心得叩き破りて放棄し古墳と思はしき地點も堀崩したる由なるが其時堀出せし土器の中より多少保存し全地三浦氏の鑑定を乞ひたることありといふ

■堂の上の古墳 一九一三(大正)二年四月二六日(土)朝刊「三六五〇号」五頁

東臼杵郡恒富村内字三須と字小野の堺なる三野分教場の邊にて堂の上と稱し又御陵森と呼べる處にも古墳ある由なるが右に付日吉同村長の談を聞くに同所は古來人跡絶えたる處にて地は村の共有に係り其面積約一反歩なるべし其中央に圓形にして一畝餘の古墳あり其上は密立せる喬樹にして何れも三抱位あり去日鳥居龍藏氏の實見を経ざりしは遺憾事なり云々因に前號に報ぜし井上大三郎氏所有地の古墳は唯土器等各所にて發見せし事數次あるのみにて別に詳記すべき事なしと

■鳥居氏出發 一九一三(大正)二年四月二七日(日)朝刊「三六五一号」二頁

滯宮中なりし鳥居龍藏氏は一昨日憶村へ出張小學校西北方に在る古墳を視察したり全墳は前方後圓式古墳との鑑定にて佐藤醇吉氏昨朝實寫の爲め全所へ赴き九時歸宿したるが全一行は昨日十時の馬車にて出發歸任の途に就り昨夜は小林一泊の豫定なりしが小林迄は佐竹縣視學全行せり

■鳥居氏慰勞會 一九一三(大正)二年四月二七日(日)朝刊「三六五一号」二頁

一昨夜當町内重立つ土の催しにて紫明館に開きたるが鳥居氏のテーブルスピーチは宮崎郡内及び東諸縣郡内に於ける地理學的研究並に考古學的視察にて本莊の上長塚、大宮村南方の遠目塚等につきて特に詳述ありたり後晚餐を共にして懇話數時十一時解散したりと

■古墳發掘之歌並反歌 紫洞生 一九一三(大正)二年四月二八日(月)朝刊「三六五二号」三頁

千早振る神の御魂の
安らけく靜まりますと
古の齋きをろがみ
つがの木はいやつき／＼に
語りつぎ言ひつき來けむ
西都原の神のおくつき
かしこくも眞摯取り持ち
忌みきよめ堀りのまに／＼
くさ／＼寶ぞ出づる
手に取りて見れば尊し
朝にけに見ては憫べと
皇孫にみことかしこみ
身にそへて愛で玉ひけむ

曇りなき眞澄の鏡
 胸の邊に音もゆらんと
 懸けまし、眞玉白玉
 取り佩ばす緒さへ光りし
 くぶつちの嚴の御佩刀
 高響く天の鎗矢
 持たしけむ埴部高环
 そのかみの神の御物の
 まのあたり出づるを見れば
 遠つ世の事ぞしのばゆ
 現し世にましけむ時は
 妹と脊の神のことゝ、
 玉蔓みづらにささせ
 御肌には嚴の装ひ
 い行きます歩みもゆたに
 村肝の心ものどに
 山の上流れの末を
 ひねもすに分け玉ひけむ
 菅の根の長き春日は
 木の下に花かざしもち
 秋されば紅葉折りもち
 久方の月にさまよひ
 眞玉なす御手携さはり
 諸聲に歌ひつ舞ひつ
 飽かなくに奏でましけむ
 風なきに花も散り舞ひ
 堰かなくに月もよどみぬ
 斯くしつゝ睦び親しみ
 永き世をとほに常盤に
 長へに安く靜けく
 平けくましける御代を
 末つ世の年の流れの
 みなかみのいや遠長く
 かしくも神のおくつき
 いそのかみ年ふる里に

埋れ木の埋れ果て、
 誰にもかも昔や問はん
 知らんすべせんすべしらに
 塚の邊を行きたもとほり
 松風の音する方を
 仰ぎつゝ遠き昔を
 しぬびつるかも

反歌

神の代を仰ぎしぬべと長へに
 しづまりませるおくつきぞこれ
 遠つ代をしぬび畏みいそのかみ
 ふるき御塚に額づく我を

■史蹟調査 三夕庵 一九一三(大正)二年五月四日(日)朝刊「三六五六号」四頁

▲古墳數 三十日(九時)延岡出發東白杵郡南方村の字天下、吉野、縣苗圃、高野、平田、下舞野の六ヶ所の古墳を調査し明瞭せるものは悉く標榜を建てたり前回の分を合記すれば如左

第一號天下の大日如來、第二號全所の天下神社畔「」第三號全上、第四號全上、第五號吉野の小字上の原「」第六號全上、第七號全上、第八號全上、第九號全上、第十號天下の小字筒井、第十一號縣苗圃「」第十二號全上、第十三號全上、第十四號吉野、第十五號全上、第十六號全所上野ヶ峯「」第十七號吉野の小字角力田、第十八號全上、第十九號下舞の野の小字赤城、第二十號全所平田、第二十一號全所赤城、第二十二號全上、第二十三號全上

因に前回の前に調査せし大貫、野路、野田等の分を加ふれば渾て五十餘の古墳を算す之れに大貫の浄土寺、高野の上の原、大貫の平には各貝塚を發見し更に尚高野の上の原には一の古墳ありしも今は扁柏の苗圃に開かれあり故に古墳傳説とし標榜を建て置けり而して雷雨を冒し歸延せしが七時頃なりし

▲各自拾物 一行は加藤金彌、三浦敏「」野井三夕の三氏なりしが石器、土器の破片等を拾得する事多々なりし

▲土師の追想 三浦氏の談を聞くに『津和田の土器』は餘り多きに失す右に就て深く考ふるに同じ宮崎の嶋の内にも『ハキサキ』と呼ぶ所あり此處にも多くの土器を發見せしが即ち『ハキサキ』とは土師より轉化せるものならん？又延岡にも俗にハヂと呼ぶ處あり字に書ば萩なり先年此處よりも土器の破片多く出しより之を阿賀多神社々司土持清磨氏求め來れる事ありしが之れも地名を『ハゲ』といひ萩と書くは正しく土師

の轉化より來れるものにて宮崎といひ延岡といひ或は當時の焼物師が居住せし處といふ方妥當なるかも知るべからず由來太古の事多くば如此轉化せるもの多々なるは又己を得ざる次第なるべし

▲太古の山城 亦三浦氏の談に聽くに這回鳥居氏の來縣に依り初めて收得せし説なるが恰も好し本郡南方村宇天下の北方田園に突出せる一急斜の山を指示し之れ取りも直さず太古の山城なり彼の山に登り觀るに東、北、西の三方は無論當時海峡なりしが故に防備の要なく唯單り南方は他の山に連絡せるを以て等閑に附する能はず他山と連り稍や低き處に三段に築ける一の障物あり是れ恐くば塹壕なるべしと思はるゝなり而して彼の山は足柄城といふ傳説ありて此傳説に徴するも太古の山城たるものゝ如し蓋し日本武尊が行藤山に川上梟師を亡すといふ説が動すべからざるものなりとせば當時尊が籠らせ給ひし山城なるや或は計り識るべからざる也云々

■古墳復舊終了 一九一三(大正二年)五月八日(木)朝刊「三六六二号」五頁

先般鳥居龍藏氏實地視察の際發掘したる西都原の古墳七ヶ所は去月廿四日より永友縣屬監督の下に復舊埋立に着手中なりしが去る五日迄に全部工事を終へ當日村長代理立會の上申告祭を執行したる由にて出張中なりし永友屬は一昨日歸郷したり

■古墳の種々 一九一三(大正二年)五月八日(木)朝刊「三六六二号」五頁

東臼杵郡南方村の古墳に關して時々詳細を報道せしが聞く處によれば同郡東海村一文宇山西方の山腰一帯は古來石棺の出る往々ありしが西都原の古墳發掘又は這回南方村の古墳發掘に依り同地方の者は初めて古墳の趣味を解せるより有志間にては全所の古墳調査を希望するもの少からず又全部恒富村平原の字夏井にて一の盛土せし處あり先年畑に開墾すべく鍬を入れしに大なる石棺を掘出せしが其蓋なる一枚石は長七尺もありて恰も龜の形の如く四肢首尾ありしが當時石棺の何たるを解せざる農民の事とて之れを肥料溜の棧橋に用ひ居りしが今回古墳調査の聲漸く喧々たるより數日前復舊工事を施したりといふ

■古墳調査の記事 一九一三(大正二年)五月一日(水)朝刊「三六六八号」一頁

昨年末日より本年にかけ行はれたる西都の原古墳調査の事は其都度掲載を怠らざりしが當時諸氏に依りて行はれたる調査の結果に就きては考古學雜誌第三卷第九號に左の如き題目を以て記載しあり

宮崎縣古墳發掘の經過 黑板勝美

西都原第百十二號古墳 關保之助

西都原姫塚及一本松塚 今西龍

猶ほ全號には好古學會三月例會に於ける『日向と天孫種族』と題せる喜田博士の演説

の概要を掲載せり全博士は日向に天孫種族居らずとの世論に向つて反駁を加へられたる者にして西臼杵郡の高千穂を降臨地となりし薩摩説を破りたる者なるが其大要を讀者に報ずる事とす可し

■日向と天孫種族 文學博士 喜田貞吉 一九一三(大正二年)五月一日(水)朝刊「三六六八号」一頁

考古學會三月例會に於て全博士の講演せる全會雜誌に記載あり日向に關係ある部分を左に轉載せん

天孫人種は如何にして日本に來られしか、少くとも奈良朝時代の人が信じたところに依れば、天孫は高千穂の嶺に降臨せられ、日向國に居給ひて、後大和に行かれたりと、これが事實は如何、天孫の日本に來り給ひしは、瓊々杵尊が初まりに非ず、其以前に饒速日命の大和に來給へるあり、事舊事本紀に載す、天孫降臨以前に饒速日命が大和に來りし古史は一つの例なるも、余輩は之れ以外にも此の類の渡來は少からざりきと考ふ。

天孫降臨は度々あり、其中にて高千穂峰に降臨せられたる御方が、一番有力なる國家を建設し、遂に他は皆之れに吸収せられたるものと考ふ、支那南北朝の史に宋書と稱するものあり、其の中に日本と呉との交通を記す、呉は江南の地なり、其記事中に雄略帝の事と思はる、御方の國書の記事あり、祖先以來甲冑に身を固めて山川を跋渉し、寧處に違あらず、東毛人五十五國を征し、西衆夷六十六國を服し、海を渡り海北九十五國を平ぐ云々と、要するに他の種々の團體は斯くして盡く併合せられしなり、女王國は今の筑後國山門郡耶摩臺の地を根據とせるものと云ふ星野博士の説に賛す、女王國の事魏志によれば頗る開けたる異族の國なり、斯る國は後迄もありしが、皆皇威に服するに至りしなり、されば兎に角、荒振神等の多き中に、天孫は降臨ありしなり、其場所は如何、高千穂に降り給へるなり、高千穂峰と稱する處二つあり、一は霧島山にして、一は西臼杵の高千穂山なり、本居先生は前説を採らるゝも之は誤りならむ、日向風土記遺文に高千穂郷に天孫が降臨せられたりとあり、こゝと相接する肥後阿蘇郡にも同名の地あり、蓋同様の傳説ありしならむ、阿蘇即ち本來の襲の國の名を傳ふるか、但肥後風土記なければ明ならず、兎も角も奈良朝の人は今の高千穂峰を之れと信じたるは事實ならむと余輩は考ふ此傳説は必ずしも空想とのみ思はれず、即ち西北より日向に出ずるには、阿蘇より入りて今高千穂に出づるが順序なり、之が神話を形造りしものと考へる、かゝる例は出雲にもあり、素戔鳴尊が天照大神の怒にふれ伊弉冊尊の根國に行き給へる神話なり古き思想は根國即ち出雲の方面なり、舊説には出雲簸の川上の船通山に御陵ありしと信じたり、尊の根の國に行くも簸川を遡る、東北に流るゝ日野川即ち伯耆の日野川の川上も同所なり、又書紀の一書には、安藝埃川の川上に於て大蛇を殺せりとあり、安藝埃川は石見の江川なり、此川の上流亦船通山にし

て三國より根の國に行くに三川を廻り、結局一所に出合ふ、而して三方面それ／＼に別の傳説を有するなり、日向の天孫は高千穂峰より出でて日向に來たりと云ふも、これと同じかるべし、沼田氏は延喜式の神が日向には少ない、是れ天孫種族なき證と言はれたれども神社の多少を以て天孫の居りしや否やを決定するは不可なり、延喜式内神社の多少は、其地方が其頃に京都の政府と深き關係ありや否やに關すと見ざるべからず、壹岐對馬に多きは其地方が朝鮮交通の衝に當り、中央政府との關係多かりし故なればなり日向古墳の調査の結果に依るも、日向に天孫種族の擴がりしことは事實にして、大隅薩摩には、天孫種族は擴まらざりしものと余輩は考ふ、大隅より薩摩に入る國境即ち國分邊には後世迄隼人が居りしものなり、神代の三陵は、延喜式には日向三陵とあり、余輩は文字の如く之を解す、余輩の一言を以てすれば薩摩の國は日向の國に入りしことなし云々。

■古墳と五輪塔 一九一三(大正二年)五月二四日(水朝刊)「三六八号」五頁

東臼杵郡南方村貝畑堂々の馬場には一つの古墳發見されたる由なるが其式は天下の柄鏡形と全式にて圓の部分高さ二十五尺柄の長さ五十間あり實に雄大なるもの、由全所は一帶の丘地にして南は五ヶ瀬川に臨み極めて形勝の地なりと又右古墳のある少し東の藪林中に幾十ともなく五輪石の轉がり居れる者あり苔を除き見るに享祿五年三月二十六日とあり今より三百八十年許り前にて足利義晴の時代なり全所には堂の馬場千屋敷御堀など云ふ所あり古老の談に此地方にては盆には戸毎に貝の畑殿に上るとて高竿に松火を焚くを慣例とせりと云へり或は當時此地方に威を揮ひたる土持氏の一族にしても居りし所か因に享祿は四年にて天文と改元せるも改元の事今日の如く早く知れ渡らざりしものと見え往々前年號を記せる者あり此の墓碕も其一例なる可し

■古墳崇敬 一九一三(大正二年)五月二四日(土)朝刊「三六七八号」五頁

増田于信氏の可愛山陵視察、鳥居龍藏氏の天下古墳の調査ありて以來東臼杵郡地方は古墳熱盛に起り至る所古墳の噂を聞かざるなき有様なるが従つて陵墓崇敬の念を高め近來可愛山陵に參詣するものに増加し南方の各古墳所在地に參拜するもの日二十餘名に及ぶ由なり

■金環古器物を盗まる 一九一三(大正二年)五月二七日(火朝刊)「三六八号」五頁

兒湯郡富田村附近の某所に兼ねて古墳より發掘し得たる金環並に考古學上尤も研究の價值ある古器物十數個を陳列保存して參考の資料となし來りたるが然るに今より十數日前何者にか之れを窃取され突然紛失せしを發見せしより大騒ぎとなりたるも目下秘密に之れが調査中なりと云へるが此發生事件に就ては頗る注目すべく或は意外の邊に面白き徑路の犯人現はるゝやも計られずと専ら噂し合へり尚ほ事件の内容にありて

は今俄かに之れを窺知するを得ず且つ捜査進行上にも關係ある事なれば單に聞くが儘を記して後の情報を待ち更らに詳報する所あるべし

■坪井博士逝去 一九一三(大正二年)五月二九日(木朝刊)「三六八号」一頁欄外

露都聖彼得斯堡滞在在中なる東京帝國大學理工科大學教授理學博士坪井正五郎氏は同地に於て危篤の處遂に逝去せりととの報ありたり

■坪井博士逝去 一九一三(大正二年)五月三〇日(金朝刊)「三六八号」一頁

露都聖彼得斯堡滞在在中なる東京帝國大學理工科大學教授理學博士坪井正五郎氏は同地に於て危篤の處遂に逝去せりととの報ありたり(以上昨紙第二版再録)

■坪井博士と狂歌 一九一三(大正二年)六月二日(月朝刊)「三六八号」三頁

露都で客死した坪井正五郎博士の逸話がある全博士が英國留學から歸朝したのは二十五年の秋だと思ふ、大學の教授になる、菊地博士(大麓男)の妹さんが嫁に來るトン／＼拍子で出世するので大に得意だったと見えてこんな狂歌をよんだ

歸朝せり教授になれり妻もてり

下戸も手にとる三組の盃口

所が間も無く虎列拉病に罹つて危篤だと云はれたのが運好く全快したので又狂歌をよんだ

古物古蹟コロボツクルは好ども

コノ字の病は是でこりこり

博士は非常に筆まめな人で旅行しても必ず友人に例の面白い端書を呉れるポンチ風の畫もかいて寄越す往年學士會月報に長く出した『牛のよだれ』と云ふ文章は中々の評判であつた又學生時代に『小梧雜誌』『小梧漫錄』といふものを餘程澤山一人で作つて友人の間に見せたものだ

■宮内省の古墳調査 一九一三(大正二年)六月三日(月朝刊)「三七〇八号」二頁

從來古墳發掘に付ては宮内省に對し是迄申告せざるものありしも宮内省に於ては諸陵調査上參考に資する必要があるを以て今後は必ず同省へ申告せしむることとなり場合に依りては帝國大學職員を出張立會はしむることに決したるを以て夫々關係官廳に通告を發したり

■神代の鋤型? 一九一三(大正二年)七月五日(土朝刊)「三七二〇号」五頁

東諸縣郡綾村大字北俣の開墾地より出でたる鐵器類は發見者の希望により徹古館に納むべき筈なるが或は神代の型鋤ならんとのことにて目下其の手續中なりと

■竹頭木屑 一九一三(大正)二年七月六日(日朝刊)「三七二号」二頁

「前略」▲古墳から出たものなどは古墳古社寺の取締で夫々處分の法がある其他のものも埋藏物で取締が付く▲獨り石器時代の遺物たる石斧石鏃石劍重石等のものは遺失物であるから取得したものは遺失物隱匿罪でやらるゝと云ふ事になつて居ると云ふ事だ▲遺失物と云へば誰れが落したのだらう千萬年前のアイヌ、コロボツクルを地下に喚起す譯にも行くまいヤ無主物は國家の財産である夫れならば先取に依つて取得權が生じはしないかと好古家連中が頻りに議論して居た

■石器時代遺跡 一九一三(大正)二年七月六日(日朝刊)「三七二号」三頁

石器時代の遺物は本縣各地到る所に分布し、採取にも辛勞少けれど、石器時代の遺跡としては頗る稀なるものにて僅に存せる貝塚(貝墓とは全く異なるもの)さへも、最早荒されて探らん由なく、跡江や城が峰の二ヶ所も畑と化して、此の邊といふことすら分らず成りしが、東諸郡郡綾村黒木熊製蓑氏は先頃開墾情況視察中、同村字北俣にて珍しき石製品の散りたるを發見したり、同氏は素人の固より何物とも明かには分らざりしも、或は考古學上參考の資となるものに非ざるべきかと案じ付き其旨態人より報じ越したれば、本社は記者を特派して實地を踏査せしめたるが、歸來の報告を概記すれば左の如し遺跡と覺しき所は、綾の町より西北へ勾配急なる山路を約二里、小字尾立といふ所なるが、丘陵數多く起伏して石製品の出づるは其の最高所に在り、眺むれば本莊高岡と眼下に青島内海をソコに見て、南は田野の鰐塚、雙石の山々に對し、東は赤江灘が青く白く見ゆ、東北は矢矧山、釋迦嶽、法華嶽、西南に霧島、白髪、大森の峰を望み、下には鑢川、鼓川を兩側に瞰るべく風光既に得易からぬ境地なるが、其の邊は茫たる一帯の原野にて、牝草、野萩の一面に茂り、幾千町歩打ち續き相開きたる所にて、區有地なれば、區民適意に開墾を爲しつゝ在るなり。

快きは其起伏せる丘陵の、高所々々に凹地ありて、其所には珠の如き涼冷の水湧き出でつ探討の客をして、渴を醫せしむ、附近に十年兵亂に於ける臺場の跡あり、賊軍の一小部隊此の所に據りて、人吉方面より來る官兵の爲めに敗走したることなど連想すべし、偕一行は記者の外に森永校長井上氏綾校長中村氏を始め職員の大分駐在所の木村平吉氏等にて人夫を隨へ、發見者黒木氏の案内にて登りたることなれば、先づ附近の見取圖を作り、高所々々の斷面圖を取り其れより陸稻生ひ立つ中を手分けて採取したるが、得る所意外に多く、其日の牯五時山を下りたり現在の地の附近には貝の化石を出すが事實にて、昔々其の昔は確に海底若くは海邊ならむと想像せらるゝものあり、採取せる石器類は普通に言ふ遺物の散布に非ずして、石器時代人民の住居跡と認めらるゝものも無きに非ず、されば同じ石器時代の遺跡といへども頗る舊き時代の遺跡ならんか、茲に疑はしきは武装の跡を見るもの無き一點にて、彼等の如き闘争

を仕事の如く心得ねばならぬ者にして、遂に矢の根石一ツ無く、利器は數多ありしに似ず武器の遂に見當らざりしは妙也、但し石器を製造したるは蔽い難き事實にして左記採取品目を見れば面白き想像のソコに湧き起るを禁ずる能はざらむ

(一)石斧 (二)石鏃 (三)石鏃 (四)石刀 (五)石貨 (六)砥石 (七)凹み石 (八)土器破片

石斧は總て磨製にして打製は一も無く其の技巧も全く粗造なるが石鏃には打製と磨製の二種を出だし殊に磨製多し「」而して此の磨製のものには極めて小さき物ありて、夏豆位の形したるものありき「」石刀は普通に見るものと異ならざるも幅廣くして石斧の形に近きを珍とすべきか、凹み石は紫を帯びたる赤石を用ゐ、ソレに全く當て箆めたる石斧もありたるが、少し高さを有する肌よし蜜柑位のものにて、上より片手で攫み、こつ／＼と何かを碎きし用のものなるべく、石貨は粘板岩を五厘銅位に磨き周圍にギザ／＼を刻し中央に孔あり、記者一個の私見なれども當時の通貨ならんと思はる、砥石は軟質のもの硬質のものあり、共に石斧その他の磨製に使ひしものと知らる、唯石鋸に至りては原代の發見として誇るべきものにて、一個は茄子の葉程あり一個は長さ一寸幅五分位にて、兩刃にきざみを有す、是は確に鋸の原始的形狀なるべし「」此の外皮はぎに用ゐ、ちよいとしたる物を切る爲めの石器無數にして、記者の採取丈にても百餘點に上り、外に石器時代土器の破片にて稚く然も頗る摸索の圖案あるものにて是のみにても彼の地の學問上大切なことを證するに足るべし。右は開墾地の表面に散布せるものにて些しも發掘せるものに非ず、且つ念の爲めに誌すべきは石器時代の遺跡といへば吾々の祖先に非ず吾々の祖先よりも先きに住みたる未開人の殘せるものにて幾萬年、少くとも幾千年の前なれば、近頃頻りに言ひ囃せる古墳とは縁故なきものと知るべし。

■神代の犁鋤 一九一三(大正)二年七月六日(日朝刊)「三七二号」五頁

東諸郡郡綾村大字北俣小字尾立より鐵器の出でたる由は昨紙報じたるが、發見の場所は確に横穴にして、記者の往觀に據れば入り口は曲線形式にて内部の天井は穹隆成の、然かも頗る入念のものなれば朱など塗りたる跡は見えず、下部は着黒なる泥土にて鍬先もて撫でたる痕あり／＼残りぬ、廣さは疊一枚を横にしたる程にて、天井より一尺位下の所に幅三寸弱の棚あり、俱士にて塗り出せるものなるが、其の棚の傾斜の按排に察するに、多分排水の爲に設けたるものならむか。此の附近一帯も亦「石器時代遺跡地」と等しく、區有の原野にて開墾は適宜勝手なれば、先頃より盛んに堀り上げたるに二ツ迄も穴に當りて、何れも横穴の作りにて、這入れば辛じて這入り得べく、内部の高さは記者の如き五尺六寸の男が蹲み得られる、計にて提灯を持たねば、何物をも分らず、神代の犁鋤ならんといふは其の一方の穴より出たるものにて、左記の六點とす

(一)犁先 (二)鋤先 (三)同 (四)直刀破片 (五)鎗の穂 (六)まが玉

右の内牽先(一)は現今の形式に似て曲線を爲し、刃先の鋭利なりしを見るべく幅廣き一寸五分柄に倚りたる邊は幅九分、木製の柄を挿し込みたるを想像せらるゝ溝の深さ二分、他の鋤先(二)は一見斧の如きも、上部に穴あり、其の中へ棒を挿込みたるものと覺しく、目釘の跡明かなり、長さ五寸、刃先の幅二寸五分、口徑縦一寸五分横一寸七分にて頗る重量を有す、他の鋤先(三)は略ぼ(一)の方と同様なるも、棒を挿込む邊より肩少しく張出で、直角を示せると、比較的平扁なるを異なるとす、刃先の幅二寸八分、長さ四寸五分、口徑縦一寸、横二寸にて相當の重量あり、「(一)此の(二)と(三)の鋤先は記者の寡聞なる未だ他に類品ありしを知らず、故坪井博士、沼田頼輔、大野雲外共著の考古學に關する著述に徴するも此の二種なく、唯石製模造のものを掲げて其れさへ頗る珍としたるが如き觀あり、されば此の二種は考古學上參考として高價なるは勿論、是を本縣内に發見したるは學問上、歴史上仕合せのことといふべし、其(一)の犁先の方は類品他に在り、赤江村字津和田の佐々木氏が發見せるものと同じ物なり。直刀に破片(四)は普通に有り觸れたるものらしく、鎗の穂(五)は稀有に屬し、まが玉(六)は小形にて長さ五分、幅二分、厚さ二分、質は翡翠玉なり、是等の品は高岡署を経て縣警察部に届くべきものなるも、一應某氏が預り研究中なりしが、昨日本人の依託に從ひ其の筋へ提出したりといふ。

■尾立の横穴 一九一三(大正二年)七月六日(月)朝刊「三七二二号」五頁

東諸縣郡綾村大字北俣小字尾立幾百町歩の一面には横穴頗る多く、頃日記者が石器時代調査の爲に實地を見たる際にすら數十を算へたれば、彼の邊一面全く穴だらけなるべし、而して古墳らしきもの一ツも無く、且つ其れ等に關する傳説としては、今七十餘歳の人に質すも何等有するもの無し古墳は土を高く圓く盛りたる古き墓の謂にて横穴は土を盛らずして、入口の横よりせらるゝ古き墓なるは今更誌す迄もなきことなるが、世間には横穴を墓とせず穴居とする向多し、殊に附近には石器時代遺跡の發見されしため、愈々先住民の居宅の如く心得居るも、實際彼の地は或る古き時代に、貴き人々を葬りしものなり、横穴と古墳の區別は時代の前後によるか、葬られたる人の身分の高下によるか、未だ學界の定説なきを以て何とも報じ難けれども、其傳説なき點などによりて考へなば、如何に其の古きかを想像するに足るべく彼の地を保全するは綾村の人々の務たるのみならず亦郡民の務なるべし。

■祭場新設 一九一三(大正二年)七月七日(月)朝刊「三七二三号」二頁

兒湯郡下穂北郡西都原は今回の古墳發掘調査以來著しく世人の注目を惹き神跡の靈地として永久保存すべきこととなりたるより縣當局に於ても敬神思想普及のため今回全地の適當なる個所に祭壇場を新設せしむべき計劃にて長友屬昨日より之が準備のため全地へ出張せり

■考古品の提出 一九一三(大正二年)七月二日(土)朝刊「三七二七号」四頁

古墳より出づべき種類の祝部其の他の土器及び玉、鏡、劍その他を勿論發見したる者は三日以内に所轄警察署へ實物を添へて届出で其の筋にては宮内省へ送るとあるが太古の遺物たる石器類をも同様の取扱を爲して是は帝國大學人類學教室へ遺ることとなり居るを以て近く綾村より採収せる石器類は未だ研究に着手さへせざるも宮崎警察部の要求にて採収者は餘儀なく石屑迄も添へて差出したりと

■寄附古墳の調査 一九一三(大正二年)七月一八日(金)朝刊「三七三三三号」二頁

兒湯郡下穂北村大字三宅西都原に於ける部落有、共有、個人持の古墳百六基先般縣へ寄附申出に付永友、村岡兩縣屬出張分筆下調査中の處去る十五日迄に大体終了し一昨日歸應したるが右筆數は山林十二筆にして分筆處分の上縣有に受入の手續爲す筈なりと

■可愛山陵と知事 一九一三(大正二年)七月一八日(月)朝刊「三七四三三号」二頁

有吉知事が去る二十二日地方官會議の歸途別府に上陸し同地より自動車にて歸縣されしは已記の通なるが此歸途に於て東白杵郡民が知事に對し最も敬服せし問題あり开は例の彦火瓊杵尊を奉安せし山陵なりとの傳説地たる同郡北川村大字長井字依野の可愛山陵視察是なりとす此視察に關せる一端に就て傳へ聞く處を記せば時恰も黄昏の頃に於て知事は自動車を下るや漫歩山陵に着し恭しく禮拜新に設けられし關門其他構造を仔細に觀つゝ更に天邊四方を仰望し可愛嶽を背景とし東面北川の清流を隔て案山等の自然完備せる狀を熟視し如何にも太古の山陵たるを失はずといふ態度何處となく崇敬追懷を拂はるゝ一舉手一投足殆んど其喜色掬すべきものあり尚齋藤警察部長又は齋藤郡長其他隨行の警官等に向ひ打語らるゝ處に依るも亦以て可愛山陵の將來が或時機に於て光輝を發するや疑ふべからずとなり村民が嚆々するの情三嘆の價ありしといふ因に知事が可愛山陵視察に就ては村民數百名路傍に整列し多大なる誠意を表したりし由

■竹頭木屑 一九一三(大正二年)八月九日(土)朝刊「三七五四号」二頁

古蹟調査の時に關氏の行へる『太古の服裝』と題せる講演は深き印象を本縣に残したのであつたが當時の服裝を存じて太古を偲ばしむるは報本反始の上から云ふて喜ばしい事であると云ふので有吉知事から宮崎神宮の行列に加ふる事にしたらばドウであらうと高木男に話さるゝと敬神の厚き男は大賛成で直ちに關氏に圖案調製の事を托された▲關氏は此依託を喜び古書古事を涉獵して可成正確なるものを作らんとて苦心の結果愈々圖案が出来たる事となつた▲圖案は出来たけれど之を調製するに調製其人を得

ざる可からざると多くの日子を要するので本年の例祭までには到底間に合ふまいと云ふ事である▲關氏當時の講演から考へて太古其儘の服裝をした一隊の行列が神幸に付く事になると之れ實に全國無類で好古教育家の爲めに大なる參考となる有益なる資材であらうと云ふ事だ▲右行列は男女は勿論平裝武裝種々の服裝に分ちて當時の實際を傳ふるのだから眞に珍しい計畫である時代裝など稱して人形などの陳列は之れまで屢々あつたが由緒ある宮崎神宮の神幸に生きた標本の列るのであるから之れが出来たら宮崎祭の太古行列として名高くなるであらう。

■石器時代の縫針：東臼杵で初ての發見：一九二二(大正)二年八月二日(火)朝刊「三七五七号」五頁

延岡の考古家三浦敏氏は東臼杵郡恒富村沖田の貝塚より石器時代に用ゐたる物縫針を撰拾して珍藏せるが其針の材料は魚齒又は獸齒の類なるべく至つて粗末なる細工にて寸餘のものにと足らざるもの七個あり尖端最も鋭く末端に小孔あり之れ糸を挿入する處なり此物縫針は他所にては往々發見せしも東臼杵郡内にては全氏の發見が初めてなりと針の外全所にて發見せし木炭屑と木灰少量を有せるが是は火食せし證左とするに足るものなりと猶ほ全氏の談に依れば同じく石器時代の遺物にても沖田、大貫、高野の三貝塚より出しものは各其色彩と格好を異にし外部の模様にも多少の相違點あるは時代に新古の別あるを見るに足るべし云々(延支)

■知事の歸來談 一九二二(大正)二年八月二四日(日)朝刊「三七六九号」二頁

▲立派な古墳 十六日鶴戸に着いて後宮の浦地方を視察し玉依姫の御陵と稱へて居る御陵墓參考地に參拜したが御陵は實に立派なものである其翌日は速日の山陵に參拜して鶴戸を立ち油津に行く途中蘇津塚と云ふ古墳を見た是は堀り崩して殆んど原形を存しない夫れから東郷村風田の森中に在る俗に狐塚と稱する古墳をも見たが兎に角全地方には名勝古蹟が少くない殊に本縣の古蹟は他府縣のものとは大に▲其趣を異にして居る即ち其多くが建國の歴史を説明するものであるから歴史家とか考古學者とか云へる人人は特に本縣の實地を研究する必要があると思ふ單に乞食だとか書記だとかかの記録に依つたり或は大和河内地方の古蹟を見たのみで斷定を下す杯と云ふ事は▲非常に間違つた事であらう泰西の歴史を研究するのにも埃及だとかアッシリヤだとか印度だとか最も建國の古い地方に就て實地の研究をするのに自己の本國たる日本の歴史を研究するに最も古き歴史を有する日向に來て研究せぬと云ふのは學者の本分を盡さぬものと云はねばならぬ併し是れは唯だ學者のみが悪いのでもない▲政府も間違つて居る元來建國の歴史を調べると云ふ事は縣の事業杯で狐鼠々々遣つた處で何程の事が出来やうか宜しく國家事業として斯道のオーソリチーでも派遣して十分に研究調査せしめねばならぬ事と思ふ然る上で古墳古蹟の保存保護と云ふ事は縣に遣らせべきもので

あらう▲「後略」

■風田の古陵 一九二二(大正)二年九月四日(木)朝刊「三七七九号」五頁

過般有吉知事南那珂郡へ出張の際視察せられたる東郷村大字風田古陵に付き北郷村大字大藤稻澤棟氏熱心調査に従事中なるが全古陵に付き聞き得たる所に依れば明治五年飢肥藩士故高妻佐右衛門倉永仙次郎の兩名全古陵の一部を宅地に開墾し建築せしに毎夜深更に至り笛太鼓の音響き若くは怪火出で或は家畜斃死し家人病に罹る等凶事絶間なきを以て或は古陵の咎めにはあらざるかとの念を起し兩家とも他に移轉するに至れり稻澤棟氏怪事を聞き陵墓の發掘を思立ち明治八年二月官許を得發掘に着手し深き三四尺に達するとき大なる石蓋あるを以て之を取除きたるに裏に種々の古器物あるを以て之れを収拾せんとするに際し天候俄に荒れ始め暴雨迅雷となりしを以て豪氣の稻澤氏も之れを躊躇し發掘を中止するに至れり當時發掘せし重なるものは區役所に提出せしが今全氏の手許に保存せるは六角管玉一切子玉二土器破片五等なり全品は最古色土色のものあり六角玉は水晶にして小玉は白色綠色のものなり全古陵には尚夥多の古器物ありし由なるも數度の怪事ありしを以て其後手付くものなく今日に至れるものなりと全古陵を狐塚と稱するは古より全林中に入るものは所在を失する等の怪事ありしを以て之れを狐狸の所爲なりと疑ひ狐塚と稱するに至れりと

■日南海濱の古墳 紫洞生 一九二二(大正)二年九月九日(火)朝刊「三七八四号」一頁

飢油間輕鐵開通式に行くとして態と道を海岸の難道に取る、暑き日の八月十七日なり、伊比井を出で、險坂崎嶇十數町、全身しどろ熱汗を浴びて宮浦に下る、玉依姫の御社に賽して南下、更に西方稻の細道をわくる八町餘にして姫の御陵と稱する古墳を拜す、雜樹榛々頂上に松の數株青く立てり、遠く見れば渾然たる古林のみ、近づけば岡の裾田圃の中に崛起せる圓墳あり、南方に深溝あり深き六尺餘、蓋し當時の濠を利用して水路に穿てるものなるべし、西南に亘りて長き柄ありと思へど尚ほ岡の岨にやあらむ定かならず、蜘蛛の垣竹のしがらみ搔きわけて登る、高さ僅に三間、周圍は圓部六間もあるべし「」絶えて久しく人跡の外に在り蒼涼幽古森然として靈氣襟を刺すを覺ゆ、あはれ御陵よ、幾千歳を宮之浦回の浪の響きと松の風とに埋れて知られぬ世々を過ごしましけむ、鶴戸參詣の滋き行き來も此處にはよぎる人の影だに無し、文化年中土民渡邊金五郎馬に麥負はせて頂上に登りしが馬も人も聽て神罰に斃れし以來絶えて又侵す者なきは流石に難有く、辛くも發掘の禍を免れたるぞ尊しや、希くば保存其法を宜しくし、樹木の手入れ鳥居の建設道路の修理を加ふるに至らば久しくも隠れたる史蹟の世に遍ねく顯はれて神威の尊さ更に一層の赫奕を加へん

速日の峰の御陵は何となく定かならず鶴戸油津街道風田と言ふ所に蘇津の山□と□
 □あり、道路の上を丘に上れ□□て達せん更に又油津より□□に狐塚と
 呼ぶ古墳あり、街□□方なり、四面は悉く畑なり□□たりと言へど
 今は名残□□にも堀りかへされて□□ず、東方に向て柄あ

□□□□の當時如何にかした□□□□の高さ一間には満□□
 □□□□姫の□□□□□□□□□□三尺位窪みてあり、此處よ
 り例の玉石土器等出でたりと傳ふ、傍に一枚の大石あり石棺の蓋あり、此外認む可き
 何物もなし、打見れば宛然として箱庭の築山泉水なり、繞らすに竹の小垣を以てし標
 札を建て、發掘の由來めかしきものを掲げたり、墳側に立て拜仰拜俯潜然として涙下
 るを覺えざりき、嗚呼如何なれば畏くも恐多くも斯かる無慘の行動を敢てしけむ、如
 何なれば斯かる非學術的の行爲を敢てしたりけむ、凡そ調査にはそれ〴〵の學術的
 順序方法あり、陵形も高低も面積も方向も何等測量觀査の豫行を執る事なく、漫然と
 して高貴の墳陵に未型を加へ、土を堀り石を覆し、其埋藏物を得れば則ち足れりとな
 し、何等復舊の工事に出づる事なく、之を風雨に暴露し霜雪の積むに委し禽獸の狎臥
 に任じて顧みざる茲に四十年、噫何の辭か以て在天の神靈に謝せむ、其迅雷暴風の至
 る又以て然る可き處、里人たる者亦何を以て其罪を避けむや、近傍に神武帝の駒繫ぎ
 の松、駒の足形石の存じて古來尊き靈蹟なりと誇りながら此古陵のみは發掘崩壞して
 顧みず果して何の意ぞや、佇立多時感極つて突然爲す所を知らざりき、事既に追ふ可
 からず、風田青年會員たる者希くば保存の方法を講じ速に神意を慰むるに勉めん事を
 油津の古墳は伊東氏砲臺築造に際して發掘し其埋藏品は一幅の繪となりて吾平津神社
 に存するの外更に現品の見る可きなき事既に述べたり、要するに日南の史蹟は之を專
 問學者の研究調査に待つも尚多からんとす、而して其最有力なる資料たる古墳の現
 狀實に斯の如し、長大息に堪へざるなり、願くば村民たる者保存上に對しては深厚の
 用意と謹嚴なる態度とに出で、一般教育上修養上の材料に資し一面學界に貢獻すると
 同時に古國日向顯彰の一法たる可きを忘れず、施設萬端深く意を茲に用ひん事を、蓋
 し亦地方發展の一策たるなからんか。

■古代史講演集發刊 一九一三(大正二年)九月二日(日)朝刊「三七九六号」二頁
 昨年古墳調査の砌來縣したる諸學者の講演筆記は此儘筐底に保存するも惜きものなる
 により教育會にて印刷に附し實費を以て希望者に頒布する事となる筈なるが各種發掘
 物等の寫眞版を挿入し一千部印刷する事とし一部五六十錢にて配布し得可き豫算なり
 と云ふ發行の上は希望者多かる可し

■古墳の徵證なし 一九一三(大正二年)九月二日(日)朝刊「三八〇三号」三頁
 東臼杵郡北方村曾木百二十九番地山林内に於て發見せる古墳は其後發掘し宮内省に稟
 請せし處同省にては爾來審査の結果古墳たるの徵證を認めざる由同省より本縣廳を経
 て延岡警察署へ移牒し來れりと

■古墳陵墓視察 一九一三(大正二年)一月一日(日)朝刊「三八二二号」一頁
 宮内省屬大澤小源太氏は當地より豫定の順路を経て去十五日延岡に到り翌十六日午後
 時より陸路東臼杵郡北方村古陵墓傳説地の視察を遂げられたる後即日佐伯に赴かれた
 り

■古墳と埋藏物 一九一三(大正二年)一月二七日(日)朝刊「三八三〇号」一頁
 古墳古蹟發掘に就ては曩に縣公文を以て訓告する處ありしが今現行法令に指示せる御
 陵墓及び古墳に關する法規は左の如し

▲明治七年五月二日太政官達第五十九號
 古墳と見ゆる地は猥りに發掘を禁ず

上世以來御陵墓の所在未定の分即今取調中に付各管内荒蕪地開墾の節口碑流傳の場
 所は勿論其他古墳と相見へ候地は猥りに發掘爲致間敷候若し差向開墾の地に有之分
 は繪圖相副教部省へ可伺出此旨相達候事

▲明治十三年十一月十五日宮内省達乙第三號

御陵墓所在未定の分取調に付人民私有地内古墳等發見の節は詳細申出方
 上世以來御陵墓所在未定の分即今取調中に付き云々の件去る七年五月第五十九號を
 以て公達の趣有之就ては古墳と相見へ候地は人民私有地たりとも猥りに發掘不致害
 に候へ共自然風雨等の爲めに石槨工器等露出し又は開墾中不圖古墳に掘り當り候様
 の次第有之候はゞ口碑流傳の有無に不拘凡て詳細なる繪圖面を製し其他名并に近傍
 の字等をも取調へ當省へ可申出此旨相達候事

▲明治三十四年正月三日内務省總務局地理課長及警保局長の通牒内甲第一七號

古墳又は古墳と認むべき箇所を發掘せんとするものあるときは其土地の官民有地に
 拘はらず豫め詳細の圖面を添へ宮内省へ打合せ可相成右は明治七年太政官達第五十
 九號明治十三年宮内省達乙第三號の趣も有之候に付依命爲念及通牒候也
 又十二年十月内務大臣訓令を準用せり左の如し

▲遺失物法第十三條(明治三十二年法律)

埋藏物に關しては第十條を除くの外本法の規定を準用す
 學術技藝若しくは考古の資料に供すべき埋藏物にして其所有者知れざる時は其所
 有權は國庫に歸屬す此場合に於ては國庫は埋藏物の發見者及埋藏物を發見したる
 土地の所有者に通告し其價格に相當する金額を給すべし
 埋藏物の發見者と埋藏物を發見したる土地の所有者と異なる時は前項の金額は折

中して之を給すべし本條の金額は不服あるものは第二項の通知の日より六ヶ月内に民事訴訟を提起することを得

▲明治三十二年十月廿六日内務大臣訓令

遺失物法第十三條に依り學術技藝若くは考古資料となるべき埋藏物を發見したる時は其品圖及形狀發掘の年月日場所及び口碑等徵證となすべき事項を詳記し模寫圖を添へ左の區別に従ひ之を通知すべし

- 一、古墳關係品其他學術技藝若くは考古の資圖となるべきものは 宮内省
- 一、石器時代遺物は 東京帝國大學

一九一四（大正三）年

■土器發掘 一九一四（大正三）年一月二三日（火）朝刊「三九〇二號」五頁

宮崎郡廣瀬村大字下田島小字天神「中略」土居多三郎は去四日全村小字鈴八三六八番山田島共有山林に祀れる氏神社の岩穴を掃除せしに碗皿壺様の土器十三個を發掘届出たるが全所は古墳等の傳説なき處なるも道路より約三町を距る高さ二丁位の禿山にして東は田地西北山林にして南端には水溜を控へ北端は高さ五間位の個所に深さ四間横二間高さ一間位の岩穴あるは多分穴居の跡なるべしと

■竹頭木屑 一九一四（大正三）年一月二〇日（火）朝刊「三九〇九號」二頁

「前略」▲本年御即位式の記念事業として計畫された好古學教室建設の事は大分拂りて場所の檢分とまでなつて大体に於て妻町に置くと云ふ説であるが昔皇居の跡であつた神宮の裏の下北が適當であると云ふ説もある様だ▲場所は何處でも目的の貫徹が必要であらう「後略」

■横穴より長刀二口 一九一四（大正三）年一月二三日（金）朝刊「三九三〇號」五頁

去月十四日西臼杵郡田原村大字田原「中略」田上角四郎「中略」は全村大字田原字染野平と稱する全村安在覺の所有に係る秣場にて里道更正工事中雜草に埋れ居たる二箇所の横穴に堀當て全坑中より長刀二口（長さ三尺五寸のもの一口と三尺二寸のもの一口）と外鏃の腐蝕したるもの十本を發見し高千穂警察署に届出でたるが全横穴のありし附近は古來土城ありし處なりと言傳へ居れりと云ふ

■下穂北村會 一九一四（大正三）年二月二五日（水）朝刊「三九四四號」二頁

兒湯郡下穂北村に於ては去る十六日村會開會以來二十一日の如きは日曜なるに拘らず引續き開會中の由聞く處に依れば大正元年の決算に多少の錯誤ある爲め進行捗々しからず爲めに一部議員は吏員改造説を唱へ折衝せんと目下交渉中の由尚ほ會議中其筋よ

りの諮問案として上穂北村杉安より下穂北停車場迄運河開鑿の件は滿場一致を以て決議し又京都大學研究所を下穂北村に設置するに付其敷地として妻滿神社の南の土地を村にて買求め寄附する件は亦滿場異議なく可決したり又御陵墓參考地道路起工の件村營屠殺場の件等其他數件に付諮問又は協議あるやに聞く

■記念古蹟研究室 一九一四（大正三）年三月一七日（火）朝刊「三九六四號」二頁

昨年の縣會に於て建議となれる御即位式記念古蹟研究室の建設場所は兒湯郡下穂北村都萬神社の横手と決定し其附近に縣立養魚地を設置する計畫ある由なり研究室の内部は陳列室、教室、教授室、學生宿泊室等に分れ此外に賄室ありて教授學生の滞在研究に便利なる設備を爲しある由なり最初は帝國大學の研究室たらしむる考案なりしが斯くては種々の支障を生ずる恐れありしに依り全然縣の研究室となし之れを帝國大學の專用に供する事とし若し大學の差支なき場合に於ては他の學校若しくは公共の用途に使用する規定と爲す筈にて目下大學と交渉中なりと云ふ三重の皇學館の如きも使用申込を爲し來れる由なり

■史蹟研究室建造 一九一四（大正三）年五月三日（日）朝刊「四〇〇九號」二頁

御即位記念事業として縣立圖書館の改築並に史蹟研究室新築の事は昨年の通常縣會に於て決議する所あり爾後土木課西山技手の手にて製圖設計を調製中なりしが端なくも皇太后陛下崩御あらせられ御即位式は延期あらせらるゝに至りたるを以て記念事業も自然延期の已むなきに至りたるが西都原史蹟研究室のみは紀念と云ふ名目を離れ愈よ本年度に於て建造を執行する事となり去月末製圖設計を終り目下入札廣告中に於て来る五日土木課に於て競争入札に付する事となり建物には本館木造平家建長八間幅三間建坪二十四坪一棟、折曲の分長十間幅三間八合三勺建坪三十八坪三合三勺及玄關二坪、便所一坪八合七勺五才、總坪數六十六坪二合五才なり

■史蹟研究室工事 一九一四（大正三）年五月一五日（金）朝刊「四〇二二號」二頁

兒湯郡下穂北村大字妻字上妻に新設の縣營西都原史蹟研究室は昨日兒湯郡川南村「中略」が工事請負の事となり契約を締結したるが右の建物は總建坪六十二坪三合三勺請負金額二千九百四十三圓にして明十六日より工事に着手し来る八月廿三日迄に竣工の筈なり尚ほ全所に建設の水産試驗場養魚場建物は建坪十九坪四合（内廊下一間を含む）にして金額六百四十七圓を以て前記「中略」を請負ひたりと

■古物發掘 一九一四（大正三）年五月一七日（日）朝刊「四〇二三號」五頁

東諸縣郡本莊村大字本莊島原治三郎は全村字北上ノ原「中略」に家屋建築の目的を以

て工事中二箇所の洞穴を発見し珠四十四個壺三個碗二個皿一個を発掘したるが全所は全村に於ける四十八塚の一に數へられ居る劍の塚（稻荷神社）の西方約三十間位に當れりと

■研究室工事 一九一四(大正三年)五月二六日火朝刊「四〇三三號」二頁

史蹟研究室は既報の如く妻満神社の南芳賀社司舊宅地を開墾し家屋建築する事となり目下地均りし工事中にて昨日は妻村青年會員總出にて工事をなし居れり因みに同敷地にて縣營鐵道開通式を舉行する由

■縣營鐵道妻線全通記念號 沿道の名勝舊蹟案内 一九一四(大正三年)六月一日(月)朝刊「四〇三八號」六、七頁

西都原の古墳(妻驛西北十二町)

妻の西半里、一帯の高臺あり、西都原といふ、妻島内の二市街並に穗北一圓を脚下に眺めて東方直に茶臼原新田原の高原と相望む、米良の攢峰西に峙ちて翠光滴るが如く、尾鈴の連山北を擁して紫氣動かんと欲し、南は田園を隔て、都於郡高屋の丘陵と相對す、觀望壯濶景趣頗る雄麗なり、臺の東部及び北部に亘りて大小の古墳凡六百あり累として相接す、中央部の二大陵は傳へて天孫及木花咲耶媛命の御陵墓と稱し、現に宮内省の御陵墓傳説參考地たり、曩に本縣は此本邦有數なる大墳陵地の保存が國民教育上、古國の顯彰上、將た又學界研究の有力なる資料として最重要なる關係を有するを信じ大正元年十二月及同二年四月、帝大並に宮内省帝室博物館等の専門學者に囑して、之れが發掘調査をなさしめ、丁重なる復舊工事と崇嚴なる調査申告祭並に復舊奉告祭を擧げて敬肅の至誠を表し更に古墳保存に關する訓令を發して一般に公示する所ありき、而して其調査の結果は今尚研究中に在り未だ發表を見るに至らず

今重なる墳陵二三を左に掲ぐ

男狹穗塚
通稱金比羅原に在る嚴然たる一大山陵なり可愛塚又は男狹穗塚と呼び、傳へて天孫の御陵なりと言ひ、宮内省の參考地たり、陵は鏡形にして南面し、全長百廿六間餘、後圓の高さ十間三尺、周圍三百廿間、環らずに二重の隄を以てす、内隄幅九間四尺餘、外隄幅十間三尺、隄壁高さ一間四尺厚さ十一間、外圍實に四百八間あり、陵上松樹亭々半天に聳え、神韻幽婉轉た大初の響きあり

女狹穗塚

隄を隔て、直に西方に在り、傳へて木花咲耶媛の御陵墓なりとす、陵形は前方後圓にして前者に比し較々小なれども、尚ほ後圓部の高さ九間四尺直徑九十間、周圍實に二百九十間あり前方部亦これにかなふ、以上二陵特に繞らずに松樹を以てす、遠く望めば鬱然たる森林なり、近いて仰げば彪然たる一大墳陵なり、觀る者悉く其規模の雄大

壯偉なるに驚かざるなし

陵の東方一町にして競馬場あり、開催當日は頗る殷盛を極む

姫塚

男狹穗塚の南方凡五町にあり、姫塚と呼ぶ前方後圓制にして南面せり、前方高さ一丈六尺五寸、後圓高さ一丈九尺五寸、全長廿八間、隄幅凡三間半、外圍百間あり、大正元年十二月發掘調査し、曲玉、管玉、切子玉、琉璃玉、刀、提瓶、蓋物、土器等の埋藏品を発見す、同二年一月復舊工事を施し、發掘物は調査の上徴古館に藏めたり

鬼の窟屋

姫塚の北二丁の地にあり、圓塚にして濠を有す、濠の幅凡三間半、堤高二間、一見宛に似たり、塚の南方の一部穿開して空洞を露はす、石槨なり、入口巾四間高一間、奥行凡三間半、天井左右悉く疊むに大石を以てし堅牢精巧なり、洞口露出してより既に四百年を経と傳ふ、呼んで鬼の窟と言ひ當時賽詣するもの多かりきといふ(以下第七面に續く)

第百十號塚

女狹穗塚と濠を隔て、其西に在り、高二尺敷巾廿六間、繞らずに濠を以てす、無樹の大圓墳なり、大正元年十二月發掘調査の結果、塚を繞りて上下二段に埴輪圓筒約二尺を隔て、羅布せるを発見し、更に頂上より一丈二尺の地點に於て約九尺の間、齒牙骨片、鏡、釧、刀、鏃等を得、齒牙骨片は之を壺に納めて舊位に瘞めたり

第廿一號塚

西都原の東部、高臺の崖上にある前方後圓の大墳にして妻町及其附近一帯の林容水影悉く其脚下に横はり、風光頗る豁達明秀なり、前方部に赤松一本あり、仍て別に名けて一本松塚と言ふ、前者と同じく調査を遂げ、後圓部地下九尺にして棺形をなせる長さ二丈の粘土を発見し更に其内部より鏡及刀數本並に朱を得たり、前方部亦粘土棺及刀劍鐵鏃の埋藏あり、『くびれ』には圓形の皮石を敷けるを見る、同二年一月復舊工事を施したり

第3號塚

一本松塚と道を隔て、南方に在る柄鏡形の大墳なり、高廿六尺敷巾百廿尺、全長二百卅間あり、又高臺の崖上に幅在し、遠くより望む事を得べし、頂上より三尺にして古錢一枚及經筒一個を発見し、更に地下六尺にして東南より西北に亘り長さ二丈餘の土棺を堀出す、棺外の東北部に古鏡一面、棺内より刀劍數本、曲玉二個、管玉二十餘を得たり

此時調査を了したるもの六、作業の前後に祭典を擧げ、復舊工事をなす事前に同じ

■竹頭木屑 一九一四(大正三年)六月九日(火)朝刊「四〇四六號」二頁

「前略」▲妻の史蹟研究室には京大の内藤湖南博士が調査に來たいと云ふて居るそう

だ博士は有名な満韓學者であるが日向の史蹟には古代の満韓史と關係あるものがあるに相違ないと云ふ意見ださうだ▲有古知事が神門神社日置神社及び秋月子爵の祖先の事など語られた所が大に參考となる可き事が發見さるゝも知れぬと勢ひ込んで居らるゝと云ふ事だ。

■沖田の貝塚 一九一四(大正三年)六月一日(木)朝刊「四〇四八号」二頁

同字には縣下有數の貝塚あり昨年來考古家の此處に遊ぶ者多數なりしが中に人骨、怪獸の牙、縫針等も拾得考古學上稀に見る處なるを以て之が保存に就ては三浦敏□□目下苦心しつゝありといふ

■門川の横穴 一九一四(大正三年)六月一日(木)朝刊「四〇四八号」二頁

同村假屋迫附近一帶の丘畔には古墳と見るべき横穴無數あり人家近きは納屋代に使用せるさへあり是亦何とか適宜の保存方法ありてこそ然るべしと批難する者あり

■史蹟研究所 一九一四(大正三年)六月二日(金)朝刊「四〇四九号」二頁

目下建築中の兒湯郡下穗北村妻に於る西都原史蹟研究所は來月中竣工の豫定なるが右研究所は昨日公布の本縣々令第二十七號全所規則に依り別に協定書を取替はし東京及び京都兩大學の專用に充つるものなるも全大學が使用せざる場合は教育慈善其他公益の爲めにする時は知事の許可を得て之を使用する事を得尚は大學に於て使用する場合と雖も學校其他學術研究を目的とする團體にして學術研究の爲め之を使用せんとする時は知事は大學の承認を得て之を許可する由にて全所に陳列の參考品は之を公衆の觀覽に供するを得る事としたるが全研究所竣工の後は學生其他の研究上頗る利便を得るに至るべし

■妻町の昨今 一九一四(大正三年)八月二日(土)朝刊「四〇五〇号」五頁

▲西都の原拜觀 汽車の開通に伴ひ西都の原御陵墓參考地其他の古墳を拜觀する者多く當地より杖を曳く者少からず爲めに飲食店等は可なり繁昌しつゝあり

■研究室の竣工期 一九一四(大正三年)七月二日(水)朝刊「四〇九六号」二頁

妻町に目下建設中の史蹟研究室は工事大に進み來月十五日頃竣工すべしと

■畑中より人骨 土器の中から發見 一九一四(大正三年)八月一日(土)朝刊「四〇九八号」五頁

本郡佐土原町大字上田嶋高橋力藏は此程同村字佐野原「中略」の畑を耕し居りしに地下二尺位の處にて二尺六寸五分廻り蓋の密閉しある土器壺を發見したるが蓋は高さ一

尺一寸ありしが之を徹し見るには人骨の黒焼とも覺しきもの約二升五合ありて直に届出たる結果目下研究中なり同所は佐野原古墳の參考地にして元本縣史編纂委員中村文學士前後四回調査せし事ありしが目下三戸□住民は明治八年頃八戸都於郡村佐野原より轉住したるものなりと云ふ

■史蹟研究室 一九一四(大正三年)八月六日(木)朝刊「四一〇三号」二頁

下穗北村妻町都萬神社境内池畔の丘上に目下建設工事中の史蹟研究室は已に九分通を竣工し目下内部の造作中にて縣廳よりは中間土木工手出張監督に任じつゝあるが位置は都萬神社南方にありて土地高燥萬頃の稻田を隔て遙に連岳の青嶺を望み後は神苑の茂林に連り江南竹右に隣て點在し翠影地に參はるの邊り本縣水産試驗場の養魚池に臨み西都原を距ること左まで遠からざる等史蹟研究所としては得難きの好適地なるが同所は素元祓時代に於ける寺院の跡らしく今に處々碑石の散在せるものあり蒼々たる江南竹林なりしを新に開拓せるものなりと云へるが研究室は附屬建築共六十六坪餘にして入口の玄關二坪の左右に二十四坪の古器物陳列室並に研究室ありて三十八坪餘の合宿所四十疊敷は研究室の後に連續して長屋造りに建築され總て平家建なるが内部は一切ペンキ塗を避け白木板を以て張詰たる等他の建築物に比すれば手數と時日を要したるもの少からず總工費約二千九百餘圓を要する見込なりと

■史蹟研究所竣工 一九一四(大正三年)八月一日(金)朝刊「四一一号」五頁

兒湯郡下穗北村都萬神社隣接地に建設中の本縣史蹟研究所は工事大に進歩し愈々明日迄に竣工する由なるが右落成式は有古知事歸縣(廿五六日)後舉行の豫定なるも京都大學研究生は兩三日中に到着研究調査に従事すべく既に同大學生一名は去る九日同地に來り兒玉旅館に滞在附近の地理研究申なるが曩に同地方古墳調査の爲め來縣せる今西龍氏は先發として一兩日中來縣すべく其他京大、東大の教授連數氏は二十日頃來縣の筈なるやに聞けり

■歴史地理講演會 一九一四(大正三年)八月二日(土)朝刊「四一二号」二頁

兒湯郡妻町に於ける史蹟研究所の開所式舉行に就き來縣の事に決定せる京大教授小川博士今西學士外二名に請ひ日州教育會に於て二十九三十日の兩日高女講堂にて歴史地理に關する講演會を開く事に決したるが二十九日は巴奈馬運河に關する幻燈の説明あり翌三十日小川博士の巴爾幹の歴史地理に就き講演する筈也

■史蹟研究所落成式 一九一四(大正三年)八月二日(金)朝刊「四一一八号」五頁

本縣史蹟研究所は一昨日迄に全部の工事完了したるを以て今日中竣工検査の上受渡の手續を爲す筈にて來る廿五六日頃廳下官民有志並に穗北地方の有志者百數十名を招

待し盛大なる落成式を舉行する由なるが帝大よりの來賓中今西學士は今明中、小川博士其他は有吉知事と同行廿三四日頃來縣の筈なりと

■今西學士着宮 一九一四(大正三年)八月三日(日)朝刊「四二〇号」五頁

一昨日細島着港の同氏は同日午前十時同所發高鍋一泊昨日午後一時十一分着の汽車にて來宮神田橋旅館に投じたるが氏は曩に調査したる西都原古蹟の調査書編纂に付一兩日滯宮後發の小川博士一行を待受史蹟研究所落成式に臨場の筈なりと

■開所式と古陵祭 一九一四(大正三年)八月二五日(火)朝刊「四二二二号」五頁

屢々報道する所ありたる本縣史蹟研究所開所式は知事歸廳の都合に依り期日確定せざりしが知事は本日歸廳の豫定なるを以て右開所式は愈來る廿八日を以て舉行の事に決し當地方よりの參列者は午前六時四十五分宮崎驛發の列車にて同地に赴き先づ西都原女狹穗塚前に設けたる祭場に於て午前九時より古陵祭を執行し列席者一同は夫れより新築落成の古蹟研究所に赴き正午より開所式を舉行し終つて午後一時より都萬神社境内に於て(雨天の際は小學校)祝宴會を催し午後三時三十分妻驛發の列車にて歸途に就く事に内定し居れりと

■史蹟講演會 一九一四(大正三年)八月二五日(火)朝刊「四二二二号」五頁

日州教育會に於て來る廿九(土曜)三十(日曜)の兩日縣立高等女學校に於て小川博士今西學士一行を招待し史蹟講演會開催の事は既報の如くなるが今西學士は大學生一名を伴ひ去る廿二日より史蹟研究所に入り先着の京大生と共に同所に滯在中なるが同氏は朝鮮總督府より調査の囑託を受け居り是非共來月十日迄に同地に到着すべき事となり居れるも其前調査上の都合に依り遅くも來月一日には本縣出發の豫定なりと云へるが後發の小川博士は多分明日頃來着さるべく一行には京大教授内田博士及び大島氏も同行さるるやに聞けり

■竹頭木屑 一九一四(大正三年)八月二六日(水)朝刊「四二三三号」二頁

〔前略〕▲史蹟研究所は大當りで學者間に噂されて居る來年からは學者學生等が續々やつて來るだらうと云ふ事だ▲明後年には鐵道も全通するので益々繁昌するに違ひない幸なのは妻町地方で之れに依りてドノ位學術上の利益を得るか知れない。

■開所式繰上げ 一九一四(大正三年)八月二六日(水)朝刊「四二三三号」五頁

廿八日舉行の筈なりし史蹟研究所開所式並に古陵祭は知事上京の都合に依り明廿七日に繰上の事となり右準備の爲め日吉縣屬は昨日より妻へ出張したり

■本日の開所式 一九一四(大正三年)八月二七日(木)朝刊「四二四号」二頁

兒湯郡下穗北村に建設の本縣史蹟研究所開所式は愈本日を以て舉行の筈なるが宮崎地方よりは知事始來賓一同午前六時四十五分宮崎驛發同七時五十五分妻驛着同郡各地よりの來會者と共に直に西都の原に赴く女狹穗塚前なる祭場に幔幕を張り廻らし田中宮崎宮々司祭主となり外神職四名にて午前八時半嚴肅なる古墳祭を執行する由にて伶人は宮崎より招聘する事になり居れり右終つて一同史蹟研究所に參集同時三十分型の如く開所式を舉行し餅撒き等を行ひ同十二時より都萬神社境内に設けの席に於て祝宴會を催す順序にて來會者約百餘名の豫想なるが研究所の敷地は二反歩餘にして建物總坪數(小使室を合し)八十五坪の内玄関、陳列室、研究室、學生室、教員室等に區劃しあり本日の設備としては三種の神器に擬したるものの上部に祝の字を顯はしたる扁額を玄關に掲げ家屋の周圍には萬國旗を點綴して裝飾を爲す等昨日來頗る多忙を極め居れり尚ほ祝宴會には妻町藝妓二十名酒間を斡旋する由

■竹頭木屑 一九一四(大正三年)八月二九日(土)朝刊「四二六号」二頁

妻町の史蹟研究所は立派に出來た本館が二室寄宿舎が四室で外に風呂場炊事場係員の詰所が一棟ある▲寄宿舎の方は十疊四室で柵作りの立派な建物である之れを東西兩大學に提供して教授學生の研究に任せしむるのである▲今西氏の話に英獨の大學には既に右の様な研究所が設けられて學者が任じて研究に従事して居る▲我國にも農科醫科には試験場研究所があるけれど文科には是等の設備がない然るに研究の史蹟に富んで居る宮崎縣に之れが設置を見たのは我々の渴望を充たしたものだ▲豫て此研究所の事に熱心であつて目下滯歐中の坂口博士から倫敦に來て今更の様に英國が自國の史蹟の顯彰に熱心なのを深く感じた早く歸つて宮崎縣の研究所に行つて見たいと云ふて寄越したと云ふ事だ▲有吉知事が開所式に陳べた様に史蹟の顯彰は國の發達進歩と正比例する三千年も同一民族が同一國に繁榮して居ると云ふ世界唯一の事例に對しても當然國家の經營す可き事業であらう▲夫れを本縣に設置して學者の研究に任ずと云ふ事は祖國日向を顯彰する上に實に好個の計畫であつたのである▲場所は西都原の下都滿神社の横手高臺で通風よく眺望よく何とも云へない今西氏及び隨行の學生は大喜びである。

■小川博士 一九一四(大正三年)八月二九日(土)朝刊「四二六号」五頁

一昨夜着宮の筈なりし小川理學博士□□□國障ありて當日は田野に一泊し昨日午前八時着宮神田橋に投じ訪問の有吉知事稻葉内務部長と共に縣廳に出張し知事室に於て會談し同十一時新坂屬の案内にて宮崎神宮に參拜したり

■今明の講演會 一九一四(大正三年)八月二九日(土)朝刊「四二六号」五頁

今明兩日縣立高等女學校に於て小川博士一行の歴史講演會開催の事は既報の如くなる

が本日は午後七時より開會幻燈を應用し小川博士は『朝鮮の石佛と九州石佛との比較に就て』今西學士は『朝鮮の歴史と遺物に就て』講演し明日は午前九時より開會小川博士の『歐洲の戦局に就て』内田文學士の『巴奈馬運河に就て』得意の講演ある由なるが小川博士は明日の講演に於て宮崎町青年會の懇請に依り特に同青年會に對する講演をも爲す由又内田學士は昨日中に着宮の筈なりしを以て到着の上は演題を變更さるゝやも知れずと云ふ因に目下史蹟研究所に滞留中の諸氏は今西學士の外島田梅原兩氏並に帝大生一名なりと

■歷史講演會(第二日) 一九二四(大正三)年八月三十一日(月)朝刊「四二八号」二頁

昨日も午後九時より高等女學校々々堂に於て先づ『巴奈馬運河』と言ふ題にて内田文學士の約一時間に亘る講演あり次で小川理學博士現今歐洲戰局を地圖に就て詳しく述べられ少時休憩の後同博士の宮崎町青年會員に對する『宮崎縣の地産に就て』一場の講演あり散會せしは午後一時なりき

■古墳調査と講演 一九一四(大正三年)八月三一日(月)朝刊「四二二八号」三頁

昨日より今西學士は人夫二十人を使役し西都の原の古墳を發掘し研究をなすべしと尙小川理學博士内田文學士は本日來穗午後史蹟研究所に於て古墳調査に於ける講演をなすべしと

■西都の原調査 一九二四(大正三)年九月二日(水)朝刊「四二二九号」五頁

去月卅日今西學十三學生及び田村縣書記と共に人夫十八名を□て□□□□□
調査を遂げた□□に縣廳より送付の古器物□□陳□□□□□したりと
詳細

■小川博士出發 一九二四(大正三)年九月三日(木)朝刊「四二三〇号」五頁

史蹟研究の爲め來宮中なりし小川博士は昨日當地を出發したるが卜部理事官は田野迄見送を爲せり

■刀と骨を掘り出す 一九二四(大正三)年九月三日(木)朝刊「四二三〇号」五頁

本郡生目村浮田兒玉今朝四郎なる者去月三十一日同村浮田字中間の山林にて石材發掘中刀一口陶器八個人骨四個を發掘し届出でたるが發掘の場所は附近の岩石層中にありて極めて軟かく石窟のありし跡なるらしく刀は全く腐蝕し僅かに形を存ずるのみ鞘等も無く陶器は壺の如きもの二個蓋の如き平板四個茶碗の如きもの二個なるも全部破損し居たりと人骨は四個ありしも掘り出すと共に破碎し細末となりたりと因に同所山林は往昔城塞のありし場所なりとの風説あり

■今西學士出發 一九一四(大正三年)九月四日(金)朝刊「四一三」号 五頁

右にて來縣中の諸氏は全部出發濟みとなれり

■古墳案内所設置 一九一四(大正三年)一〇月二日(月)朝刊「四一六八号」三頁

來十七八の兩日兒湯郡產牛馬組合主催秋季競馬會を西都原常設競馬場にて開催し鐵道管理所にては往復乗車賃割引を執行する事になりたるより右の競馬觀覽券を西都原古墳の視察者多かるべきを以て特に古墳案内所を同地に設け井上勇雄氏其他多數之に詰切り同地附近の地圖を印刷したるものを視察者に無代贈呈し且つ實地の案内を爲して詳細説明の勞を取る由なるが前記競馬開催當日は祭日及日曜に當るを以て當地よりの行遊者定めて多かるべし

■日州教育會總會 一九二四(大正三年)一月二七日(土)朝刊「四二七三號」二頁

日州教育會總會は例年秋冬の交を以て開催し來り昨年は十二月廿二日より開會したるが本年の會期は未だ決定せざるも講演の都合上成るべく名古屋縣の際を期して開會するを以て得策とし來る十二月頃喜田博士來縣の筈なりと云へば多分同總會の開期は十二月なるべしと

■御陵墓地の築堤 一九一四(大正三年)一〇月三日(木)朝刊「四一七七号」二頁

兒湯郡下穗北村西郡原所在御陵墓參考地の周圍に高さ三尺長さ二百七十間の堤防を築造する事となり右工事を同村青年會に請負はしむる筈にて之が契約並に諸般打合の爲め日吉縣屬本日同地へ出張する由

■古代史資料調査 一九二四(大正三年)二月二八日(土)朝刊「四二二二号」二頁

東京帝大文科講師文學博士喜田貞吉氏は本縣古代史研究の爲め來月下旬來縣の筈にて左記資料調査方依頼し來りたる由にて内務部長より各郡長に依命通牒を發し各町村に就き調査せしむる事となり居れるが尚ほ篤志の各學校教員其他斯道に志ある向の研究申告をも歡迎する由なれば篤志者は其研究調査の結果を申告されしとの事なり因に日州教育會にては同博士の來縣を機とし一場の講話を請ふ事に決し居れるが各地方にても講演聴講希望の向へは成るべく其請ひに應ずる由

一、現在知られる石器時代の遺蹟及遺物並に古墳に關する件（石器時代遺蹟とは石斧石鏃及之等と交りて發見せらるゝ土器等の所在地にして或は貝塚を爲し或は土壇内に包含せられ又は地上に散布せるものなり但し右の如く數多群集せず單に二二三

箇の石器を發見したる場所及其發見物の種類をも記載する事)

二、古墳は塚及横穴にして其所在數形狀大小の概略口碑等

■喜田博士來宮期 一九一四(大正三年)二月九日(水)朝刊「四二三三三」二頁

本縣古代史編纂資料調査の爲め來縣の筈なる喜田文學博士は來る廿八日頃來宮の筈なりと

■喜田博士來縣 一九一四(大正三年)二月一日(土)朝刊「四二三三三」二頁

喜多文學博士本月二十八日頃東京出發來年一月二日頃來縣南那珂郡地方を巡視の上東臼杵郡北方に出で高千穂より阿蘇地方に出づる由にて日州教育會にては博士の來縣を期とし一月五六日頃講演會を開催する筈なるが日向古代史の一斑神代史の研究の中何れかの一なるべし尚ほ同行の日高文學士にも講演を請ふ筈にて目下準備中なりと

■古墳調査 一九一四(大正三年)二月三日(水)朝刊「四二三三七」二頁

近日郡内各町村役場に促せし古墳調査の概略を聞くに十八ヶ町村内にて南北浦兩村に無き報告あるも疑はしき事なり去れど前記兩村を除く外は隨所豊富にして形狀横穴あり鏡形圓形等枚舉に違あらずといふ

■喜田博士來延期 一九一四(大正三年)二月三日(水)朝刊「四二三三七」五頁欄外

喜田博士の延期は多分來年一月五六日頃

■教育總會期日 一九一四(大正三年)二月五日(金)朝刊「四二三三九」五頁

日州教育總會期日に就ては一昨日の常務議員會に於て協議する所ありしも喜田博士の來縣期も來る廿八九日の豫定にて未だ確定せず從て同博士講演の都合上期日を決定するに至らざるも多分來一月五六日頃なるべしと

■喜田博士來宮期 一九一四(大正三年)二月九日(火)朝刊「四二四三三」二頁

本縣史蹟調査の爲め來宮の筈なる文學博士喜田貞吉氏は昨今の中東京出發南那珂郡を経て一月二日來宮の筈にて同五六兩日開會の日州教育會總會に於て講演を爲す事に決定せるが廳下城ヶ崎出身の文學士日高奈太郎氏も同總會に於て一場の講演を爲す由

一九一五(大正四)年

■喜田博士日程 一九一五(大正三年)一月五日(火)朝刊「四二四六六」二頁

一昨日來宮の喜田博士は昨日三浦敏氏の案内にて高岡本庄附近を視察し本日妻附近視察の上歸宮し明日日州教育會總會に於て日向と古代史の關係に就て講演ある由なるが七日以後の日程は左の通り内定し居れりと

七日宮崎發青島を見陸路沿道を視察して鶴戸着泊、八日鶴戸より沿道視察油津鉄肥地方の古蹟を踏査して油津より乗船、九日細島上陸沿道を視察して延岡着泊、十日延岡滞在附近視察、十一日午前(或は九日午後)講演午後出發日平着泊、十二日三田井着、十三日全地滞在附近視察、「」十四日全地發高森熊本を経て東上

■日州教育會總會 一九一五(大正三年)一月五日(火)朝刊「四二四六六」二頁

日州教育會に於ては既報の如く本日午前九時より縣立高等女學校に於て評議員會を開き大正二年度決算及大正四年度豫算を附議し尚ほ會員中の學校教員弔慰規則等に就き協議を凝らし午後一時より同校講堂に於て總會を開き引續き文學士日高奈太郎氏の講演ある筈にて明日は午前午後を通じ喜田博士及日高文學士の講演ある筈なりと

■喜田博士來宮 一九一五(大正三年)一月五日(火)朝刊「四二四六六」二頁

帝大教授囑託文學博士喜田貞吉氏は本縣古代史料調査の爲一昨日午後三時着宮神田橋旅館に滞在中なり

■日高文學士 一九一五(大正三年)一月五日(火)朝刊「四二四六六」二頁

日高文學士は去日來宮福島町なる自宅に滞在中

■喜田博士 一九一五(大正三年)一月九日(土)朝刊「四二四九九」二頁

本日三浦敏氏同伴高鍋を一番馬車にて出發午後五時着延菊池旅館に投ぜり岩切郡書記は幸協迄一般有志は恒富村役場前に出迎せり

■喜田博士 一九一五(大正三年)一月一日(月)朝刊「四二五一」二頁

八日來延吉永旅館に投宿昨日三浦敏氏の案内にて午前八時出發長井山陵を視歸途東海村稻葉崎視子の横穴古墳を見中食後更に南方村大貫の古墳貝塚天下なる緣喜式に現はれたる川邊驛の古蹟を視察せり本日は水産品評會を見夫より高等女學校に於ける講演會に臨み引つゞき恒富村沖田の貝塚を視察せり明日出發三田井に向ふ筈

■喜田博士動靜 一九一五(大正三年)一月二六日(土)朝刊「四二五六六」五頁

既報の如く史蹟調査として來郡せられたる喜田博士は去る十一日延岡より河野縣視學同伴松能橋に於て多數郡民の出迎ひを受け午後七時三十分西臼杵郡三田井着新松屋へ投宿翌十二日早朝より多數有志者の案内にて附近古蹟古墳を視察し午後三時より郡會

議事堂に於て『高千穂の神蹟』との題にて二時四十五分に亘り有益なる講話ありたるが聴講者は附近學校職員を始め各村役場吏員有志家三百餘名にして氏の講話は妙からず感動を與へたり講話終了後喜田博士は高千穂神社及び附近の古蹟を視察し歸宿せり翌十三日は滞在の筈なりしも別に珍奇の古蹟を發見せざる限り岩戸及び押方の横穴古墳は三田井の夫れと大同小異なれば略ぼ推察に難からざるのみならず熊本縣下宮地地方の古蹟調査等あり旁歸途期日切迫せる由なれば同日出發高森方面へ向ふ可し

■古墳調査 一九一五(大正四)年五月四日(火)朝刊「四三六二号」二頁

郡内各村の古墳調査は略終了し三浦氏は本日池袋氏と共に樋水流園丘調査の爲め同地へ出張せり

■古墳調査 一九一五(大正四)年五月五日(水)朝刊「四三六二号」二頁

古墳調査の爲め來町中の三浦氏は本日宮崎を向けて出發したるが、同氏の談によれば古墳は郡内各村に散在し其性質よりして頗る研究に値するもの少からざれば早晚發表の時機あるべく郡内にも高崎より繩瀬に至る間には三十七個の古墳高城村には十一ヶ所あり何れも丸塚若しくは前方後圓にして中には他郡に見ざる者すらあり而も何れも完全に十分研究の價值あり又下長飯字安留より玉利に至る間は屢屢石器類を發見したる事ありて同地方より中郷方面に至りては夙に開化に濕ひたる地方丈尚ほ十分研究すべきものあるべしと

■古代史上の日鮮關係(一) 文學士 黑板勝美氏談 一九一五(大正四)年五月七日(金)朝刊「四三六四号」三頁

日本人種起原論 「以下略」

■古代史上の日鮮關係(二) 文學博士 黑板勝美氏談 一九一五(大正四)年五月八日(土)朝刊「四三六五号」四頁

二、日本古語保存と日本書紀と朝鮮の古文書 「以下略」

■古代史上の日鮮關係(三) 文學士 黑板勝美氏談 一九一五(大正四)年五月九日(日)朝刊「四三六六号」三頁

三、古代に於ける日鮮兩民族の同化、異民族に寛大なる日本國民の特性 「以下略」

■土中より劍 一九一五(大正四)年五月九日(日)朝刊「四三六六号」五頁

本郡恒富村字片田は愛宕山の南麓にて古墳所在地なるが昨日同村字伊達の人某が柑橘園に開拓すべく鋤を入れし處突然土中より二口の古劍出し由なり

■片田の古墳 三浦敏氏の談片 一九一五(大正四)年五月一日(金)朝刊「四三七七号」五頁

東曰杵郡恒富村字片田に於て柑橘園開拓中偶然直刀二口を土中より發掘せしことは本紙の逸早く報ぜし處なるが右に付き十二日實地を臨檢したる三浦敏氏の語る一斑を聞くに

▲古墳の位置は愛宕山南麓にして南面せり昔今の沖田耕地は灣入せる海洋なりしものと考察さるゝ處にして沖田貝塚を距る東方數丁の處にありて目下已に開拓され柑橘園たり同村大字出北甲斐鹿治氏の私有地に屬す

▲第一の古墳 第一のものは圓形の古墳にして東西南北凡そ九間高さ五尺中央の頂きには朝鮮窯器の大なるものを發見せり其破片は南郷村の神門神社の寶器と同一質たるを見たり

▲其他の古墳 其南西凡そ六間を距る處に圓形古墳あり東西南北七間高さ四尺即ち此處より既記の直刀二口を發見し一口は二尺五寸一口は一尺八寸其外漢式の古鏡經四寸のものあり其外鐵矢數十本ありたり殊に矢柄には踏券に樺の皮を用ひし痕存ず次に東に距る約八間の處にも東西南北六間の圓形の古墳あり高さ四尺なり

▲古墳の價值 未だ發掘せるにあらざれば何等の斷案を下すを許さざるも曾て鳥井龍藏氏一行と共に發掘せしもあり天下の古墳に優るとも決して下るものにあらざるべし如何となれば既に發見せる直刀其他に徴し明瞭なればなり云々

■名所舊蹟保存法 一九一五(大正四)年六月二日(月)朝刊「四四〇九号」二頁

現行の名所舊蹟保存法は明治の初年地方長官に注意書として配布せられたるものにして法規としての價值なきものなるが内務省にては今回時勢の要求に従ひ名所舊蹟保存法規を制定し通常議會に提案すべく目下審議中と

■帝大講師來宮 一九一五(大正四)年七月二日(金)朝刊「四四二〇号」二頁

東京帝國大學文科大學講師原田倅人氏を西都原古墳調査の爲め今夏派遣の旨同大學より本縣へ通知ありたる由なるが多分來る二十日頃來宮すべしと

■史料展覽會 一九一五(大正四)年七月二日(金)朝刊「四四二〇号」二頁

本縣史料展覽會は愈本月二十日(豫定)より一週間縣立高等女學校に於て開催の害なるが出陳物は郡別若しくは時代別又は種類別等に區分し年代出品人名目説明等を記したるカードを添付して陳列する事とし場内の取締として看守人二人を置いて出品物を毀傷又は汚損せざる様充分の注意を加へ尚ほ謄寫保存の必要ありと認むるものは之れを區別して相當の手續を爲す由なるが目下の出品數は二郡三百七十點なるも各郡に於て

目下極力取纏めの中なれば總點數少くも一千點に達すべく既に到着せるもの、内にも椎葉山田來記、維新前日誌、漂民御覽之記、延京天明年間の城地圖、明和安永天明の御用日記其他古書畫、佛像より行政制度、宗教、教育に關する珍奇の物少からざれば全部到着の上は定めて意外の珍品に驚かざるべし一昨日任命されたる委員以下の氏名如左

委員長 内務部長稻葉義之助

委員 警察部長小林一男、理事官林壽夫〔一〕全成合徳次、全卜部正一、全大野正太、技師浦井節次、全平野篤夫、全池田太郎〔二〕全三原久、全古川松柏、全岩瀬庄七、全遠山祥吉、全竹中武吉、全本部定敏、縣視學式田四六、同河野彌兵、縣屬河野徳造、全長友貞之、全青木勝、警部萩原保太郎、屬桑原節次、屬兼技手野村貫一、警部乙森仲助、屬小泉賢次郎、全新坂貞衛、全日吉紋次郎、全近藤義一、全深見和彦、全青木武、技手西山半助、全三浦三平、全山口圭助、書記田村正一

■史料展覽會出品 一九一五(大正四)年七月四日(日)朝刊「四四三二号」二頁

南那珂郡より史料展覽會に出陳すべき古文書諸記録は同郡役所に於て極力蒐集中なるが來る十日の締切規日迄には百餘點に達すべし目下蒐集せる著名のものは平部正人出陳の伊東大和守祐久公書簡一卷、島津豐後守忠廣の像一幅、古文狀二卷伊東左京亮立願文一葉、伊東祐相同爲子の短冊十九葉掌政錄一卷、長倉鶴巢氏の纂記續編三冊同附録三冊、山陵考神社、古疊考之部、太田原景三郎氏の日置流師可目録、伊東子爵家の橘梓吟味藁鶴陵遺稿李門詩稿北諸日抄等なり

■史蹟出品 一九一五(大正四)年七月九日(金)朝刊「四四二七号」五頁

本郡より出陳すべき史料は百餘點あり其中木村長門守の尺牘は珍とすべく又五坪に餘る地圖あり是は内藤家より三代前の三浦壹岐守の手に成れるもの、由也

■史料展覽會委員囑託 一九一五(大正四)年七月二日(日)朝刊「四四二九号」二頁

來る二十日より開催の本縣史料展覽會委員一昨日左の通り任命囑託ありたり
宮崎郡長武田嚴作、師範學校校長森岡格、全校教諭布留川昇、全山崎新市、宮崎中學校長大島正健、全校教諭佐多直矢、全平手秋美、高等女學校校長遠藤正、全校教諭長田富作、全矢野盛雄、全園山民平、全吉加江宗二、全秋田曾彌作、全渡邊善市、全野口二郎、全校書記田村正之助、全木脇貞男、農學校校長淺井熊作、宮崎尋常高等小學校校長佐竹政友、宮崎町長井上允

■史料展覽會委員會 一九一五(大正四)年七月三日(火)朝刊「四四三二号」二頁

來る廿日より開催の豫定なる本縣史料展覽會に關し本日午後一時より縣廳内に於て委

員會を開き陳列裝飾其他各種委員の分擔事務に付き協議する由

■史料展覽會前記 一九一五(大正四)年七月一日(木)朝刊「四四三三三号」五頁

來る廿日より開催の本縣史料展覽會に關し一昨日午後一時より縣廳に於て委員會を開き種々協議の結果會場係及び各部擔當主任補助員等左の通り決定し昨日より孰れも開會準備に着手したるが目下縣廳に到着せる史料は千二百餘點に達し北諸縣郡の分は送付未済なるも今明中には到着の見込にて陳列方法は各郡別とし更に年代に依り部類別とする事とし夫々選別中也

▲會場係 主任西山技手、式田縣視學、河野縣視學、長友屬、萩原警部、高女の矢野〔一〕園山、吉加江、秋田、渡邊、野口各教諭及田村 木脇兩書記

▲各部擔當 宮崎主任武田郡長、補助新坂屬△南那珂布留川師範教諭、青木(勝)屬△西諸縣佐多宮中教諭、桑原屬△東諸縣佐竹宮小學校長、近藤屬△兒湯平手宮中教諭、日吉屬△東白杵長田高女教諭、深見屬△西白杵田村縣書記、青木(武)屬

■喜田博士來縣期 一九一五(大正四)年七月一六日(金)朝刊「四四三四号」二頁

史料調査の爲め來縣の筈なる文學博士喜田貞吉氏に對し本縣より其來縣期を問合わたるに來る廿二日着宮の旨一昨日電報ありたる由なるが廳下大淀村出身文學士日高奈太郎氏も同二十日前後歸縣の筈なりと云ふ

■史談會 一九一五(大正四)年七月一七日(土)朝刊「四四三五号」二頁

宮崎史談會にては今日廿一日頃喜田博士來縣を機とし史談會開催の筈なりと

■史料展覽會 一九一五(大正四)年七月二〇日(火)朝刊「四四三八号」二頁

今二十日より高等女學校に於て開催の筈なりし史料展覽會は喜田博士來る廿二日來宮に付陳列方法其他協議を要する點ある爲め廿三日陳列を爲し廿四日より一般の縦覽に供す事となり目下各委員に於て出品の整理中なるが出品物中には南北朝時代の矢文、延元二年後醍醐天皇御眞筆御書入の文書〔一〕建武三年高岡村指宿一族へ宛たる足利尊氏の菊池武敏誅伐狀並に同村河上家所藏足利尊氏直義誅伐狀等大日本史料に登載しある珍品尠からずと

■史料展覽會開催 一九一五(大正四)年七月二三日(金)朝刊「四四四一号」二頁

本縣史料展覽會は既報の如く各委員諸氏一週間前より熱心に整理に執掌し年代別種類別に各郡の出品を區別し特にカードの製造記入等頗る面倒なる手數に倦まず撓まず昨日迄に陳列裝飾等を終へ本日より愈一般に縦覽を許す事となりたるが會場は高等女學校の教場八室を以て之に充て一郡一室宛の割當となり居れば縦覽には頗る便利なるべ

く文學士喜田貞吉氏は昨夕着宮井上支店に投じ大淀村福島出身文學士日高奈太郎氏も目下歸郷中にて東京帝大講師原田儼人柴田常恵の両氏も廿五六日頃來宮の旨通知ありたる由なれば斯界の名士來縣を機とし講演會開催の議もあり本縣内に在る有らゆる珍奇重要な史料に接する機會は容易に得べからざるを以て縦覽人は豫想以上の多數に達するなるべし

■竹頭木屑 一九一五(大正四年)七月三日(金)朝刊「四四四一號」二頁

「前略」▲史料展覽會の委員諸氏は汗を流して古書の陳堆裏に埋まつて居る▲委員の調査を邪魔して居ると古い起證文が一通あつた何でも昔武士の誓約書の様なのであつたが今ならば連帶保證人のベタリと印を捺す所に▲梵天帝釋四大大天王總日本國中六十餘州大小の神祇殊に伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬神罰冥罰各可蒙罰者也仍て起證如件は永いが部類眷屬が最も振つて居る。

■史料展覽會出品(一) 一九一五(大正四年)七月二四日(土)朝刊「四四四二號」二頁

昨日より開催の本縣史料展覽會出品物は千二百餘點に達し中には容易に見得べからざる珍貴のもの少からず今其重なる出品に就き概要の解説を掲げて縦覽者の參考に供すべし

▲揖宿成榮之注進狀「以下略」▲前中納言施行「以下略」▲足利尊氏下知狀「以下略」

■明日の講演會 一九一五(大正四年)七月二五日(日)朝刊「四四四三號」二頁

日州教育會にては喜田博士原田文學士の來縣及び日高文學士の歸省中を機とし歴史講演會を開催する事となり諸氏の快諾を得たるを以て本紙廣告所掲の通明廿六日午後一時より高等女學校に於て左記演題に付き講演ある由なるが日高文學士の演題は其専門的方面の事柄に屬し原田文學士は今や方に山東視察の歸途本縣に立寄りたるものなれば山東に於ける最近の消息を聴くを得べく喜田博士の演題に至つては從來のものと其趣を異にし歴史の裏面觀察と云へる點に深き趣味あるべく孰れも其蘊蓄を披瀝せる興味津津たるものなるべければ當日は聴講者定めて多かるべし

耳川戰に至る島津伊東兩氏の關係 日高文學士

山東旅行談 原田文學士

■古墳調査開始 一九一五(大正四年)七月二五日(日)朝刊「四四四三號」二頁

東京帝大文科講師原田氏は既報の如く本縣古墳調査の爲め昨朝九時三十五分大淀驛着列車にて内海より來宮直に縣廳に知事内務部長を訪ひ後喜田博士と共に高女に於ける

史料展覽會を視察昨夜廣瀬旅館一泊本日卜部理事官新坂屬田村縣書記と共に穗北に赴き西都の原古墳に就き第二回の發掘調査を爲す由にて約二週間史蹟研究所滞在の豫定なるが先般の調査に従事したる文學士柴田常恵氏も昨日着宮共に調査に従事する事となるべく發掘に就ては本日古墳所在地を踏査して發掘すべきものを選定し來る二十七日古墳祭を行ひ即時若くは翌日より發掘に着手する由

■史料展覽會出品(二) 一九一五(大正四年)七月二五日(日)朝刊「四四四三號」五頁

▲左中將寄進狀「以下略」▲左近將監 高家執達狀「以下略」▲揖宿成榮註進狀「以下略」▲島津送鑑 大友具簡 執達狀「以下略」▲島津貞久執達狀「以下略」▲雜訴決斷「以下略」

■竹頭木屑 一九一五(大正四年)七月二六日(月)朝刊「四四四四號」二頁

「前略」▲史料展覽會は既に開會になつて居る暑い時ではあるし古書をヒネ繰る仕事だから格別趣味を有するものでなければ來るものはないが夫でも相當參觀者がある▲喜田博士も見へて居るし此陳列品に對して最も適當な類別と判斷を下して永遠に残す事にして貰ひたいものだ向き／＼の人が研究して居る様だから手落ちのある事はあるまい。

■史料展覽會出品(三) 一九一五(大正四年)七月二六日(月)朝刊「四四四四號」三頁

▲島津貞久の施行狀「以下略」▲揖宿成榮言上狀「以下略」▲北條泰時時房下知狀「以下略」▲北條泰時下知狀「以下略」▲矢文「以下略」

■史談會開催 一九一五(大正四年)七月二七日(火)朝刊「四四四五號」二頁

目下來縣中の喜田博士を招聘し當時に史談會を催す筈にて龍岡島津家令、大山郡長、土持町長等發起となり本日出宮の岡野中學校長をして交渉せしむる所ありたり

■柴田文學士來宮 一九一五(大正四年)七月二七日(火)朝刊「四四四五號」二頁

本縣第一回古墳調査の爲め來縣したる帝大講師柴田常恵氏は古代史料調査の爲め昨日來宮神田橋に投宿したるが本日西都原に赴き古墳調査を爲すべく尚ほ今回は東臼杵郡南郷村神門神社の神鏡其他石器時代の遺跡遺物を調査の爲め縣下を巡視する筈なりと

■喜田博士歸京 一九一五(大正四年)七月二七日(火)朝刊「四四四五號」二頁

來宮中なりし喜田博士は連日史料展覽會に就て熱心に調査に從事し昨日高等女學校に於て講演を爲したるが氏は今朝出發歸京する由

■史料展覽會出品(四) 一九一五(大正四年)七月二七日(火)朝刊「四四四五号」五頁

▲合戦の目安狀「以下略」▲泗川戰述懷書「以下略」▲尊圓法親王眞蹟「以下略」▲郡司安堵の下文「以下略」▲北條政顯執達狀「以下略」▲河上家久注進狀「以下略」▲導乘注進狀「以下略」

■喜田博士一行歡迎會 一九一五(大正四年)七月二八日(水)朝刊「四四四六号」二頁
一昨日午後七時より喜田博士柴田原田日高三學士の歡迎會を泉亭に開會せり主人側は小林警察部長始め諸氏銀行醫師新聞社にして主客二十三人古今を談じ十時過ぎ散會せり

■古墳調査着手 一九一五(大正四年)七月二八日(水)朝刊「四四四六号」二頁

來宮中なりし原田文學士及柴田文學士は昨朝一番汽車にて妻に赴き續いて卜部理事官田村縣書記も同地へ出張し史蹟研究所に於て種々打合せの上西都原に於て古墳祭執行直に發掘に着手する豫定なりしが今明中有吉知事も發掘の現狀を視察する由

■史料展覽會出品(五) 一九一五(大正四年)七月二八日(水)朝刊「四四四六号」五頁

▲少貳賴尚下知狀「以下略」▲導乘注進狀「以下略」▲高家執達狀「以下略」▲足利直冬下知狀「以下略」▲島津氏久下知狀「以下略」▲豐臣秀頼の書狀(寫)「以下略」▲家久の義絶狀「以下略」▲義門寺禁制「以下略」▲高岡郷士族系圖「以下略」▲菊綿及餅「以下略」

■歴史講演會 一九一五(大正四年)七月二八日(水)朝刊「四四四六号」五頁

一昨日高等女學校にて行はれたる日高原田兩文學士喜田博士の講演會は頗る盛會にして何れも趣味に富める歴史演説なりし第一席は日高文學士にして「耳川の戦迄の島津伊東兩氏」と題し「中略」第二席は原田文學士にして「山東旅行談」と題して「中略」第三席は喜田博士の「歴史の裏面觀察の一例としての平安の遷都」と題し「中略」甚だ有益なる講話にて約一時間半に及べり

■史料展覽會 一九一五(大正四年)七月二九日(木)朝刊「四四四七号」一頁

史料展覽會は數日前より開會され、縦覽者も亦少からず、余輩は之を好個の計畫とし

て歡迎するものたり、史料の保存と稱する事は、一家の上にも一國の上にも、頗る重大の事にして、時に之を展觀せざれば、遂に散逸の災を免る能はず、然るも多くは篋底に埋藏されて、顧みる所とならざるを常とす、展覽會の舉は是等の埋藏を探索する所以なれば、其所持者の利益たると共に社會の公益たる事幾許なるや知る可からず「中略」要するに今回の展覽會は、日向史の上に大なる寄與を爲す可き珍奇にして有益なる多くの資料を得ざりしも、民政自治に關するものは可なり豐量にして參考となる可きものありし、之れ寧ろ此計畫の目的たるものなる可し、縣廳に於ては目録の調製中なるが、出来るだけ其内容を概記する事となし、他日事ある場合の索引たらしむ可き也、太古の歴史に就きては古墳其他先人の遺物に依りて之を知る可く、近代の史實は斯かる催しにより、諸家の文庫を開きて査察するを得可く、蓋し兩々相待ちたる好個の事業たらざるを得ざる也、其詳細は本紙別欄記載する所に依りて知る可き也。

■公私來往 一九一五(大正四年)七月二九日(木)朝刊「四四四七号」二頁

▲日吉縣屬 古墳調査立會の爲め一昨日より西都原へ出張

■耳川の戦に至る島津、伊東兩氏の關係(一) 日高文學士講演 一九一五(大正四年)七月二九日(木)朝刊「四四四七号」五頁

「省略」

■史料展覽會閉會 一九一五(大正四年)七月三〇日(金)朝刊「四四四八号」二頁

去る廿四日より縣立高等女學校に於て開催の本縣史料展覽會は本日迄に閉會の筈なるが參觀者は初日の八十餘名を最少とし其他は孰れも百名以上あり廿六日の如きは四百名に近き多數の參觀者あり兎に角暑中と云ひ第一回の催しとしては豫想以上の成功なるべし

■史料展覽會出品(七) 一九一五(大正四年)七月三〇日(金)朝刊「四四四八号」五頁

▲西諸縣郡「以下略」▲薩摩表へ差越「以下略」▲兒湯郡「以下略」▲本藩實錄「以下略」▲四壁敷改帳「以下略」▲往來手形「以下略」▲民政に關する文書「以下略」▲北諸縣郡「以下略」▲異國船の達示「以下略」▲心得の條々「以下略」

■史料展覽會出品(八) 一九一五(大正四年)八月一日(日)朝刊「四四四九号」五頁

▲雇人賣買禁止「以下略」▲庄内地誌「以下略」▲一向宗禁止達示「以下略」▲宮崎郡「以下略」▲畠山義顯文書「以下略」▲楠樹仕立法「以下略」▲書札聞書「以下略」▲生目八幡由緒「以下略」

■展覽會と調査 一九一五大正四年八月三日(火)朝刊「四四五一号」二頁

史料展覽會の跡始末に就き成理事官は語りて曰く一昨日までにて跡片付終了し出品は全部縣廳に取越し保管せり一品も紛失等なく目録と符号したり出品物に對しては豫定の如く各方面に涉り夫々専門家の方にて詳細の調査を遂げ之を知事に報告する事となれり地方課にても出來得るだけの取調をなしたるが税制、人口、土地、制度等今日と比較して參考となる可き事多し就中税制は延岡藩最も詳細にして歩一税(關稅)の如きは牧野侯時代に日向御前(將軍家の養女)の化粧料として創められたるものなりと云へる傳説あるが随分重税たり此外林政は林務主任調査し米に關しては檢査所にて調査する等専門家の取調を経たるに依り他日參考となる可き多くの資料を得たる可し云々

■知事の發掘視察 一九一五大正四年八月三日(火)朝刊「四四五一号」二頁

有吉知事は昨日午後三時宮崎驛發の汽車にて穗北に赴き西都原に於ける古墳發掘を視察し即日歸廳したり

■古墳調査狀況 一九一五大正四年八月三日(火)朝刊「四四五一号」五頁

原田、柴田兩文學士の西都原に於ける古墳發掘調査の狀況を聞くに既に二個の發掘を終り玉曲玉太刀劍等の完全なるもの多數を得たるが一昨日は何等得る所なく昨日は午前の報告にては頗る有望の模様なりし尚ほ發掘は來る五日迄にて引揚げ兩氏は更に東臼杵郡地方視察の上南方村に於ける貝塚の發掘を爲す見込なりと

■日高氏歸京 一九一五大正四年八月四日(水)朝刊「四四五二号」五頁

史料展覽會の爲め來宮中なりし文學士日高奈太郎氏は昨日迄に調査を終り本日□日滞在明日出發歸京の筈なりと

■喜田博士一行 一九一五大正四年八月五日(木)朝刊「四四五三号」二頁

西都原古墳調査の爲め來縣中の喜田博士一行の消息に就ては別項記載の通りなるが一行は延岡へ向ふ途中神門神社の寶物を見度希望なりしも時日の暇なく沿道まで携へ來りて供覽を乞ひしも貴重なる寶物を濫りに持運びては不敬に流るゝ傾きあり遂に供覽出來ざる事となりしを以て延岡行は見合せとなり本日妻町出發細島より乗船歸京の筈なるやに聞けり

■古墳發掘終了 曲玉管玉を發掘す 一九一五大正四年八月五日(木)朝刊「四四五三号」五頁

豫て着手中なり兒湯郡西都原古墳發掘は一昨日を以て終了を告げしが同日曲玉一個小玉十個直刀三振管玉二個を發見せりと而して東京より來縣せる喜田博士柴田大學教授は縣廳より出張せる日吉縣屬の案内にて昨日同地を引揚げ直に東臼杵郡恒富村に向ひたるが同地の古墳を發掘する筈なりと

■原田文學士出發 一九一五大正四年八月六日(金)朝刊「四四五四号」二頁

古墳調査の爲め來縣妻町滞在中の原田文學士柴田教授は日程を變更して本日妻町發延岡行を見合せて土々呂より乗船歸京の途に就く由而して發掘せし古器物は一應大學に持參し研究すべき筈なりと因に前號喜田博士とせしは原田文學士の誤りにて喜田博士は曩に鹿兒島に向け出發したりと

■縣内古墳祭 一九一五大正四年一〇月一五日(金)朝刊「四五三二号」二頁

兒湯郡下穗北村西都原古墳發掘に就ては其時々申告祭及復舊祭を執行して尊崇の誠を致せるが同所に在る多數の古墳及び縣内各地に散在せる塚陵は孰れも建國創業の際國事に盡して多大の功績ある神人の靈塋なれば是等古墳の保護永存に付いては有吉前知事時代屢々訓令を發し諭告を下して相當の處置を取らしめつゝありしが中には斯學者の史蹟研究の資に供する爲め發掘調査を爲せる者も少からず將來尚ほ屢々學者研究の資料として調査せらるべきを以て是等の靈墳に對して崇敬の誠衷を陳し謝意を表するの趣旨にて毎年秋季古墳祭を執行するに決し之が祭典は縣神職會に依嘱し其第一回は昨年秋季史蹟研究所の落成式當日執行したるが本年は明十六日午前十時西都原に設置の齋場にて神職會長田中宮崎神宮々司以下伶人出張地元附近の神職之に參加し嚴肅なる祭典を執行する由にて縣廳よりも臨場の事になり居れるが當日は恰も御陵競馬の第一日に當れるを以て參拜者も例年に比し頗る多かるべき模様なり

■古墳祭 一九一五大正四年一〇月一七日(日)朝刊「四五四号」五頁

既報の如く昨日午前十時より兒湯郡下穗北村西都原齋場に於て縣下古墳秋季祭執行に付き卜部理事官參列の爲め出張したり

■故三浦氏追善談話會 一九一五大正四年一二月六日(月)朝刊「四五七一号」三頁

本日廣告欄に記載の通り故三浦氏追善談話會には多數同氏の遺物等を蒐集し談話の材料と爲さんと希望する由にて參會者は各自其の所藏の品を持參あらんことを望むといふ

■縣會議員史蹟研究所視察 一九一五大正四年一二月二日(日)朝刊「四五七七号」二頁

縣會議員諸氏は本日打ち揃ふて妻町に於ける史蹟研究所視察の由にて議員中數名は案内の日吉縣屬同行昨日午後三時發の汽車にて先發したれば同夜は定めて古墳探査に學術上有益なる發見ありしなるべし

■内藤博士來縣 一九一五(大正四年)二月二五(日)水朝刊「四五八〇号」二頁
京都帝國大學教授文學博士内藤虎次郎、同講師文學士今西龍同文學助手梅原末次(三)氏は本月下旬來宮明春一月に掛け約三週間兒湯郡下穗北村史蹟研窮所に滞在史蹟の調査研究に従事する由

■我古代民族 文學博士 喜田貞吉氏談 一九一五(大正四年)二月一七日(金)朝刊「四五八二号」三頁
〔省略〕

■三浦氏追悼會 一九一五(大正四年)二月一九(日)朝刊「四五八四号」五頁
本日午後二時より縣立圖書館日本室に於て故三浦敏氏の追悼會を催す筈なりと

■故三浦氏追悼會 一九一五(大正四年)二月二二(日)火朝刊「四五八六号」五頁
一昨十九日は三浦敏氏沒後恰も百日に相當せしより遠藤高等女學校長司會者となり早朝菩提寺帝釋寺へ參拜午後二時より縣立圖書館特別室に追悼會を行ひ遠藤、多田、山内、落合諸氏の懷舊談あり次で日本室に於て酒饌を供し來會者の詩歌書畫の寄附等あり酒間更に往時を談じ散會せしは夕刻にして來會者は右の外舊子弟姻戚知友數十名なりと云へるが當日山内向陽氏の靈前に供したる朗吟は左の如し
回想當年笑語溫。育英好古極淵源。
紛々蒼說誰能斷。史蹟談場欲招魂。

■内藤博士來縣 一九一五(大正四年)二月二六(日)朝刊「四五九一号」二頁
京都文科大學教授内藤文學博士及今西文學士の一行來る二十六日京都出發西都原古墳調査の爲め來縣の筈にて當地着は二十九日頃なるべく滞在は十二三日頃迄なり

■日州教育會總會 一九一五(大正四年)二月二九(日)水朝刊「四五九四号」二頁
日州教育會にては今回内藤博士今西學士一行の來縣を機とし史學講演會を開く筈にて來る一月十日前後總會開會の由なるが場所等は一行と協議の上決定すべしと

一九一六(大正五)年

■日州教育會總會 博士學士の講演 一九一六(大正五年)一月五日(水)朝刊「四五九七号」二頁

日州教育會にては豫報の如く愈來る七日より九日迄三日間縣立高等女學校講堂に於て總會を開き第一日は午前九時より内藤博士今西學士の講演第二日は議事及報告第三日は會員の演説ある由講演題は左の如し

支那に於ける考古學 京都帝大文科大學教授 文學博士 内藤虎次郎
朝鮮に於ける遺物遺蹟 全學校講師文學士 今西龍

■古墳發掘調査 一九一六(大正五年)一月五日(水)朝刊「四五九七号」二頁
舊臘來宮したる内藤博士今西學士一行は一昨日西都原に赴き昨日より古墳の發掘調査に着手したるが縣廳よりは日吉縣屬出張して諸般の斡旋を爲し尚ほ民間より谷口炭山岩切柏堂の兩氏同行視察を爲せり因みに内藤博士は今明中都農に赴き東白杵郡南鄉村神門神社の寶物古鏡を都農神社に於て調査の筈なりと

■日州教育會(第一日) 一九一六(大正五年)一月八日(土)朝刊「四五九九号」二頁
豫報の如く日州教育會に於ては昨日より高等女學校に於て總會開會せり午前九時開會するや堀内會長開會の挨拶を述べ續いて勅語捧讀あり終つて堀内知事の訓示あり次で例に依り同教育會總代宮崎神宮參拜者の選舉ありたるが其結果縣立圖書館長山内卯太郎氏選任され直に同神宮へ參拜す右終つて講演に移りたるが初め内藤博士壇上に立ち支那に於ける考古學と題し該博なる知識を披瀝して約一時間に亘り有益なる講演あり十二時講演を終りて休會し更に午後一時半再開再び内藤博士の講演ありたり當日の來會者約二百名來會者中重なる人は堀内會長武田郡委員長卜部、式田、河野の三主事上井宮崎、岩下兒湯の兩視學山内圖書館長、遠藤高女校長、大島中學校長等にして其他來賓としては新名檢事正、後藤小林區署長、多田赤十字社主事、堤農銀頭取、杉田直諸氏等なりし本日は午後一時開會會務其他の諸報告會員の視察談ある筈

■講演會 一九一六(大正五年)一月八日(土)朝刊「四五九九号」五頁
妻町有志は目下來縣中の内藤博士及び今西學士を聘し史蹟研究所に於て去五日午後六時より講演會を催せしが聴衆百餘名なりしと

■日州教育會(第二日) 一九一六(大正五年)一月九日(日)朝刊「四六〇〇号」二頁
一昨日より縣立高等女學校に於て開會せる日州教育會總會は昨日も引續き午後一時より開會し會計報告其他の諸報告ありて後會員數氏の學事視察談等ありて午後三時閉會したり本日の日程は午前九時開會々員諸氏の演説ありて最後に閉會式舉行の由因に一昨日午後内藤博士の講演題目は『日本古代史の研究に就て』と云ひ約二時間に亘る講

演にして日本の古代史を研究する場合外國歴史殊に我國と緊切の關係ある支那朝鮮の歴史と對照するは年代を明確にする上に於て必要なる旨を論じ更に遺跡古墳等より發見する古物が往々外國傳來物あり例へば古鏡の如き支那より傳來せる漢鏡、唐鏡等古墳中より發見する事あるが之れ記録以外歴史の年代を明かにするに頗る有力なる材料たるを詳論し最後に現今の史學界は材料収集時代にして研究の結果を發表す可き時機に達せざれば天孫降臨の地は果して何處なるか又は西都原視察の結果は如何等と直に其斷定を求むるは甚だ早計なりと結論して降壇せり尚ほ當日今西學士の講演ある筈なりしも古墳調査の都合上見合せとなりたるが多分本日同學士の講演ある可しと

■日州教育會（第三日） 一九一六（大正五年一月一〇日月）朝刊「四六〇一號」二頁
總會第一日の日に於て講演ある筈なりし今西文學士の講演は一日午後一時半より別項記載の如き今回の西都原の發掘に就て滔々約三時間に亘り有益なる講話ありて四時頃閉會せるが此の爲めに同日の總會日程を變更し昨日會計報告其他の諸報告あり又會員の視察報告等ありて閉會式を擧げ午後一時頃散會せり

■今回の西都原 古墳發掘…今西文學士講演 一九一六（大正五年一月一〇日月）朝刊「四六〇一號」三頁

今西文學士は内藤博士と同伴客臘三十日來宮し去る二日より西都原の古墳調査中なりしが去る四日五日の兩日に亘り第二號塚の發掘を行ひ古墳中より翡翠の勾玉二箇と古鏡一箇其他多數の玉を得たり就中勾玉及び鏡は實に稀有の珍品なりといふ同文學士は六日發掘せる古墳の復舊工事を終へ一昨日日州教育會總會の席上に於て右古墳の發掘に就き一場の講演を試みたり乃ち左に其講演概要を録する事とす可し（文責在記者）

一、緒言

私の専門とする處は朝鮮史である、然し乍ら私が古墳を調べたりして考古學上の研究を爲す所以のものは重に上代の歴史を研究する上に於て其必要を生じた爲めであつて夫れ故私は一昨々年来毎年本縣に參つて古跡遺物の調査研究に従事して居る譯である然るに本縣には史蹟研究所なるものが設けられて吾々は之が爲めに尠からぬ便益を得て居るこの研究所は尤も有益なる設備であつて吾々は之に對し本縣當局の達見に敬服すると同時に満腔の感謝の意を表せずには居られないのである、即ち本縣は之に依つて本縣の歴史を彰明し又價值あらしむる事が出来ると思ひて疑はないのであるが、本縣歴史の價值は直に日本歴史の價值であつて又更に日本の歴史の價值は世界の歴史の價值を加へるのである之れやがて世界の文化の上に仕れだけの利益を與ふる歟決して尠少とは云ひ得まい、處で私は今回西都原に於て新しく古墳を發掘したのであるが今回の發掘は私に最も興味ある新しい事實を與へたのである故に今日茲で講演致した

いと思ふ事は今回の發掘に就いて得たる其新しい事實と又夫れに依つて得た私の推定を述べてみたいのである畢竟今回の發掘に依つて學術上如何なる價值を見出したかといふ事が此の講演の主眼とする所である、先づ今回の講演の初めに當つて茲に用ふる言葉について説明する必要があると思ふ

二、古墳とは何ぞや

△古墳の種類 古墳とは何であるのかといふと文字の意味の通り古い塚である單に塚と云つても之れは古い人の墓である、支那や滿洲には往々他の民族の古墳を見る事があるけれども日本に於ては吾々祖先の墳墓許りで他の民族の古墳は一つも發見されぬ故に日本には昔他の民族が住んで居たか其の存在の理由となるべき材料を得ない譯になるのでこの古墳は今から略ぼ千年以前迄作られて居たのであるが日本に於ける古墳には色々な形を備へて居る併し若し古墳が土地に添ふて平に造られて平地になつて居るものであつたとすれば其發見には頗る困難を生じたであらうが幸いに地上に現はれて種々の形態をなして居るから容易く發見する事が出来るのである、中には壊されて今日形を止めないものもあるけれども兎に角地上に現はれたる古墳の外形に依つて別々の名稱を與へて居る則ち普通に多く發見されるものは圓塚と云つて單に土を圓く築き上た塚である次に多く發見されるものには前方後圓であつて車塚、瓢塚、茶臼塚などとも名を附して居る之は横から見た場合は圓形の塚が二つ列んで繋がつて居るやうなもので上の方から瞰下せば前方の塚は方形を爲し後方のものは圓形をなして居るのである、此外極めて稀であるけれども方墳と云ふのが有る之は餘程少いものであつて畿内の推古天皇の御陵がこの方墳でなかつたかと思ふ（若し記憶違であつたらば訂正する事にする）併し私が方墳の完全なものを實地に研究し得たのは本縣の西都原にある方墳でそれは、女狹穗塚の附近にある朝鮮では高句麗の塚は大概この方墳に屬するもので又支那にも多く見受る所である、更に特別なものになると横穴であつて之は只塚と云ふより全然墓であつて當地では蓮ヶ池附近に多數發見する、多くは山の斜面殊に柔かい砂地の山であつて横に穴を掘つたものである横穴はこの日当には到る處多い様だ

△古墳の内部 以上は古墳を外部より見た説明であるが古墳の内部を調べてみると第一に棺がある、棺は死骸を直接入れたる箱であつて其次に棺を覆ふに槨といふものがある、中には槨のあるものと無いものとがあるけれども槨のないものは之を略したものである、而して槨で外部を包んだ棺を更に墓壇の中に斂める、横穴は墓壇の一種である從來この墓槨を槨と稱して居たものであるが全然誤りであつた、私も墓壇を槨と取り違へて居た一人であつたが昨年に到つて初めて其誤りなることを知つたのであつて今迄世に現れたる渾ての考古學書の中の槨とあるのは墓壇の事を差して居るので全部誤りである夫が爲め槨と墓壇を誤つて考へて居る人は頗る多い譯である而已ならず學者の中でも未だに墓壇を槨と稱して居る方がないでもない、此事は特に諸君の注意

を促したいのである墓壇は内側から見得べきもので外部は見られない則ちその上に土を以て覆ふから、であるその土を假りに封土と云つて居る又封土の上に之を堅固にする爲め石を載せたものであるが此の石を一般に築石と稱へて居るのである以上で古墳の大体の説明を終つた（つゞく）

■今回の西都原 古墳發掘（承前） 今西文學士講演 一九一六（大正五年一月一日）火朝刊「四六〇二号」五頁

何が爲めに古墳を發掘するか

▲考古學の必要 吾々は古墳を發掘して種々と研究調査をするが何が爲めにサウ云ふ古い墓を發く必要があるの歟人の墓を掘るといふことは實に不都合な話であるが一体墓を發いて何にするかといふ疑問が茲に起つて來る、私の友人は私に向つて墓掘だなど、云つて頻りに虐めるけれども私が墓掘をするのは其處から何物かを得んとする爲めであつて決して無意味に掘つて居るのではない、然らば墓から何にを得やうとするの歟、それを説く前に少しく考古學に就いて説明をして置かねばならない、考古學は一つの獨立した學問ではないが歴史の補助學科として頗る必要のものである、則ち歴史を一層明確にせんが爲め考古學に頼るのであるが元來歴史は世に残つた古い記録文章を根據とするのが原則であつて歴史家は其の記録文章に含まれたる眞と偽の分量を確めた上で歴史上の事實を明かにするのである、その間に斷じて想像を加へるのを許さない、勿論歴史的の材料と材料の間を繋ぐ爲めには一つの推定を下す事はあるけれども夫れと云つても決して想像ではなく根據ある材料から來る推理に外ならない、歴史は記録文章を基礎とするが然し乍ら等は等の材料は吾々の意を満たすだけ備はつて居るものではない、それには限りがある、故に吾々の研究は充分になし遂げ得ない譯になつて來るのであるが、此場合他に研究の歩武を進め得べき材料はないのであるかといふにサウでない即ち歴史上の事實を外部から確め得らるゝ言語又は遺物遺跡がある此の遺物遺跡こそ考古學の領分に屬するものである、それで歴史の唯一の根據とする記録文章の盡きたる場合考古學は極めて必要を増して來るのである、殊に記録文章のない時代に於ては付うしても考古學の力に據るより仕方がない、併し歴史は國民の如何なる時代から發するものと云ふと國民が野蠻時代には歴史は必要ないのである、尠くとも民族が國を形造り進歩して來ると考古學に必要な材料を遺すもので、野蠻時代には何等それ等の材料を遺さない、そこで歴史の時代に入つた國民に於て考古學的の材料は遺しても未だ記録などのない時代がある、サウ云ふ時代の歴史を明かにするのが考古學の分野である、例へば日本民族でも未だ日本島に移つて來る前は歴史的の研究を必要としないが日本島に土着してから隨分國民は進歩して來て居る、併し其頃には記録がないので當時の歴史は遺物遺跡に依つて考古學的研究をするのであつて歴史の必要のない野蠻時代は人類學の方に引渡す可きである、日本で記録の存して居

るのは欽明天皇の時で其頃は餘程記録が存在して居るが欽明天皇以前は記録がない、記録のない時代は遺物遺跡に據るより方法がないのである古事記、日本書紀の如きでも其間には矛盾した事が多く殊に年代の如きに於ては甚だしい差異を認めるのである、これなど外國の記録に我國と交渉して居る處を考覈して年代を明かにする方法を執るが其一方に於ては遺物遺跡に依つて確め得る場合がある、即ち外國の遺物が傳來して居たからである、又崇神、垂仁の頃にも略信す可き記録が存して居た、それから又神武天皇の御東征の記録もあつたが記録が充分に存して居ない時代は唯遺物遺跡に據るより年代なり事實を明かにする方法がないので考古學の必要なる事は以上の説明でも理會し得ると思ふ、即ち遺物遺跡を考古學的に調査せんが爲め吾々は古墳を發掘するのである

△發掘目的の二方面 然し乍ら吾々が古墳を發掘するのは單に考古學上の研究をなさん爲めばかりでなく他に道德的方面の目的のある事を忘れてはならない、即ち祖先崇拜の意味を存しているのである、古墳を發掘するのは古墳を保存せんが爲めである、斯う云ふと甚だ矛盾のやうに聞へるであらうが決して矛盾しては居ないと思ふ、それは例へば醫師が死人を解剖するのと同じでその死人の内容を明かにし又死体をヨリ能く保存せんために解剖するのである、古墳を發掘もせず其儘に放置するならば單に一つの土塊として何等の價値も尊崇も認め得る事が出來ないかも知れぬが發掘の上調査の結果は吾々の如何に尊ぶ可き祖先の墓であるかを知つたならば初めは唯の土塊と思ふて顧みなかつたものに對し其後は或る特殊の感情を以て迎ふるに至るであらう、更に又古墳の内容が明確になるだけソレだけ又吾々の尊崇の感を深ふ譯になつて來るのであるまいか故に古墳發掘の目的には二つの方面がある、即ち考古學上の研究を爲す學問的の方面と又祖先崇拜の念を一層切實にする精神的の方面である、吾々は斯る意味に於て古墳の發掘に従事して居るのである

△日本の古墳 日本の古墳の年代は前にも述べた通り千年計り前にその終りを告げて居るのであるが起源は未だ判らない、それを説明する迄に研究も材料も得て居ないのである、埃及アッシリアの古墳又は支那朝鮮の古墳の中からは文字や記録が出て來て居るが日本の古墳からは文字が出ない全く出ないとは云へないが天智天皇の御代から桓武天皇迄二十幾通かの墓誌が出て居る墓誌と云つても誰々の墓とある位の極く簡單なもので日本に出た墓誌の終りは延暦何年かの年號が終りとなつて居る、天智天皇以前は墓誌も文字もない、朝鮮では千八百年頃前に書いた文字が或る古墳から一つ出たがそれは平壤の南大同江に面した古墳であつて尚ほ夫より南黃州（平壤と京城との間）にあつた古墳は煉瓦で積んであつて其煉瓦に型でつけた帶方太守の文字があつた、日本の墓誌も私が明白に調査したものは小野毛人といふ人のもの一つで此の人は天武天皇の頃の人である、斯く古墳を調査するからと云つて古墳を一つ掘れば一つ掘つただけ確かに得る處はあるけれども併し研究の結果は極僅であるから古墳の研究は遅々と

して進歩せぬのも當然である以上前論が長くなつたがこれから西都原の古墳を今回發掘した順序と夫れに依つて得たる學問上の收穫についてお話しやうと思ふ（つゞく）

■今回の西都原 古墳發掘（承前） 今西文學士講演 一九一六（大正五年）一月二二日（水）朝刊「四六〇三号」五頁

（四）發掘の狀況

△古墳の位置 今回發掘したのは西都原の第二號塚であつて東妻町に面した方の高臺の端にある古墳である、眺望頗る好い處である、此塚は前方後圓であるが著しい特徴のある古墳で此邊りでは特に柄鏡塚とか云つて居るさうである、恰度柄鏡のやうな形をして前方の塚が普通のものより低く幅が著しく狭いので上から瞰下した處は幅の狭い長方形をなして居る譯だが之などは餘り他に見ない珍しいものと思ふた、塚の上には曾て神社でも祀つてあつたのかと思はるゝ様な跡があつて割合に扁平になつて居た、それから礎石とも見らるゝ大きな石が五ツ許あつた、この塚の上に神社を立てると云ふ事は何處でも多く見る處であつて古くから塚に伴ふた或る信仰が神社に依つて具象されたものではあるまいかと思ふ、此塚の現在の狀態は笹やら低い雜木が一面に簇生して又大きな松の切株もあつた、而して全体の長さは何れ位あるかと云ふと四十六間（縣廳の蛇原氏が實測されたので割合正確である）後方の塚の高さが二十七尺、其圓周の直徑が二十六間前方の塚の高さは十五尺、幅十六間で前方の塚と後方の塚の接續點あたりの高さは十四尺（普通ではもつと差のある處である）普通塚の形から云ふと前方の塚が高かる可き筈なのに此の塚は低い、此點より察するに前方後圓が形式を略して圓塚になる其の經過として前方が低くなつたのではあるまいか、斯う私は考へて先づ塚の形に於て頗る興味を牽いたのである、加之前方後圓の塚では遺物は前方にあつて、圓塚の場合はサウいふ特殊の形式のものであるから果して前方に遺物がある歟、若や後方にあるのではあるまい歟と著しく興味を刺戟されたのであつたが併し私は心の内で竊に前方には萬が一遺物はあるまいと期して居た

△發掘の順序 そこで私は先づ前方の塚から掘つてみた、果たして豫想の如く何物も見當らなかつた、此時私は自ら得意の微笑を洩らさざるを得なかつた、次ぎに早速後方の塚の中心を求めて約四間の穴を掘り始めたが十二尺何寸か掘下げてみたけれども何の痕跡もない、ハテ不思議だと思つて居る中に意外々々石積の土手の一端が左の隅に現れた段々石の列ぶ方に添ふて掘り出して行くと——一寸前に云つて置くのを忘れたが此塚は南向きである——塚の中心にある可き筈と思つたのに其石積の土手は中心から西に向つて少しく斜に横たはつて居るぢやないか、能く調べると石積みは蒲鉾形のやうに出来て長さ二十六尺、中央の高さ三尺、五寸幅十尺ある、而して後の方が中央より著しく高くなつてその最後端の處が塚の表面から四尺五寸許り前方の端が同六尺五寸許りあつたが其中央に縦に一條の凹んだ處が出来て居たこれは大方中の棺が腐

朽した爲め落ち込んだものだらうと思ふ

△槨の構造 石積みを掘出して其築造の方法の調査結果に依ると初め幅二尺四寸長さ二十二尺乃至廿四尺位の粘土の壇を築き其壇上に布くに小砂利を以て然して其上に棺を置いたものらしい棺の大きさは幅一尺位のものであつたかと思はれる併し少し大きかつたかも知れぬが兎に角幅も長さも壇の面積より少し小さいものであつたのに違ひないので其棺の脇に可成大きな石を二つ宛積み列べて棺の高さと略均しする位にしたらしいのである、棺の中は勿論死體と遺物を斂めたものであるが棺を更に覆ふに粘土を以てしたので即ち之れが槨と稱するのである其上を又更に多數の石を積んで槨を保護して居るので先刻石積みの土手を發見したと云ふたのは槨の表面を包んだ石積であつたのである

△珍しい遺物 棺は前云つた如く腐れた仕舞つてその跡は何も認められなかつたが多分棺は木棺であつたらしい、その替はり棺の下敷になる小砂利の上には二十何尺かの間一面朱に染つて居るのを見た、之れ即ち棺の中に詰めた朱が棺の腐れた爲め砂利に染つたものに外ならぬ、其小砂利の前方から約十二尺の所に多數の小玉を發見した中に白玉も混つて居たが其太さは一寸南京玉より少し大きい位のものであつて其外細い管玉も出て來た、從來の經驗に依ると小さな管玉の出る塚は良い遺物が出るもので蓋し高貴の人の塚である小さな管玉と云つても仲仲貴いもので普通大きな管玉を磨いて小さくするのであるから管玉が小さいからと云つて價値の少いものとは云へぬのである尚ほ其附近から翡翠の勾玉を二箇發見し更に其處から三尺五寸許り進むと砂利と粘土の間に木片を發見したがその木片の間に鏡が挟まつて居た木片は杉か檜らしい木質で鏡箱であつたものかと想像されるのである又一寸位先きに三寸位の厚みで有機物があつた、之れは何であるのか全く判らない併し研究の必要上幾分を拾取つて一つは史蹟研究所に残し一つは大學に持ち歸つて之れが植物性のものか或は金屬性のものかを調べてみようと思つて居る其外鏃一本腐れて居たものを發見し其奥に劍であつた鏃棒であつた歟、兎に角一尺一寸三分位の鐵の腐れたやうなものを発出したが甚だしい腐敗で、唯其跡のみを存して手に取つて見るなど云ふ事も出来ないものであるから其儘にして置いたその先きは大きな石で止めてあつたので調査は是で終つたのである小砂利の下は何もあるまいと推定して今度は復舊工事にかけたのであつた

△興味ある問題 私は此の塚を發掘する前に塚全体の形に於て特異の興味を覺へたので即ち之に依り此塚の形式は前方後圓と圓塚の中間に位するものではあるまいかと推定は今回私の得た推定の一つであるそれから又内部に至つては更に大なるものを得た（つゞく）

■今回の西都原 古墳發掘（承前） 今西文學士講演 一九一六（大正五年）一月二三日（木）朝刊「四六〇四号」一二頁

〔五〕學問上の收穫

△推定の二つ 第一塚の外形に於て一つの推定を得たが第二に得た事は塚の内部である、昨年この附近の前方後圓を調査した際粘土の礫の上に斜に石が列べてあつて一本松の前方後圓の塚も二十何尺の下に粘土の礫を發見し礫の上に形式的に石が覆ふてあつた、然るに今回の塚では粘土の礫に全部に石を布いてあつたが之に依ると彼の矢張西都原の鬼ヶ窟の墓は脇に恰も棺の脇に積む石に當る如きものを積み重ねて其上を石を以て覆ふてゐるのは今回の塚の形式が進んで鬼ヶ窟の如き形式になつたものと思はれるこれが今回得た推定の三で今後はこの推定に依つて研究を進めて行かないと思ふのである、尚私の興味を牽いた事は塚の形式が朝鮮の古墳と相似たものがあるからである、新羅の荊州に於て發見した古墳は朝鮮の何處にも見當らない形式を示して居るので中央の棺を覆ふに石を以て石の數も頗る多く其の上に極薄く粘土をしき又其上に砂利を置いてあるのである、これは新羅の特色とも云ふ可きで他には全く見られない形式である、この形式が今回の塚の形式に著して似通ふて居るから頗る面白いのである

△朝鮮との關係 一昨々年當地での講演で私は新羅には管玉がないと斷言したが其斷言は破れたそれは朝鮮の芬寧寺に善德王の建てた塔があつて其塔を壊した際中から石礫が出たその中から驚く許り多數の管玉が出て來たのである高句麗からは未だ管玉が出ないが百濟からは弗々出る、此事も日本の古墳との關係を思はせる材料である、又新羅の傳説と日本の傳説と似たものがある、日下部氏の先祖は井戸の中から出て木花咲耶姫に接近したとあるが之と似たものに新羅を建設した關英婦人が井水の中から出て居る之なども日本の天孫降臨の傳説と似たものであるが之を以て直に朝鮮と日本の關係を斷言するものではない、吾吾は是等の材料で今後の研究を積み重ねねばならぬのである、尚ほ又今回渡邊某なる人が妻方面の山で拾つたものであると云ふ壺を持つて來て見せた、それはボタンの墨繪が一ぱい描いてあるもので八百年許り前の物と思はれるので恰度高句麗に於て發見するものと系統が同じである、燒きは確かに日本のものであるが或は朝鮮のものを模造したものであるまいかと思ふ若しサウとすれば朝鮮との交通關係をするに好適の材料たるを失はぬ

△鏡と玉 今回掘出した鏡は人と龍と虎を彫出してあつて神人龍虎鏡とも云ふ可き鏡である又天体十二宮らしいものを型取つて出ているが尚ほ研究を要す可きものと思ふ勾玉は翡翠で大きく珍らしいものである、多くは大きい勾玉になると上の方に刻がつけてある(終り)

■本縣の古器物を露太公の臺覽に供す 一九一六(大正五年)一月一九日(水)朝刊「四六一〇号」五頁

此程内藤博士及今西文學士來縣の際西都原に於ける第二號古墳を發掘して得たる珍器漢鏡一個曲玉二個管玉及び切子玉十數個を今回來朝の露國皇帝御名代ゲオルギ、ミハイロウキツチ太公殿下の臺覽に供する事となり昨日嚴重荷造の上京都大學を向け發送したりと

■富高に古墳發見(上) 一九一六(大正五年)一月二五日(火)朝刊「四六一六号」五頁

昨年五月本紙上に掲げ報道して置いた富高村河野善助氏所藏定家卿色紙に就き本社支局主任可水河野駒三氏は此古歌の富高にあるは古き時代何等かの根據なければならぬと之を確かめん爲苦心して居た處が昨年の暮手塚鐵骨氏は富高金山の技師兼顧問として來た氏は礦物學の外古墳に興味を有し其造詣頗る深く宮内省の増田于信氏其他有名な古墳關係の諸博士と親交厚く屢議論を戦はし其論旨考證の精確なるに敬服せられて居る人物なれば現に大和や攝津、紀州邊に於て顧みる者なき蜜柑畑や崩壊せる丘塚から漢織呉織の墳墓及其他各種墳墓の證跡を明かに研究したなど氏が古墳に貢獻した勞は多大なるものである可水は鐵骨と來往中氏に依頼せば右の色紙の由來考證も明かにならんとて先平發掘せし土器勾玉などの出た富高水車附近(地名ハヤマのモト)の岩穴を示した氏は之は横穴式百穴で其數千あるも亦二十三十あるも斯る穴を百穴と呼ぶ石斧にて掘りしもの之と種類は異なれど伊豆青森各地にあり珍しからずと斷定した(序に歴史研究家の爲め富高に百穴あるを紹介し置く草場(戰場の跡)西の窪松林中にも横穴百穴あり)氏は夫れよりも草場から龜崎に至る地質研究中フト麥畑の中に甘薯蔓や蕎麥莖など取散らした圓形の芝生の塚に出逢つた氏の眼は光つた直に卷尺にて測れば正しく圓墳の方式に合ふ南方を見渡せば二間餘高さの小松茂れる丘あり茲に上れば藁を積んだ小さき社殿がある若宮さんといふ地祇社である丘亦正しく三重圓墳なり氏の顔色は輝いて來た可水を伴ひ來り古墳の講話をなしつゝ麥圃の徑を南に辿る内所々に墳輪の破片を見出し大に喜び上方を仰ぎ見れば茶樹を取繞らした圓形の小高さ丘なれば上り見しに之亦驚くべき立派なる三重前方後圓墳である此時氏の喜悅の狀は形容し難い程である今は此三重其麥が作つてある所は削り擴げて畑になつて居る氏は躍り勇むで歸り地主石川淺氏に交渉せしに快諾を得て一層力付き之に亦右入費一切を負擔すべしとの特志家醫師岡村純二氏の顯はるゝあり諸方面トントン拍子に捗つたから本月二十一日畑を清めて穴を掘り初めた(富支)

■横瀬の古墳 志布志中學校教諭 瀬之口傳九郎 一九一六(大正五年)一月二六日(水)朝刊「四六一七号」五頁

鹿兒島縣下薩隅の地は、從來古墳就中瓢形古墳の存在して居らない事を以て學界に信ぜられて居た(勿論遺物の存在は認められて居た)然るに、昨年薩南串木野村に於て、瓢形古墳が發見せられ、今春は又、栗田茂治氏に依り、大隅國肝屬郡東串良村に於け

る、古墳群の發表せらるゝあり、余も亦、同國贈答郡大崎村横瀬に於ける、瓢形墳を調査したので、薩隅の二國はこゝに古墳の存在を以て見らるゝ事になった譯である、今大崎村の瓢形墳に就て述べ、考古家諸君の御參考に供し、併せて御教示を仰ぎたいと思ふ。

大隅國有明灣頭なる、志布志より南西三里にして、大崎村に達する、村は海岸に瀕したる、一つの大きな村である大字に横瀬といふがあつて、海岸を隔てたる、十町許の田圃中に、一つ小丘大塚山といふがある、これが今述べたい瓢形墳である。

墳は南々西に面し、プランは、前方後圓である、前方部の徑約三十二間、クビレ部徑約二十八間、後圓部徑約四十間而して縱徑は、實に六十間に達する後圓部の高さは、八間程でもとは今少し高かつた者と見られるが以前に發掘されて、頂上方數間の平地をなし、槲の露出がある、墳は其太さに於て、今回内藤博士一行の、西都原に於て發掘したる第二號墳に、相つゞ程の者でしかも其封土が完全に保たれて居る

墳は陪塚を持たぬ、又濠がない、併し前方部より十數間を隔てゝ高さ一間程の、臺地をなして居るのを見ると、此間が濠址らしく覺ゆるのである、左右の二面は田圃能く開け、後方は少しく隔てゝ人家となり、全く濠の形をとゞめぬ。

右槲は後圓部の頂上に、其葺石を露はして、縱横であるが、規模は割合に小さいと見た。

余は今此處にて發掘したる、埴輪圓筒と、今一つの埴物に就いて御紹介したいと思ふ。

圓筒は、後圓部七八合目の邊りより出たもので、第一圖の如く、現存の高さ一尺六寸、全體の高さ凡つ三尺、位と想像される厚さは七分乃至八分で周圍は下より一番目の箍の上に於て二尺九寸五分を算する上部は多分開いた形のもゝと推する胴側の孔は圖の如く同高の處に相對して四つある更に上部にも孔のあとがあるけれども二個か四個かは分らぬ此四つの孔を有する點は他普通のものゝ異り餘程興味あることゝ思ふ多分は此墳側には埴輪を二重に置かれたことが彼應神天皇惠我藻伏岡の御陵（二重）其陪塚（三三）等の様ではあるまいか但しは排列の狀を異にしたものか兎に角本品は其太さの點だけでも發掘數品中有數のもゝ彼東大人類學教室に藏する處の埴輪圓筒（徑四尺二寸七分析木縣發掘）に次ぐ程のもゝと思ふ尚ほ圓筒の他の破片に依ると第二圖の様な形に沈み彫で模様が表はしある。

次に第三圖の様な破片が見出されたこれは板狀をなして居るから無論圓筒ではない矢張一種の埴物で彼大和國磯城郡田原村で見出された桶様の者ではあるまいか（大野沼田共著の日本考古圖譜第八版參照）沈み彫で圖の様に模様の表はしてある事は圓筒と略同じだ圓筒と比べると厚さは餘程薄くして四分位しかない何分一小破片であるから實體の想像が六ヶ敷い大方の教を仰ぎたいのである。

こゝに薩隅の地にかく古墳の存在を併せて大崎古墳の埴物に就いて御紹介申上

げた次第である。

■富高の古墳發見（下） 一九一六（大正五年）一月二八日（金朝刊）「四六一九号」五頁
前述の塚の配列は前方後圓墳の三重は少しも損じて居ない其頂きは削り廣げ他の二重も共に麥畑になつて居る三重の頂の直徑は十四間中層下層に又半徑二間半位宛廣い北の圓墳の附近中に三つ四つ之と一寸形の似寄つたものがある大分は壞されてあるから後日の調査に譲るが或は六人塚であるかも知れぬ今は上記三つの墳に就き調査するのである成るべく原形を損ぜぬ様に最も注意して掘手にも其旨を含ませて着手した初めの内は専ら埴輪の破片が點々として掘り出された圓筒埴輪の沈み彫紋様物や縁の波狀の裝飾ある破片などが重であつた朝鮮土器の大なる破片もある石斧石庖丁石鏃などの破損物も現はれた有志や一般市民の同情が加はつて來て有力なる後援を與ふる様になつた夜業をせんとした時など其熱誠なる同情には感謝の至りである又古墳保存會が村有志に依り團結せらるゝ勢になつた富高に斯る高貴の墳墓を有するは村の祖先として榮譽であるとの感は此事業を村事業にすべしとの論を唱ふる者が續々と起つた左もあるべしである掘り進むに従ひ次第に矢先が出た直劍三尺七寸位のが出た研究の大資料となるべき勾玉模様薄手の一乳鏡が出た能く繪に見る不動尊の携へ居る如き双刃の直劍（指揮刀）が出た旗本の印になる鉦先と之に附したる御旗（芭蕉の織維にて織りたるもの）の一小片が出た之は水銀と石灰岩の間に今日迄消へざりしものと見ゆ各品とも朱を注いだ跡が能く認めらるる村内聞き傳へ來るもの多く學校兒童教師等踵を接して來るに熱心なる鐵骨氏は一々之れが學術的説明を與へ大に古墳尊重の感懐を興させて居る次第に發掘は進んで研究の進路を一步一步進めて行く茲に初めて後圓部石槲の葺石に達した此葺石は千枚岩を疊んだものであるが不幸にも地震の爲に葺石が槲内に一部分落ちて居る茲を掘りて出たものは石槲の上に直劍二尺八寸位の折れ葺石の一部を除いて其の石の疊方により細長き袖無し石槲なる事が知れた其處より前の鏡と同じ模様の夫より少し小形（直徑三寸位）の一乳鏡が出た此の二つの鏡とも乳に通じた芭蕉の紐がある其れから色々の矢先きが澤山な事出た兩刃の直劍が出る兎が出る前の鏡は丁度兎の上にある此處より考證の材料となるべきものは此後にあるのであるが恰度此時細島警察署長は縣廳の命令に依り此事業の中止を命じた興奮せる村民の失望は此の上もない併し官命抗し難く暫らく時期を待つて此事業に縣營にするか或は從來の繼續を許さるか何れにしても此の古墳の主を明かにして村民が此處に守社を建設せんとする願望を遂げさせたい夫れより群衆せる村民は鐵骨氏に就き夜に入暫くの間は其熱誠なる説明を聽いて居た此稿は此に暫く筆を擱く（富支）

■古器物書畫展覽會 一九一六（大正五年）一月六日（日朝刊）「四六二八号」五頁

富高古墳保存會にては舊正月の小閑を利用し古物や古文書書畫の展覽會を富高新町岡

村氏宅に開催すべく目下其準備中なりと

■展覧會の成績 一九一六(大正五年)二月一〇日(日)朝刊「四六四一」四頁

本月十三日より十六日迄東曰杵郡富高小學校に開催の同村郷土史料展覧會は毎日五百名乃至六百名の入場者にて何れも珍しき物を見たりと満足の體なりハマヤのモト横穴から出し管玉、金環、土器、石斧、錘石古城鼻より出し兜、鐙、劍、「」鏡等は土地の昔を物語るもの多し石川清氏出品ふくべ集は富高町の舊家大瓢堂梅賀庵の瓢に關する全國の雅人墨客の贊を集めたるもの並に古瓢芳賀成美氏出品同氏祖先宛淡窓の書簡安藤武次氏出品長三洲書青木昱一氏出品眞著俳句集等は今回展覧會の郷土史料の重なるものなるが此外に古文書は寺社又には舊家にあるなれど急速の催しで之を借り集め陳列し得ざるを遺憾とす一体今回は郷土史料展覧の趣意が徹底せず書畫器物の出品のみ多かりし重なるものは左の如し「中略」等重なるものにて此外に刀劍五十口位出品ありたり

■大隅の古墳 日向古墳の南進 一九一六(大正五年)二月一〇日(木)朝刊「四六三二」五頁

去月廿六日の本紙に『横瀬の古墳』と題せる記事を見て翌廿七日大隅地方を視察すべく出張せる谷口炭山氏は一昨日歸宮せり其の談する所の要旨は如左

▽是れまで薩隅地方には古墳の如き上古の遺物は殆んど絶無かのやうに思はれてゐたのであるが宮崎縣に於ける古墳調査の影響を受けて鹿児島縣下の官民有志も大に注意を惹くことゝなつて所々に弗々發見するやうになつたのであるが余が今回視察せる地方は貴紙に依つて發表せられたる大隅の贈嶽郡が目的地なりしも隣接せる肝屬郡に進み入て却つて視察の要領を得たのである

▽順路は都城より九里にして志布志に達し更に西に向つて三里大崎町に達するのである彼の横瀬の古墳といふのは大崎町から南に十餘町田間に隆然と横はれる大塚山と唱ふるもので全長は瀬之口教諭が報じたやうに約六十間位の前方後圓形で後圓部には多數の埴輪圓筒が露出し其中には重ね菱の紋様などもありて本縣などには絶無の珍品である、而も中央の頂上には花崗石を大きく四五尺にも打歛いで一枚にした蓋石が幾つも載せてある棺槨が露出して居る往年誰れやらが掘つたのことで狼藉を極めて居る、陪塚も有得可き筈であるが墳上より附近を見た所では夫れらしいものも無かつたが多分圓墳であつたが故に村民のために打壞されたものであらう

▽夫れより數町西に向つて進めば肝屬郡東串良村となるが此の郡境の邊より瓢形や圓形の塚が右方の村端に點々として散在し約二里にして字新川西といふに達する、其所に大塚大明神と唱ふる神社があつて、それが全長八十間もあつたらうと思はるゝ、前方後圓の大古墳で、神殿と拜殿の間なる廊下の下には大石槨の花崗石の蓋石が並べられ

て其の蓋を取り去れば、内には考古上の資料が豊富に充されて居るやうに思はれた拜殿の下にも寢棺の形を成した石が露出して居て實に一驚を喫せしめた

▽大崎村や鹿屋などにも古墳が點在して居るといふも大隅平原に於て古墳の最も多きは此の大塚神社を中心とした附近で瓢形のものであつたやうであるが圓塚の如き其數幾十あるか實に夥しいものである其の中の一二に就ていへば頂上には花崗石の蓋石があつて凝灰岩を人工に長方形に削り成した棺石などが出て居るのもあり又或大根畑には長九尺幅四尺もある蓋石のみが畠の中央に露出して居て或者等が三四人で其の蓋石を取除けて見やうとしたが容易に動かすことが出来ず此儘に打棄てゝあるとのことであつた、要するに贈嶽、肝屬二郡に於ける古墳の多くは棺槨が露出して居るので調査上には頗る便利であらうと思つた

▽此の三郡の古墳所在地は有明灣に沿ふた海岸近くであるから宮崎郡でいふならば檳村字江田、山崎等のやうな位置で砂交りの土寧ろ砂が多いので古墳も壞れ易いのである、且つ斯る灣に臨んだ大平原の中央に古墳叢の遺されてあるは學者の最も注目すべき要點であつて、一般遺物の示す所では南那珂郡福島などにある古墳と同一形式であるかた天孫種族の遺物たる日向系古墳の進入であると評して宜しからうと思ふ

▽それから意外に思つたのは大崎町にある妻萬神社又妻神社とも唱ふるもので木花開耶姫を祀つて居る創建は詳ならずといふも寛治頃(八百廿年前)か若くは夫れより以前に屬する考證がある此の妻神社の建つて居る高い丘から前面に展開したのが肝屬平原でそれに累々たる古墳が分布されてあるのである、併しながら此の妻萬宮は兒湯郡の妻神社を本宮として居るので此れ等の事迹に就ては頗る有益なる考證を得たのである猶携へ歸れる古土器破片等の參考資料は總て徴古館に出品する云々

■古塚より數千金 眞偽は確かならず 一九一六(大正五年)二月二五日(金)朝刊「四六四六」五頁

兒湯郡新田村新田原に石船塚と稱する古來由緒ある古跡あり昔年佐土原藩政時代此地附近は放牧場を建設したる處にして同塚は飲水場を設け多數の牧馬を收容したる傳説あるミカゲ製縦八尺横四尺位の奇形なる宏壯石造船二個今尚存在しあり今を去る十數年以前多數の金屬を發掘窃取したりとの風評ありしが近來又復同塚より價數千圓に相當する金銀類を何者の所業にや或夜窃に人知れず發掘窃取せりとの不思議なる怪聞あり眞偽不明なるも何れ後日精探の上詳報する時あるべし

■古墳に刀劍 一九一六(大正五年)五月七日(日)朝刊「四七一六」五頁

已記西曰杵郡三田井字吾平原に於て新に發見したる横穴古墳は其後役場吏員に於て細密其古墳内の土塊に就き検査する所ありたるが勾玉及び管玉等は出でずして只刀劍の破片を發見したる迄なりと

き所より腐蝕せる直刀大小二本、蓋付土器二個、其他渦巻の模様ある土器破片を掘出したるは既記の如くなるが右は昨日宮崎署に届出でたるが發掘場所は圓塚の形狀を備へ居たる由にて同署よりは直に發掘場所の地面及び發掘物の形狀を圖面に取りて之を宮内省に送付せり

■史蹟名稱案内記 一九一六(大正五年)五月(七日土)朝刊「四七三六号」二頁

本縣にては今秋迄に本縣下の史蹟名勝案内記を出版することとなり其の編輯執筆を若山甲藏谷口章藏の兩氏に附託したりと

■古代遺物の保存 一九一六(大正五年)五月(三日)水朝刊「四七四〇号」五頁

前世界動物の遺骨が発見せらるゝを以て有名なる宮崎郡瓜生野村にては曩に一たび谷口史蹟調査員が踏査せる結果として全村殆んど土器畠にして高塚及び横穴古墳を併せ數十を有し縣下に於ける稀有の古蹟地なりと聞き村長日高幸吉氏は捨置難しとして各區長を招集して保存上に就き注意する所あり且つ一方には川瀬書記をして試みに古墳の現状等を調査せしめたるに最近何者かの爲めに發掘せられし形跡あるなど愈よ捨置かれずとして再び谷口氏の調査を受けるまでは常置番人を置き絶へず巡視せしむることと發掘及採取の禁止制札を建つるなど周到の注意を施すに至れりと云ふ想ふに幾多の古蹟を有する縣下各村に於ても斯くありたきものなり

■妻ゆき 一九一六(大正五年)六月(六日)火朝刊「四七四六号」五頁

◎四日、穂山社長が茶臼原孤兒院や西都ヶ原の古墳を見るから一緒にいかぬかとの事、社長は十一時五十分發で僕は之に間に合はず三時發に乘込む可なり蒸し暑い日であるが窓を排して東を眺めてゐると風は海から森、森から畑を越へて車窓に入り連日局裡で颯颯してゐるのと違つて極めて快い、二等室は唯一の一人、話對手も無いので唯東を眺めてゐるばかり、遂に妻迄無言の行で打通す、

◎驛で茶臼原から歸る社長を待ち合はせて、五時に近く俾を備うて史蹟研究室に行く、社長も僕も初めて見るのである、案内せられて發掘した土器を見た、史蹟研究室と名のある以上、材料も相當にあるものとばかり思つてゐたが、来てみれば其建物は立派なのに比して、内容の貧弱さ加減、少し何とか出来さうなもの、来て見る者は建物や廣大な庭園よりは、内容をこそ望むであらう、次で前の養魚場を見る金魚が躍つてゐる、是が昨年の縣會の大問題となつて、大分油を絞つたり絞られたりした材料かと思ふと微笑せずにはゐられなかつた、

◎此所を辭して坂道を車上に揺られながら進む、此邊り線深く山陰で頻りと老鷲が囀つてゐる、今年櫻の咲くのも知らず、あはたゞしく春を送つたが、今初夏此處に鶯を聞かうとは思はなかつた坂を上りつめると土の黒い平原が眼前に展開する、そして

古墳が散在してゐる、先づ鬼が窟と云ふを見る牽強附會な傳説があるさうであるが屈に入つて見ると、大石巨岩古人の仕事の規模の大いに驚かされる、猶専門家の話を聞いたならば大に得る處があるであらう、此邊り人家一軒も無く、眼に入るものは、近く一面の平原遠く四方の連山ばかり、一仙境の觀がある、

◎御陵墓參考地になつてゐる瓊々杵尊咲耶媛兩御陵を拜す、車夫の先導で殆んど頭も没せんばかりの荊棘を押分けて進む、二陵とも此邊では最も大きい様である、他日史家が實地内部に迄及んで考證する場合眞偽は判明する事があらう、我々は今唯其陵土の宏大に驚くばかりである、

◎三宅地方に進んで國分寺の趾を見る木食上人の彫刻と云ひ傳へらるゝ佛像の巨大なる、此儘荒廢に歸せしめるのは誠に惜しいものである、此邊一帶の風光の美しさ、宛として一幅の油繪

◎一巡して妻町に出で、一旗亭に上つて晚餐を認む、膳上の香魚は生きてゐる様、先づ初物の箸をとる僕は嘗て明治三十一年に一度妻に來、次で四十年再び來て其變化に驚いた事がある、今又九年振で來て見ると、町並の店々の飾付など又隔世の感がある、時の力と汽車の開通は妻をして斯くせしめたのであらう、

◎八時廿五分の終列車に搭じて歸路に就く、佐土原から飛岡百四十七銀行常務、肥後支店長、廣瀬千代女將の一行六名が飛込む、急に歡聲一室に湧き宮崎に着いたのも知らなかつた。(菱)

■宮崎だより 野井穂山 一九一六(大正五年)六月(七日)水朝刊「四七四七号」一頁

●西都原は妻町の西南數丁にして達する可き、一帯の高丘上の平原也、其の地勢最も幽雅にして、其風光亦頗明媚也

●是地由來古墳を以て天下に聞こゆ、所に丘狀を為して散在する者、其數幾百なるを知らず、就中俗に所謂大山陵又は男狹穂塚と稱する二大古墳に至りては最人をして驚異せしむるに足る

●身丈に餘る雜草を排し、網の如き蜘蛛の巢を拂つて其西方の一陵に攀づ、高さ五十有四尺にして陵形圓にして其の周圍實に三丁四十五間也。

●陵外廻らすに一大塹堙を以てす、其の幅員八間にして、其の延長又た實に五町四十餘間を數ふ。

●壕外更に胸壁を繞らし其の高さ約一間にして其の幅約九間、其の延長約七町に達す。●本陵と相距る四十有五間にして、いわゆる女狹穂塚と稱せらるゝもの有り、其の陵形頗る伏瓢に類するもの、外、諸事概ね前者に倣ふ。

●兩陵皆紛草雜木鬱然として繁茂し、殊に全山(敢て山と云ふ)悉く老松枝を垂れ天を摩す、宛然たる一大森林也人をして眞に自然の山中に在るの思ひ有らしむるも、殆ど其の墳墓たるを得得せしめざるもの、又以て其の規模の宏大を想ふに足る。

●明治三十年兩陵共に御陵墓參考地として御料地に編入さる、人稱んで前者を瓊々杵尊、後者を木花咲耶姫の御陵となすも、素より未だ其の考證なし。

●抑も庶民の墳墓に土を盛るは、大化改新以來之れを禁ず、是の故に叙上の古墳が大化以前即ち今より一千二百七十一年以前の古墳に屬する事は明瞭也

●記者は一種莊敬の感に打たれつ、陵墓を後にして歩を西都原東北端の國分寺址に進む。

〔以下略〕

■郡長會議指示の内容（二） 一九二六（大正五年）六月一九日（月）朝刊「四七五九号」一頁

一、史蹟勝地記念物等の調査保存に關する件

史蹟勝地古墳其の他由緒ある記念物及天然物等は皆に學術上の資料たるのみならず或は尊祖の美風後進の志氣を激勵振作し天然の美を尊び郷土愛重の情趣を敦くせしむる等地方民育上裨益する所極めて大なるものあり從て之れが調査保存の緊要なるは今更
多言を須ひず殊に本縣の如き我國史上特殊の關係ある地方に於ては其の要更に切なるものあり之を以て曩に事蹟調査員を設置し又史蹟研究所を建設して年々學者を聘するあり更に近く史蹟調査員を加へて之れが調査保存に努めつゝありと雖も之を以て直に縣下全体に亘りて効果を収むるは頗る至難の事に屬す各位に於ても又夙に此點に考慮せらるゝ所あるべしと雖も克く町村當局者並學校教員神職その他青年團體又は地方有志の物を勸奨して舊蹟並に天然記念物等の湮滅頽廢を防止し進んで之を顯彰保存に努められむことを望む

■史蹟保存會發會式 一九二六（大正五年）七月一九日（水）夕刊「四七八九号」二頁

兒湯郡下穗北村にては村内に在る史蹟名勝を永遠に保存し以て古史の研究に資し一面祖先崇敬の觀念を普及する目的を以て村當局有志者間に史蹟保存會なるものを組織し昨十八日之れが發會式舉行に付元田内務部長は新坂屬を隨へ臨場の爲め一番列車にて出張即日歸廳したり

■發會式狀況 一九二六（大正五年）七月二〇日（木）夕刊「四七九〇号」二頁

兒湯郡下穗北村史蹟保存會發會式は所報の如く一八日午後二時より同村青年會發會式を兼ね下穗北小學校寺崎假校舎に於て舉行一同席定まるを待つて吉野村長の挨拶則松校長の勸語奉讀村長の會規約朗讀の後元田内務部長の訓示小野原郡長の告示谷口史蹟調査吏の穗北附近の名勝古蹟談等あり午後五時半頃閉式したるが當日の來會者は二百餘名に達し頗る盛況を呈したりと因に閉式後石川亭に於て元田内務部長の歡迎會ありたりと

■瓜生野村古蹟保存會 一九二六（大正五年）八月五日（土）夕刊「四八〇五号」三頁

最近高塚古墳廿基、横穴古墳五十口を發見したる瓜生野村は去二日同村役場に有志總會を開き隣村大宮村と同じく古蹟保存會を組織し會長以下顧問等を推選せり而して同村は前世紀の遺物遺骨など發見せられたるもの多く且つ天孫種族の遺物も發掘されて所藏するものも又尠からざるより柏田町直純寺境内に古物陳列館を建て一般の縦覽に供すべく併せて決議したりといふ〔以下略〕

■古蹟視察 一九二六（大正五年）八月八日（火）夕刊「四八〇八号」二頁

目下來宮中の仁保博士は六日新聞警察部長久保田大宮村長谷口炭山の諸氏同伴來庄三輪村長の案内にて本村四十八塚中有名なる天皇塚及び院の塚銚子塚上長塚下長塚觀音塚等を視察し尚稻荷町竹井新氏の所藏に係る古器及び頭蓋骨等を閱覽即日歸宮せり

■古蹟保存會必要 一九二六（大正五年）八月八日（火）夕刊「四八〇八号」二頁

本庄村に於ける古墳は四十八塚以外數年前發見せる飯盛區の横穴等全村に涉り散在せる古蹟古蹟無數にして從來當局者の注意に依り十分の保護は行届きつゝ有るも何様民有地に散在する事として無知の所有者に依り元形を損じ或は立木等の伐採等行はれざると保し難く斯くては村の誇りたる舊蹟をして何等の價值ならしめ遺憾千萬なるを以て此際瓜生野村等の所置に鑑み茲に具體的一つの團體を組織し官民一致協力以て發掘物の保存及び古墳等の保護に力めん寄々協議中

■仁保博士視察 一九二六（大正五年）八月九日（水）夕刊「四八〇九号」二頁

來宮中の京大法科教授仁保法學博士は五日宮崎町附近六日瓜生野生目七日大宮住吉櫛の各村古蹟古墳を視察し同日午後三時半より師範學校講堂に於て『實力の養成と開化の眞意氣附來縣の目的』の題下に三時間に亘る講演ありたる〔以下略〕

■史蹟保存會 一九二六（大正五年）八月九日（水）夕刊「四八〇九号」三頁

兒湯郡下穗北村に於る史蹟保存會は會長に小野原郡長を戴き同氏より去日同村内に居住する有志者等八十餘名に對し評議員を囑托せしが會合は來る九日下穗北役場内に開き種種打合をなすべしと

■穗北古蹟保存會 一九二六（大正五年）八月二二日（土）朝刊「四八一二号」二頁

去九日午後二時兒湯郡下穗北村役場樓上に於て穗北古蹟保存會評議員會開催し議員約三十餘名一同着席の上會長小野原郡長開會を宣し直に古蹟保存に要する經費に關し協議し左の通り制定し尚ほ役員を選舉左の如く決定せるが經費總額五百五十圓餘内下穗

北村より五十圓餘は他より醸出する事となりしが今回の経費は本年度丈の費用とし毎歳の費用は廣く一般の寄附を仰ぐ事とすべしと

一金五百五十圓四十錢

内

金八圓八十錢杭木二百二十本代、金三圓六十錢竹木三十六本代、金三十五圓張金貳丸代、金十八圓八夫四十五人分、金五圓標柱五本代、金百圓案内札十本代、金二圓揭示案内地圖、金五十圓案内記、金百圓雜給、金十三圓逢初川通路費、金十五圓八十錢陳列箱代、金五十圓豫備費、金百九十六圓石運搬費並彫刻代

〔以下略〕

■仁保博士と熊本 一九一六(大正五年)八月一三日(日)夕刊「四八二三号」二頁

目下本縣下北部の古蹟踏査中の仁保博士は西臼杵郡より阿蘇地方を視察する由なるが右に付き熊本は考古資料に豊富なるを以て同博士の來調を望む旨傳請方昨日熊本縣知事より本縣知事へ電報ありたりと

■仁保博士視察 一九一六(大正五年)八月二五日(火)朝刊「四八一五号」一頁

昨日午後三時過來延したる仁保法學博士は龜城館に投宿本日は谷口本縣史蹟調査員を隨へ染矢東臼杵郡書記の案内にて延岡南方の史蹟を視察したり

■仁保博士談 一九一六(大正五年)八月二〇日(日)朝刊「四八二〇号」一頁
史蹟調査として來穗したる仁保法學博士は曩日宴席に於て左の談話を試みたり

〔以下略〕

■谷口史蹟調査員 一九一六(大正五年)八月二一日(月)朝刊「四八二二号」二頁

去る十七日三田井に於て仁保博士と決別したる谷口史蹟調査員は昨夕來延日野屋に投宿明日富高に向ひ出發の筈なり

■談話會 一九一六(大正五年)八月二一日(月)朝刊「四八二二号」二頁

十七日點燈後附近重なる官民七八名高千穂村役場に參集し史蹟保存會設立の件に付談話會を開き尙來穗中の史蹟調査員谷口炭山氏を招き史蹟調査上に付一場の談話を乞ひたりと

■天孫降臨に關する卑見を述べて祝辭に代ふ 文學博士 喜田貞吉 一九一六(大正五年)八月二三日(水)夕刊「四八二三号」三頁

日州新聞滿十五周年に際し、余に一言を徵す、乃ち天孫降臨に關する卑見を陳じて祝辭に代へんとす〔後略〕

辭に代へんとす〔後略〕

■三浦氏一年祭 一九一六(大正五年)九月五日(火)朝刊「四八三五号」一頁

故三浦敏氏の門下生四百餘名は資を合せて其墓碑を建設することゝなり花崗石の墓標一基註文中なりしが今回竣工したるを以て來る十日の午前中に建設工事を終り午後一時より臺雲寺に於て一年祭を執行すべし

■古鏡發掘 一九一六(大正五年)九月七日(木)朝刊「四八三七号」一頁

高千穂村大字押方後藤萬平は字本組舊學校附近開田の爲め開墾中叢雲形古鏡一個を發掘せりと

■古墳累々 一九一六(大正五年)九月二一日(月)朝刊「四八四一号」二頁

本村字西之別府の高原西南端縣崖の邊りにある大小の古墳及古塚數十其形狀又種々あり大なるものは瓢形にして高さ三丈餘周圍三町余に及ぶ而して其首部は隆起して圓形をなし尾端何れも東方に延長す年代及由緒等容易に知る能はざれども其形狀及配置等より察して或は高貴の陵墓に非ざるかといふものあり里人は之を御塚と呼び居れり

■古墳基本調査 一九一六(大正五年)九月二一日(月)朝刊「四八四一号」二頁

近來古墳熱の勃興に伴ひ恣に古墳を發掘する者或は古墳研究に名を藉りて竊に發掘したり曲玉管玉其他の古器物を密賣するが如き不埒なる者を出すの傾向あり縣下各地に在る多數の古墳中之等の徒輩に荒され既に原形を存せざるに至れるものも少からず斯くては我建國の誇とする古國日向の古蹟を損壞して祖宗の遺趾を尋ぬるに由なく學者研究の材料を亡失するに至り遺憾少からざるを以て縣當局にては古墳舊蹟の保存取締に關する方針を確立する爲め近く郡町村をして是等古墳の基本調査を爲さしめ特に著名なる古墳所在地に就ては縣より吏員を派し協力して慎重の調査を遂げ本年十二月末日迄に縣下全部の調査報告を徴し是に依りて古墳の所在地現狀及び傳説其他必要の事項を登載せる臺帳を調製し更に學者の研究調査を待つて之を完成し以て古墳取締保存の根柢を作る由にて一兩日中各郡長に對し夫々調査方針方法並びに報告の形式を具したる通牒を發する筈

■穂北古蹟保存會 一九一六(大正五年)九月二一日(月)朝刊「四八四一号」二頁

同會長は左記事業遂行の爲め郡費補助を申請し九月九日許可の指合ありしと

事業の概要

イ相楽川、ロ御船塚、ハ兒湯ノ池、ニ無戸室、ホ御座井戸

以上の靈地に對し周圍に土壁を繞らし柵を建て道路を鑿して通行の便を計り標柱を建

て、靈蹟由來を記す等一端の事業に着手すべしと

■古器物發見 一九一六(大正五年)九月二〇日水朝刊「四八五〇号」一頁

當町廣島宮崎驛停車場附近に建築さるべき運輸會社倉庫敷地は去一七日より地均し工事に着手したるが同日地中より土棺らしきものを掘當て其中より矢の根劍の折れ土器銅鏡の破片等を發掘したる由なるが何分心得なき者の發掘に係る爲め形狀を悉く損じ居たりと

■黒漆銅の漢鏡を發見す 宮崎町廣島古墳 一九二六(大正五年)九月二二日(木)夕刊「四八五一号」三頁

宮崎町廣島停車場より左折して老松通となる其直左方に長峰伊作氏所有(土地賣買株式會社)の畑あり約一畝歩許り隆然として穹狀に盛上れる所あるは廣島に現存する古墳の一なりとは神都宮崎第一篇に其寫眞と俱に説く所なりしが果然同古墳より未だ曾て有らざる珍品を發見したること漸く此程に至つて知れ渡れる事實あれば左に報ぜむ(前號古器物發見の記事は誤間に付取消す)二三日前同町上別府八幡神社々掌杉田種氏が廣島なる長峰伊作氏令弟同與一氏方へ腐蝕して寸斷となりし鐵鏃長劍土器の類と共に鏡の破片らしきものを持参したるに何ぞ圖らん其の鏡らしきは黒漆銅と稱するものなるにぞ其出所を問ひたるに今を去る四五年前同村の黒木萬次郎翁が在世中或日此品々を携へて同社務所に杉田社掌を訪ひ斯んなものを横小路の塚の上より日清戰爭頃掘出せしことありて其儘家に藏し居たるも崇と云ふものもあり氣にかかつてならぬから持参したとの事なるにぞ杉田氏も其の儘貫つて置きしものが即ち目今長峰氏の有となりし古墳より出でたるものなりしと

谷口炭山氏の談に依れば其の黒漆銅の漢鏡は其の名の通り眞黒にして漆を塗れる如く折れ目より其實を見れば全く銅色なくして白きこと銀に等しく、表に銅の綠鏽を吹き出して所々に小さな塊をなし其他は黒く光りて全く漆を塗れるに似たり而して長峰氏の古墳より發見したるものは周圍約一尺二寸の鏡を三分したる其の一部分の形を成せるものにて一見したる所では到底鏡とは見られざるものなれども其の左右の兩端に小さな紐通しの孔を穿ちしは胸部にでも懸たる三角形の鏡にては非ざりしかと思はる裏面には普通漢鏡に見る鱗形や龍の文様を刻し楷書の文字らしきものさへ書かれてあり實に珍しきものにて自分も日向に於ける古鏡類は數百種見たれど未だ曾て斯くの如き眞黒の謂ゆる黒漆銅鏡を見たるは今度が初めなり尤も長峰與一氏が支那より持歸れる幾百點の古銅器骨董品中に於て此の黒漆銅の劍(長約二尺)同じく石山明生鏡(徑四寸)それから舞樂に用ゐる小山鐘と稱する漢時代のものは見たることあり東京大阪ではいざ知らず九州などでも餘り此の黒漆銅器を秘藏するものは多くあるまいと思はるゝ程のものなれば我が宮崎縣などに於ては未曾有の珍品なるべし漢鏡中には唐宋時

代の模造品も少からざれども此の黒漆銅は如何にしても模造し能はざるものなれば斯く二千年以上も經たる黒漆銅の漢鏡を藏する古墳が如何に久しき年代を經たるものなるかは想像に餘りあるべし黒漆銅器を秘藏する長峰與一氏の邸に隣接せる古墳より縣下未曾有の黒漆銅の漢鏡が現はれて主人の長峰氏を驚かせしは實に奇縁といふべしと語れり

猶長峰與一氏の談に依れば元來この黒漆銅は支那にても多く漢以上の時代を經たる古墳ならでは發見し難き程に珍重さるるものにて其の黒色を呈するに就き二説あり一は銀と銅とを合金したる其合金作用に依るといひ一は死體に長く接觸すれば斯く黒漆の如き色を呈すといへども種々の考證に依れば全く合金作用に基くものには非ざるべきか青緑の鏽は外皮を突き破つて内部の銅が酸化して表面に現はるゝとのことなれば幾千年を經るも全面が腐蝕することなくして點々瘤狀の鏽を斯く現はしつゝありとのことなり天津日報の主筆方若氏は彼の羅振玉などと俱に支那の考古學者なるが其の云ふ所も以上の説と一致し居たり、兎に角二千年以上を經るに非ざれば斯る黒色を呈せざる漢鏡が私が住む宅地の附近から掘出されしに至つては實に驚かざるを得ざるなり夫れに就き近時谷口炭山氏が古代に於ける日本文化の中心が日向にして其の日向の中心は我が宮崎地方なりと主張するに種種なる考證もあるよしなれども余は今此の黒漆銅鏡が脚下より現はれ出で、實物を一見するに至つて切實に炭山氏の主張が輕視すべからざるものなることを感ぜり云々

■御陵墓參考地手入 一九一六(大正五年)九月二七日(木)夕刊「四八五六号」二頁

兒湯郡下穗北村西都の原所在御陵墓參考地男狹穗女狹穗の二大陵は目下雜草繁茂し外柵の設けもなきを以て今回宮内省と協議の上大々的の手入を行ひ雜草を刈拂ひ障害木を伐採し周圍に木柵を設くる事となり同地青年會員六十餘名に之を請負はしめ廿六日より着手に付日吉縣屬は監督指導の爲め廿五日午後より同地へ出張したり

■古墳發掘 一九一六(大正五年)一〇月一〇日(火)朝刊「四八六九号」二頁

三田井町より字後川内に通ずる里道開鑿に際し吾平山陵を距る東方約一町の箇所にて横穴古墳を發掘せり同所附近は屢々古墳を發掘する所にして未だ他にも夥多點在する模様なるが今回發掘の分は入口より本穴まで一尺五寸戸口二尺にして古墳は横七尺奥行九尺高さ一尺五寸より三尺稍や長方形にして古墳内部は粘土を以て張り詰たる完全なるものなりしが其粘土中より刀劍の破片發見せり

■最古の土器發見す 一九一六(大正五年)一〇月二二日(水)夕刊「四八七〇号」三頁

宮崎町字牛圓〓憶原の中心地點〓
宮崎町字上野町一丁目牛圓元自動車の停車場跡に氷滑りの模型館を建てんとて朝日

通の枝松熊五郎氏が人夫を督し地均し中九日午前九時頃土器の完全なるもの又は其の破片の類が夥しく現はれたりとして取敢へず警察本部に届出縣廳より谷口炭山氏臨檢したるに數十個の古土器は悉く薄赤の同質にて瓶や壺の類のみなりしよにて同氏の云ふ所に依れば發掘場所は宮崎町寧ろ日向を通じて最も古き櫛が原の中心地點たる黒迫屋敷といへる所に舊藩時代までは附近の中之講及牛園には七八基の古墳を存し今でも古土器の破片は夥しく散布しつゝあるのみならず同所附近には種々なる石器が發見され天孫種族以前の先住民が棲息せる確實の孝證を有する古跡にて今回發掘したる土器は總て石器時代の遺物にて天孫降臨以前に屬するものなれば云までもなく神武天皇以前の古土器として確かに二千年以上を經たるものなり先年廣島に於て發見された黒漆銅の(漢鐘二千年以上)といひ今度の古土器と云ひ宮崎地方が最も古き神迹なることを證明するものなり云々

■宮崎の古跡 三屋敷 一九一六(大正五年)一月一二日(木)夕刊「四八七号」三頁

今回古土器を發掘したるは其古跡の一つ
去九日宮崎町上野町一丁目元自動車會社跡から完全なる古土器を發見したがその場所が當地に於て最も古い三屋敷の一なる黒迫屋敷の中に屬して居ることは昨紙所報の如くであるがその三屋敷といふのは何處々々にあるのか史蹟調査委員の谷口炭山氏に就いて訊くと

この宮崎には三つの古跡がある、俗に三屋敷と稱して居るのであるが、權大屋敷、吟代屋敷、黒迫屋敷、この三つがソレである、今回古土器類數十個を發掘したところは其の中の一つである黒迫屋敷に屬し考古學上尠なからぬ參考資料を得たのである、三屋敷は孰れも古墳の跡のあることゝ地上に赤や白又は鼠色の古土器の破片が夥しく露見して所謂▲かわかけ畑(學名では土器包含地といふ)をなして居ることなどが一致して居るが、そればかりでなく、特に吾人の珍しく思ふのは孰れも三屋敷のあとに大きな柿の木のお樹が現存して居ることである就中今尚ほ完全に育つて居るのは權大屋敷の柿の木で其の周圍約一丈あつて誰れにも目に着く大木である併し幹が大きいだけ根元の方は空洞になつてゐる此木は足利尊氏が植えたものだと言ひ傳へて居るけれども殆んど信ずるに足らぬ妄説に近い、黒迫屋敷に残つて居る▲柿のお樹は周圍がやはり一丈位はあるけれども二間位の高さの所で伐つて仕舞つてあるので未だ生ては居るものゝ前の權大屋敷の柿の木のお樹の如く完全ではない、吟代屋敷にもやはり他の屋敷にある様な柿の大木があつたにはあつたが惜しいことには何でも日清戰爭の頃道を開くとかでこの由緒ある柿のお樹を伐り倒したさうであるので、くろざこ、ぎんでなどの名稱の起源を調べてみるとくろざこはもと位の境といったものである、ソレといふのは八幡神社の縁起に依つて初めて知ることが出來たのであるが▲其縁起に徴すると

宇佐の宮人海宿禰爲降なるものこの地の字城(今の縣廳所在地)に來住し、現在の八幡神社のある土地に應神天皇を祭神とし宇佐八幡を祀つた際位の境にあつた小渡別府橘之神社を合祀したとあるそこで位の境とは宮崎附近の那の邊にあつたものだらうかと色々詮索してみると今の黒迫といふのが位の境であつたことが判つた、即ち位の境がくろざことなり更にくろざこと轉訛したものであつて▲黒迫の文字は後世くろざこの音韻に故當て嵌めて用ひたものと思ふ黒迫が位の境であり而してその土地が八幡神社と關係の淺からぬ譯を知つた私は昨年の夏同神社の例祭のときは態々黒迫に神輿を駐輦して戴いて今迄忘れられて居た歴史的事實を彰明する方法を講じて貰ふことにしたのであつた次ぎにこんでとは權大宮司の住まつて居た宅地であつたので權大即ちこんでといふのだとは附近住民の傳ふる處である、モウ一つのぎんでとは吟代と書き傳へて居るのであるけれどもその▲起源に就ては詳でないが蓋し後世の俗唱に相違ない、然るに茲に宮崎から住吉あたりまでも廣く言ひ傳へられた傳説に「朝日かがやく夕日の本柿の木三本目標」といふことがある、柿の木三本とは三屋敷の柿の樹を指したものと云ふがまた「朝日かがやく夕日のもと」といふのは即ち「朝日之直刺國、夕日之直刺國」の俗訛した言葉で、この傳説の意味を考察するに朝日直刺國、夕日之直刺國たる笠狹の御崎所在を言ひ傳へて居るのではあるまいか▲柿の木三本あるあたりが笠狹御都の偉蹟ではないかと思はれるのである、兎に角三屋敷は尊い由緒のある古跡たるには相違ないのである、尚ほ是麼ことがある黒迫附近にある野村元文氏未亡人宅の裏あたりから杖の棒墓地(縣廳裏にある)の間をみさき通と稱して居るがこのみさきとは陵のことで陵りの轉訛である、三屋敷から出る土器は、祝部土器又は古墳土器といふもので天孫時代若くはそれ以前の遺物であるが黒迫屋敷からは土器のほかに尚ほ石刀、石斧、錐石、凹石石棒の如き▲石器類も出で來たことがある、又權大屋敷は土器の多いところから一に土器家ともいひ土器家稻荷といふ小祠が今猶ほある、この尊い宮崎の古跡を適當なる方法を講じて保存したいのは私の年來の願望である云々

■三屋敷記事補遺 一九一六(大正五年)一月二三日(金)夕刊「四八七号」三頁

昨紙所載宮崎の古跡三屋敷の記事中本文七行目「資料を得たのである」に續き左の記事を漏脱したれば茲に補遺す

三屋敷の場所は今町内の那の邊に當るかと云ふと黒迫屋敷は上野町一丁目字中之講の川北クワの住んで居る宅地を中心とする附近で、權大屋敷は表上別府故原田嘉吉の宅地に當り吟代屋敷は八幡神社より東約一町唯今高妻安氏の住んで居る所が中心で八幡神社の境内もその屋敷内に屬するのである

■史蹟顯彰會 一九一六(大正五年)一月一五日(日)夕刊「四八七号」二頁

既報の如く去日村長及び村吏員會合を機とし田尻、川中両縣會議員當地有志家等郡會

議事堂に参集し本郡内に於ける史蹟名勝を顯彰するを目的とする史蹟顯彰會組織され會長に若松郡長を推し各村長に支部長を囑託し夫々適當なる活動をなす事に決議せり

■古墳より石器出づ 福神屋敷の珍現象 一九一六(大正五年)一月二日(土)夕刊「四八七九号」三頁

宮崎郡清武村字下加納福元勇吉氏(本縣農商課員)が教務課囑託谷口炭山氏の研究資料として提供せる幾十の破片は何れも土器と石器の類にて頗る珍しきものあり右に就き谷口氏の説に依れば去十七日下加納附近調査の序を以て福元氏宅後の丘上俗に福神屋敷と稱する約一町歩位の畑地全部を踏査するに土器の破片一面に散布し且徑一寸乃至二寸の基石が露出せるものと推斷せり福元勇吉氏が所藏せる薄赤の土器(大甕、甕、平盆)及石器(石斧)「砥石」の破片は同氏宅後の崖即ち此の福神屋敷の一部が崩壊し其中に埋めありたるものなれば同丘上に散布する古物と質を同じふし全く同時代に屬するものなるを疑はず再言すれば古墳に埋めし副葬品と見るべき考證確實なるものあり然るに石器數種を交へ居るのみならず薄赤の土器類には繩形紋様を附し純然たる石器時代のものなれば何れより見るも全く其の時代に埋められたるものと見るの外なき形跡なれども周圍の狀況と其の土器の總てが薄赤の祭器の副葬品と同形のものにして、而も一纏めに纏めて、埋藏しありたるに依り考ふれば之も古墳の中心なりしものと思ふの外なし、果して然らんに實に珍しき現象にして天孫種族の古墳より石器時代の石器や土器が現れたるなり尤も斯る事實は獨り下加納福神屋敷に限れるに非ず下北方村名田神社背後の圓墳、蓮ヶ池の横穴古墳、穗北祇園原などにも塚の中より數種の石器及土器などを發見したることもあれば一新事實の發見には非ざるなり云々

■瓜生野古墳案内 一九一六(大正五年)一月二日(日)夕刊「四八八七号」三頁

宮崎郡瓜生野村にては同村古蹟を調査し縣内外人士の踏査の便に供せん爲め小冊子の案内記を編纂せるが其目次に峰原原頭の孤墳、吾平山、岩戸、生野八幡、竹尾山、福智神社、竹島山王樂寺、笠置山直純寺、宮崎城墟、橋通、竹原川「鶏足、原伊屋ヶ谷、岩戸神像、小原觀音、マンモスの臼齒、龍の爪、高塚の所在地、桶穴古墳、古物陳列場所等あり同村のに蹟は曾て東京帝國大學鳥居龍藏氏、京都同大學の内藤博士「同仁保博士及び宮内省事務官兼諸陵寮主事五味均平氏實地踏査あり漸く世の注目を牽き居る際として右案内記は同村古蹟を知るに至大の資料たるべし

■記者團の神都めぐり 西都原から青島迄 一九一六(大正五年)一月二日(木)夕刊「四八九〇号」二頁

〔前略〕

◎閑靜清淨な三宅神社は一行の心を牽く、井上宮司から寶物の拜觀をさせて貰つた上再び神社の阪下待つて居た馬車に投じ高原の黒土道を進んで御陵墓參考地につく

◎一行の一部は男狹穗塚陵下の平面になつた草原の上で谷口委員の説明を聴き一部は井上宮司の案内で塚の上に登つて行く一木一草に感動する一行の人々は秋の日煦々と照る清淨な境域に於て暫し低徊願望立ち去りかねて居た

〔後略〕

■谷口章藏氏逝く 一九一六(大正五年)一月一日(日)夕刊「四九〇六号」三頁

炭山谷口章藏氏は先般病を獲て療養中なりしか容態激變し十七日午後十一時を以て遂に不歸の客となれり遺骸は十九日午後四時自宅出棺灰の木墓地に埋葬する由なり氏は本縣に於ける操觚界の先輩にして元の宮崎新報を始め屢新聞雜誌の經營に當りて縦横の才筆を揮ひ亦考古學上の智識に富て古蹟開發に力を盡し選ばれて本縣史蹟調査員となり以て今日に至れり氏亦俳論に精しく狂歌亦其得意とする處なりき享年五十有四

■舊跡保存に就て 一九一六(大正五年)一月二日(火)夕刊「四九〇八号」三頁

南那珂郡吾田村長吉野輝氏は往訪支局記者に語りて曰く本郡は鶴戸神宮を中心として神代人皇時代に屬する古蹟舊蹟と目せらるゝ箇所尠しとせず然るに廢藩置縣後多くは民有地となりし爲め古代の形狀を變し耕作地として切崩し或は埋没せるありて之が調査をなすには古老の記憶又は傳説によりて調査するの便益ありと雖も現在の儘にて放任する時は年と共に調査の經路を失し國史の正確を欲き將來の一大恨事たるべきを以て心あるもの大に考究すべき事共也云々

■濱田學士等來縣 一九一六(大正五年)二月九日(土)夕刊「四九二五号」二頁

京都帝大助教授文學士濱田耕作氏梅村助手の両氏は西都原附近史蹟調査の爲め本年末來縣來年一月一日より十五日迄史蹟研究所に滞在調査を爲す由なるが東京帝大には目下縣より交渉中なりと

■兩大學よりの史蹟調査員 一九一六(大正五年)二月一日(火)夕刊「四九三五号」二頁

本縣史蹟調査の爲め京都帝大文科助教濱田耕作氏及教務囑託梅原末治氏來年一月一日より約十五日間西都原史蹟研究所へ出張の事は既報する所ありしが東京帝大よりは文科講師原田淑人氏來る廿六七日より一月中旬迄出張の旨十八日縣廳へ通知ありたりと

一九一七(大正六)年

■古墳發掘調査 一九一七(大正六)年一月五日(金)朝刊「四九四九号」二頁

東京帝大文科講師文學博士原田淑人氏は本縣古墳調査の爲め舊臘三十一日來宮去一日新坂縣屬の案内にて西都ヶ原史蹟研究所に赴き目下同地滞在在中なるが帝大の文科教授文學博士濱田耕作氏は三日來宮四日新坂縣屬同行西都ヶ原へ出張五日より古墳發掘調査を行ふ由尙は福岡帝大中山醫學博士及び京大の梅原助手も不日來宮の豫定なりと

■兩博士の歴史講演 一九一七(大正六)年一月五日(金)朝刊「四九四九号」二頁

京都帝大教授文學博士原勝郎氏は一兩日中來宮史蹟調査に従事する筈にて日州教育會にては同博士及濱田博士に乞ひ來る十日頃歴史講演會を開く計畫なるが期日場所等は未定なりと

■公人私人 一九一七(大正六)年一月五日(金)朝刊「四九四九号」二頁

▲荒木孟氏(教務兵事課長) 古墳發掘視察の爲め五日より西都原へ出張

■公人私人 一九一七(大正六)年一月八日(月)朝刊「四九五一号」二頁

▲荒木孟氏(教務兵事課長) 七日西都原古墳發掘視察に赴く

■原博士一行講演 一九一七(大正六)年一月九日(火)夕刊「四九五二号」二頁

京都大學文科教授原勝郎博士、東京大學文科教授濱田學士、同原田學士の一行は史蹟調査の爲め來縣中なりしが右調査終了につき九日午後一時縣會議事堂に於て大講話會を開き以上諸名士の時局及び歴史に關する講話を聴かしむる筈にて何人の聴講も差支なく一般の來會を歡迎する由

■原博士一行講演 一九一七(大正六)年一月一〇日(水)朝刊「四九五三号」一頁

豫報の如く冬季休業を利用し史蹟研究の爲め京都帝國大學文科大學教授文學博士原勝郎同助教文學士濱田耕作東京帝國大學文科大學講師文學士原田淑人三氏の來縣を機とし日州教育會主催となり九日午後二時縣會議事堂に於て講演會を開催せり荒木主事の開會の辭に次で濱田學士は『戰時の歐洲所見』と題し氏が戰爭前より戰時中の歐洲

各國を巡遊したる實歴談を一時十五分間に亘り詳述し次で原田學士は『支那六朝文化と我古墳埋沒物』と題し眞摯なる研究を發表する事四十五分間に於て次で原博士は『地方史の研究』と題し滑稽諧謔を交へて興味多き講演を是亦四十五分間試みて壇を降る次で荒木主事閉會の辭を述べて午後四時五十分散會せり當日の傍聴者は堀内知事元田内務部長以下諸官廳實業家諸學校職員各縣立學校上級生六百名の多きに達したり猶講演の要は十日夕刊に報ずべし

■博士一行慰勞宴 一九一七(大正六)年一月一〇日(水)夕刊「四九五三号」三頁

元田内務部長荒木理事官學校長其他民間有志者二十餘名は史蹟調査の爲め來宮中の京大大原勝郎博士同原田淑人東大濱田耕作の兩博士及び京大助手梅原末治氏一行を今九日午後六時より紫明館に招待して慰勞の宴を催す由因に一行は十日午後十二時四十分宮崎驛發列車にて歸京の途に就く筈なりと

■戰時の歐洲所見 文學士 濱田耕作氏 一九一七(大正六)年一月一日(木)朝刊「四九五四号」一頁

【省略】

■支那六朝文化と我古墳埋沒物 文學士 原田淑人氏 一九一七(大正六)年一月一日(木)朝刊「四九五四号」一頁

【省略】

■博士一行出發 一九一七(大正六)年一月一日(木)夕刊「四九五四号」二頁

來宮中なりし京大文科教授原文學博士同助教濱田文學士東大講師原田文學士及び梅原京大助手の一行は十日午前七時五分宮崎驛發列車にて歸東の途に就けり

■日州教育講演會 一九一七(大正六)年一月二日(木)夕刊「四九五四号」二頁

昨紙所報日州教育會主催の講演會に於ける原博士講演の要左の如し
地方史の研究 文學博士 原勝郎氏
【省略】

■原博士一行慰勞會 一九一七(大正六)年一月一日(木)夕刊「四九五四号」三頁

豫報の如く九日午後六時より紫明館に於て來宮中の原博士一行の慰勞會は開催されたるが當日は應下有士約二十名參集發起人元田内務部長の挨拶、原博士の答禮ありて宴に入り一同打解けて懇話し十時頃散會したり

■原博士等講演訂正 一九一七(大正六年)一月二二日(木)夕刊「四九五五号」三頁
 「省略」

■史蹟調査員後任 一九一七(大正六年)一月二八日(日)夕刊「四九七一号」二頁

本縣史蹟調査員は谷口章藏氏死去後缺員となり居り先般來後任者詮衡中なりしが日州教育會書記若田甲藏氏が此方面の趣味を持ち殊に熱心なる研究家なれば同氏を教育會と兼ねて史蹟調査員とする事に略ぼ内定し居る模様なれば近く之が任命を見るに至るべし

■史蹟調査 一九一七(大正六年)二月二二日(木)夕刊「四九五五号」二頁

本縣史蹟調査員若山甲藏氏は二十一日より東諸縣、兒湯兩郡へ出張したるが今回の調査箇所は左記五ヶ所の豫定なりと

- 一、本庄四十八塚の調査(三日間)
- 一、都於郡村高屋の調査(三日間)
- 一、上穗北村古墳の調査(三日間)
- 一、新田村古墳の調査(二日間)
- 一、國分寺址及國府址の調査(三日間)

■國分寺跡整理 一九一七(大正六年)二月二五日(日)朝刊「四九八八号」二頁

國分寺跡は千廿年前の古蹟なるが熱心なる若山氏の調査により先づ銀杏樹の保存(目通り二丈六尺廻り)より礎石の数の改めに始まり二十二日より古瓦片の整理中なるが氏は先づ布目と縄紋の類別、唐草瓦、丸瓦の研究より入るべく人夫數名をして山と積める瓦片を一定所に出さしめ一々點檢し唐草瓦と蓮花瓦の珠數帶に從來の出土品に見ざる物ありて頗る興味を感じたるが尚ほ進みて地名研究傳説研究を爲して國分尼寺及び國府跡を定めんとの意氣込なるが吉野村長も贊助し渡邊古蹟翁も立會居れりと

■埋藏物發掘手續 一九一七(大正六年)二月二八日(水)夕刊「五〇〇一號」二頁

古墳及埋藏物の發掘に關しては屢訓令及通牒もあれども今尚宮内省へ届出ことなくして密に古墳の發掘を試み又ははる學術上の參考となるべき埋藏物を發見したるに拘らず法定の手續を爲さずして悉く之を所持若くは處分するが如き古墳の内容を非學術的に破壊する者往々有之斯ては未定御陵墓の調査上に支障を來すのみならず史蹟名勝記念物等の保存方法に付目下詮議中に屬するを以て是等調査の結了を告又は保存方法の確立に至るまでは原狀の儘存置するの必要ある者も之有古墳の密掘並に埋藏物不正處分の弊あるを認め之に對する防止方第三十七議會へ請願したる向きあり旁一層取締を要すべき儀なるを以て相當注意を拂はるべく尚今後古墳又は古墳と認むべき場所の發掘

を企圖し若くは學術技藝者考古の資料となるべき埋藏物を發見したる者あるときは既往訓令又は通牒の趣旨に依り夫々手續を爲さしむべき様配慮方永田警保局長より知事に通牒ありたり

■本縣の史蹟調査 一九一七(大正六年)三月六日(火)夕刊「五〇〇七号」二頁

本縣史蹟調査員たる若山甲藏氏は去る一日來庄本村役場書記川越平七氏の案内にて三日間に渡り村内に散在せる古墳の調査をなし尚各寺院宮永千代太郎氏其他二三の所藏に係る古物古書に付き詳細調査研究する所ありたりと

■整理地より石棺 一九一七(大正六年)三月一三日(火)夕刊「五〇一四号」三頁

繩瀬原開田地域に屬する北諸縣郡高崎村大字大牟田耕地整理組合事業地字平馬乘塚なる地區に於て此程地均し工事中傾斜地の凹所に最初縦穴を堀深さ五尺の底より高さ三尺幅三尺長さ五尺位の横穴を構成し其内に死骸刀劍等を納め入口を自然石にて疊み密閉しあるを發見したるが其蓋石が硬質のものを選り加工しあるより見れば斯道研究の材料にもならんかとて同村長東喜藏氏より若松史蹟調査員の許に通知し來れる由にて同氏は近く當地調査の爲め出張の筈なりと

■古墳發掘多し 一九一七(大正六年)三月一八日(水)夕刊「五〇二八号」三頁

近來兒湯郡新田村花園地方其他に於て古墳を發掘するもの多々ある由にて警察側にては目下嚴探中なるが右等の行爲は嚴重の制裁を受くべきものなれば各所有者は能く取締法規を遵守し違反なき様注意肝要なるべし